HUNTER • GIRL

一理

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト http://pdfnovels.net/

注意事項

は「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒ 囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致し ナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範 テ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。 この小説の著作権は小説の作者にあります。 このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タ 小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。 そのため、作者また

小説タイトル】

HUNTER·GIRL

Z コー ド】

N9247G

【作者名】

一 理

【あらすじ】

こに金寄越せ! モンスター でお困りの方はハンター にお任せ!ハンター 初級みつ

みつこ編~ (前書き)

主人公はあくまでみつこですw

みつこ編~

「金の・・・・・・匂いがするぜ」

た。 白い全身を覆うフードを身にまとった少女は、 縦長の横幅は短いまるでハムスター小屋のような家だった。 ある一画の店に入っ

カランコロン

中は狭いし古いし薄暗い、どこか『バー』 ココは飲食店でも銀行店でもない。 をかもし出している店だ

クエスト屋である。 そして彼女・・・・・・

ディダ・みつこ・MC (マイケルクリスチャンの略)

いる。 ちなみにこの長い名前に意味はなく、 彼女は『 みつこ』とよばれて

の 主 である。 長いカウンターの真ん中に鎮座しているのは、 力はたちの悪い客にラクガキされた。 ミニ・プチ・ この店『バー カナタ ኯ

システムなのだ。 ハンターにクエストを渡し、 クリアできれば報酬を払う、 そういう

だ。 つまり、 ハンターであるみつこは勿論、 クエストをもらいにきたの

なんかさぁ、 がっぼり !儲けれそうなんない?」

みつこは、 他のハンター の中でも一番の金の亡者であり、 みつこの

の髪の枝毛を捜す。 カナタはお茶をすすりながら、 ハンター 同期の中では一番稼い • • 緑色の帽子のから出ている長い自分 でおり、 完全スル・。 右に出るものは いない。

「・・・・・・。ロア、武器」

杖の先の大きな珠に付きまとうように小さな玉が五つ、 みつこの肩に乗っていた白い虎縞の猫が形を変え、 長い杖になっ その周りを

゙ あぁ!!待て待て武器化反対!!」

闘時などでは武器化するのだ。 希少でハンター この世界ではハンター トナーだ。 には特殊な相棒がつく。 には欠かせないパー 普段は動物型で、

居なくとも根性でどうにかする人も居るが、 稀だ。

わかった・ じゃあ、 ロア元のサイズに」

化魔法.... カナタも椅子からとび上がった。 ズなら武器化しなくても相手には大ダメージを与えることが出来る。 は不便なためみつこが生まれたときから持っている、特殊な大小変 みつこのパー 子猫サイズからいきなり大きなホワイトタイガーに変わった。 (これだけ)をつかって小さくしているのだ。 トナーはホワイトタイガーなのだが、 連れて歩くのに 元のサイ

「うわぁぉ!あちち」

微妙なリアクションだが吃驚した際にお茶をまいたらしい。

「まてまてまて、 しよし、 ロア!思いっきり噛み付いてイーヨオ STOP!クエスト渡すからさ、 でもちょっと...

「え?」

ギラン!!とロアの牙が光る。

「うううー・・・・・」

机に隠れながら紙を渡してくる。

戻ってくるまで守ってほしい・・ 「クエスト:森に咲いている太陽の花を取りにいきたい ・・えーメンドゥ」 ので取って

そもそも、 みつこがハンターになった理由は二つある。

二つ、他人の下につくのが腹ただしいから。一つ、金がかなりがっぽがっぽ儲かるから。

てさ」 まんま、 しかも、 「餓鬼のお守りかヨォー」 ご近所の五つ子ちゃんからの依頼、 依頼者:チルドレン..... って何?」 母にプレゼントだっ

間もなく文句を垂れるみつこにカナタは嘆息しつつ

「でも、金はこのぐらい.....」

と電卓を見せる。

あっらぁ 最近のお子様は、 意外と・

は?」いってらっしゃい。今から」しゃーないなぁ.....。」

カランコロン

折れたとたんに店の扉についた来訪者のベルが鳴る。 なんだか、どだばたと騒がしい足音がいくつもと聞こえる。

よかった!!クエスト今日中に達成できそうで!」

「ほんまやねぇ.....」

·.....。うん」

「 森に行くの楽しみだぜぃ!!_

「あはは!」

「皆騒がないの!」

'相からわず辛気臭い店だな、はは」

口々に紡ぎ出される言葉は騒音にしか聞こえない。

が、七人いるようですが?」 ź ; 3 可笑しいですね、 五つ子とは伺っておりました

その笑顔に心底危機を感じるカナタは、目を思いっきり逸らした。 切れる直前のみつこは、怒りマークをつけてカナタに微笑みかけた。 そんなこともお構い無しに子供たちは口々に囃し立てる。

'ねぇまだ?!」

「早ぅ行かんと、夜にしか咲かん花なんよォ?」

·.....。うん」

「はやく!森にいっこーぜぃ!!

かいってねーし」 だー う・ る・ せ・え!! しかも一人「うん」 L

とりあえず外に出て、 ロアの背に子供を乗せる。

「森だね!はいはい」

ことにした。 自分もロアに乗ると、 出発した。 森につくまでの間に誰が誰か聞く

「あたしが!最年長で依頼者の長女、アカ」

「長男だぜぇ!イスケだべ!」

(だべ!?)

゙・・・。末っ子」

「順に言ってけよ!」

「あはは!・・・他人キラ」

「他人かよ!今すぐ落ちろ!」

きゃあ!!止めてください!訴えますよ!」

彼女は次女のうりだよ、はは。 ア、 ボクは他人です」

うち、エリィ三女やねん。

引き連れ、 けだけではないだろう。 結局沢山居すぎて誰が誰か分からなかった。 一向は森に着いた。 鬱蒼と薄暗いのはきっと夜のせいだ とにかく余分な二人を

「で?太陽の花って何処にさいてんの?」

「ねーねー」

くいっと、 うりはみつこのフー ドの裾を引っ張った。

「みんな、おらへんで?」

「なに!!」

ば!!とロアの背中を見ると、 誰一匹として残っちゃいなかった。

「なんで?!はぁ!!」

まよわせーる まよわせーる・・・・・

サだ。 ぐるぐる目の先っちょぐるぐるひげの長い耳。

森に生息しており、 悪戯癖のあるモンスター。 森に入ったものを必ず方向音痴に変えてしまう、 捕まえることは、 ほぼ不可能。

「ぬかった・・・・・マヨウサか」

「え?どこにおるん?」

えているのだが・ 姿を見ることが出来るのも稀なことである。 みつこは何故か毎回見

ー ん? -

マヨウサと目が合う。 きゃっ!と木の陰に隠れてしまう。

「・・・・・・。とりあえず、四匹捜すか」

「六匹さがさへんの?」

契約書類のクエストでは五つ子のお守りだけで、 他人は含まれて

いない!!」

· · · · · · ·

「まぁ、一応捜すけどね」

訴えられたくないから。

んだ。 懐からビンを取り出し、中身を風に流す。 レは森に浸透するように消えていった。子どもは興味津津に覗き込 みったん賢いから損になることはしないの、 水のような粉のようなソ 賢いから。

「狼王のしずく、マヨウサ除けよ」「なんやのんこれ?」

マヨウサは狼王が苦手なので、 いが迷わせられて無駄な体力使うよりかわましだ。 これしか退ける方法がないのだ。 高

「え?末っ子って名前なのか」「末っ子やン!よかった~」「……。ぁ」

今度こそ逃がさないようにロアの背に乗せる。

そうだね、よかった」 あれ?はは、 はーい、あ!おにぃや」 降りるなよ、 いいね どうやらやっと出会えたみたいだね、 ねうり?

「おぉ?あほや」

にい

あと、

三人か.....うん?ロアどしたの?」

大きな木の上でなんかかっこつけながら叫んでいる。

「俺!サイキョー だぜえい !!」

はっきり言って、 強がりにしか見えない。

睨んでいた。 木下には猪型モンスター 事情は察した。 ブゥビィ が群れで溜まって上のアホを

とりあえず、 助けますか。

ロアはそのままでいいよ。

そこらへんの木の棒をつかむ。

「てや!!」

ばきぃ!!

ぶびー !!モンスターを武力だけで退かせる。

「さぁ、 降りて来い」

いい汗かきながら上のあほに声をかける。 この程度ならME一人の

実力でいけるし

聞こえない振りした。

さいこーだぜい

あっそ。じゃあいいよ、 ほってくから」

待ってください!マジで!!降りれナインデス!」

なんでカタコト?まあ、 いいけど」

みつこは木を蹴りつけた。

「きゃアー」

. 男のクセに女らしい声出すなっての」

地面にぶつかる直前にあほの服をつかんだ。

「うん、 ハイ、 たぶん」 ロ ア。 あとは?長女と?無駄に笑ってるやつ?」

探し回ってるわけにもいかないので、 らのほうが急ぎらしいし。 後で探せばいっかなぁーって……駄目? 太陽の花を捜しにいく、

「はーぁー.....ここ?」

せていた。 崖の頂上に月に相反する様にメラメラと真紅の炎のような花を咲か

「綺麗....?」

「あった!」

わ し し

子供たちは崖の上にあろうが関係なく恐怖を微塵とも見せないまま とりにいった。 子どもは気楽でいいですなぁ

「ハア やれやれ……っ!!!」

マヨウサがあらわれないと思ったら。 たる姿で立っていた。 みつこは凄い殺気を感じて振り返る。どうりでしずくの効力が切れる頃なのに、 そこには人狼属の狼王が堂々

もない、 狼王はこんな木の棒で倒せる相手でも、 とはないらしい。 しかし、 噂ではベテランでも倒すことは不可能らしい。 狼王は森の王たる気質ゆえか、 襲うときはたしか.....そう、 むやみやたらに人を襲うこ 初級ハンター 森を荒らされたとき

太陽の花をむちゃくちゃにされたときのみだったはず。

「花....。」

首を後ろに回して子供たちのほうを見る。

「なにしていらっしゃるの?」ぶちぶち・・・・・・ぶちん。「なーに?」

その言葉通り、むしってる

「むしってるー」

· · · · · · · ·

汗。

ガルゥゥ・・・・・。

静かに威嚇を始めた。これは、ピンチ!-

(まてよ?たしか狼王は無駄な殺生はしない んだっけか?)

なら、賭けてみますか。

ロア!!子供たち連れて逃げなさい!」

ガウ・・・・・嫌そうに首を振る。

「あたしなら、大丈夫」

そう笑ってると、

「おねーさまぁ 」と子供たちが言い出した。 うれしくねぇ

だいぶ渋ったものの、 ロアは主人の言葉に忠実に従った。

「ゴメン・・・・・。ロア」

狼王は座ったまま動かない。

· あんたダシにした」

狼王は別の仲間を呼んでロアのほうへ追いかけていった。

そう、狼王が狙うのは花をむしった子供たちのみ、 恐らくロアの足

ならば森から逃げ切れるはず。

逃げ切れさえすれば、 狼王も深追いはしない。 アレは賢い種族だか

50

「さてっと……残り二人捜すか……ん?」

ぱしゃぱしゃ・・・・・。

滝の音が聞こえる、 そちらの方向へ行くとブルー レディ

水の精霊が水浴びをしていた。 その横でぱしゃぱしゃ遊んでい

るのは依頼者。

......見つけた!」

頭をつかむと、 ブルー レディは満足そうに微笑んだ。

精霊.....めったにその姿を拝めないって言うけど、 はじめて見た。

青白く輝くその曲線美は見るものを魅了した。

ありがとう、守ってくれたんだね。

にこり、 白く細長い腕を伸ばし、 森の道を指差した。そのまま水に

姿を変え、消えた。

ばーいばい、あは」

あはじゃない!いくよ。

森の小道を行くと、 倒れている人がいた。

見ると依頼者長女。

「大丈夫?」

木の枝でつついてみる。

お腹空いた~」

とりあえず、回収。

森を出るとロアが飛びついてきた。 しかったらしい。 傷だらけのぼろぼろだ。 やはり無傷で逃げ切ることは難

おねえちゃ ありがとうごさいました―!』 'n ありがとう」

子供たちは素直にお礼を言うと、さっさとおうちに帰っていった。 クエストや『バー・カ』に入ろうとしたが。

『就寝中、 御用の方は明日の朝かメモを置いていってください。

と、すでに店はしまっていた。

就寝って!!まだ10時だっての!!おきろごらぁ

どかどか、 がちゃ 扉を殴る蹴るなど暴行を繰り返した後。

出てきた。

おば!お化けかと思ったよ」

長い髪が暗闇から出てきたので、 まだ寝る前だったのだろう、 といった。 いささか不機嫌そうだか、 貞 かと思って本気でビビル。 ハッキリっ

「帰れ」

がちゃ、扉が閉まる。

まてごら!! クエスト完了したんだから金よこせ!

「闇金融か?」

· だれがじゃ!!.

だんだんぼろぼろになっていく扉のポスト入れから封筒が出てきた。

クエスト完了報酬」

それから、メモ。

『帰れ』

ぴき

ムカついたので悪戯することにした。

次の日

「はぁーねむぅ・・・ん?」

『バー・カナタ』

・・・。増えてる!!??」

ろうかと、常々おもっていたみつこは『馬鹿・カナタ』になるよう バーじゃないのだから『バー』 に落書きしたのであった。 という看板はオカシイのではないだ

「ちくしょう!また油性かぁああ!!」

おわり。

出会い~リィシャ編~

ていた。 深い森の中、 ハンター みつこはクエストにより、 ドラゴン討伐に来

カナタ曰く

はおかしい。 「荒地や聖域などにしか棲息しないドラゴンが町付近の森にいるの _

した。 あと、 ということらしい。 悪さしているらしいので正式にハンター協会がクエストを出

いぶ慣れてきた。 しかしまぁフードに木の枝が引っかからないように歩くのにも、 た

なーんか、 いかにも~っていう雰囲気になってきてんすけど?」

蒼としてじっとりとしている。 最近ソレ系多くないッスか? いつもは神聖な雰囲気をかもし出していたような森も、 なんだか鬱

景気よくいってほしいもんだぜ、全く。」

と書かれているため、一度紙をもらったら、 条約項目1 ハンター協会はメンドっちークエストを依頼する割には、 い・少ない・評価も上がらない、誰もやりたがらないが、 00条にて『ハンターは渡されたクエストに従うべし』 嫌でも止めることは.. ハンター 報酬が安

.. 基本駄目なことである。

クエスト屋カナタは

紙を渡す。 クエストくれ」 故に、 というハンターには、 今回みつこはやるはめになったのだが.....。 詳しいことをいわず黙って それ

とにかく、みつこは嫌々森に来たので、 ラするのであった。 に逆上したハンターに『バー』 のうしろにカってかかれたらしいが。 鬱蒼とした森に余計イライ

゙まぁーったくさぁ.....、!!」

気配を感じて後ろを振り向く。

「もらったぁ!」

ロア!」

受ういる

せる。 後ろから降りかかる攻撃をロアに体当たりで自分に来ないようにさ

ばき.....。

が地面に落ちる。 ロアのほうが木の棒より硬かったらしい。 からんっと折れた木の棒

「だれだ!ハンター狩りか!!??」

みつこはロアを傍に寄せた。 لح 唸るロアの鼻先には誰もいない。

「すごい、すごい!!やっぱすごいなぁ!!」

物凄い賛美しながら上から人が降りてきた。

(あの一瞬で木の上に?)

やっぱすごいなぁ!かっこええわ!君!」

見える。 いるこの森で、 ショートヘアのボーイッシュな感じの少女で多分同じぐらいの年に。 気のせいだろうか、下級とはいえモンスターがうじゃうじゃ 来ている服は侍のような、巫女さんの様な着物に見える。 丸腰のように見えるのは。

だれ?」 え?だれ?」

いやいや、 聞いてんのコッチだから」

おれ?リィシャ !よろしく!!君強いよな!一回殺り合おうや」

「やだよ!」

・ え | |

る奴逆に見てみたいわ。 心底つまらなさそうに口を尖らせる。 いやいやそんな誘い文句で乗

「じゃあ!友達になろ!!俺ハンター」

「 あたしもハンター みつこ」

駄目なだっちょのリィシャととりあえず自己紹介を済ませ、 コにいるのかを聞いた。 何故コ

「クエスト、『ドラゴン討伐』に」

「あれ?あたしと一緒じゃん」

そうなん!あ!気をつけてな、 ココ迷うけん」

「そりゃ、そうだろ。マヨウサいるんだから。.

「マヨウサ?」

みつこにしか見えない謎のモンスター

「しらないの?今までどうしてたのさ?」

「んー?適当に.....あは」

いやいやいや、無理だからいつからココにいんの?」

「一週間前ぐらい」

「よく生きてるな!!」

か一つ違和感を感じる。 なるほど、 リィ シャが身軽なわけがわかった気がする。 なにか、 大事なものを持っていないような しかし、 何

゙ゟ

リィシャに足りないものが何か、わかった。

「パートナーは?」

、 え ?

リィシャは首をかしげた。

みたいな」 「え?じゃないから、 ハンターでしょ?パートナーは?ほら、 ロア

ロアを抱っこしてみせる。 武器化までして見せた。 MEの自慢です

「あぁ〜、おったよ」

「おったよ?ってなに?」

リィ シャはマイペースに「いやぁ~」 と笑いながら頭をかく。

「道探しに行かしたら、もどってこなくて!」

゙だめだなこりゃ.....。」

とりあえず、二人一緒のクエストなので、 協力し合うことにした。

「な、みつこ」

「ん?」

「『ハンター狩り』ってなに?」

「知んないの?あのね.....」

自分の下僕に追加したり、そー ゆう邪な心を抱いたハンターが、 獣から武器化するのは大変希少なので、売ったり、毛皮にしたり、 のハンターをおそい、パートナーを奪ってしまうのだ。 よるハンター 襲撃者のことを『ハンター狩り』というのだ。 ハンター につくパートナー は決してそこらへんにいるわけではない。 ハンターに 別

......わかった?」

「うん、たぶん.....」

わかってねーなぁこいつ。

「まぁ、ええやん。そんなこと」

自分からふっといて?

もう少しで、つくころなんだけど・

「どこに?」

なにしにきたんねん!」

「いて」。

! ! _

地響きがなりはじめた、 どうやら、 お出ましらしい。

「くる!ロア武器!!

ロアの形が杖へと変貌する。

「てか、リィシャ大丈夫か?」

「何が?」

「武器、ないだろ!」

自分の手と腰と頭を叩いた後。

「おぉ」

「だいじょうぶか?!」

大地からドラゴンが出現した。

も書いてないけどなぁ」 「大地からドラゴン出てくるなんて..... ハンター 公式本には一文字

いことらしい。 ハンター 協会執筆『ハンターの心得』 勤勉なみつこちゃん。 を読むが、 通常じゃ ありえな

した。 そのありえないドラゴンは雄叫びを上げた後口から火炎放射を放出

「**防壁!!**」

喜びで跳ねているリィシャ リィシャともども炎から守る。 なにがそんなに興奮させるのか、 大

「えーなぁ!おれもカッコよくやりたい」

やれば!?

容赦なく向こうの攻撃は止むことなく炎が排出され続けていく。

- くつ」

もたないかも.....。

「サル吉!武器」

「ウッキィー !!」

「あぁ?」

びゅうんっ みつこの頭上を物凄いスピードで超えていった。

「?・?・?」

にアタックしたらしいリィシャの武器は回転しながら主人の手の中 わけが分からずあっけに取られていると、 へと戻ってきた。 炎をわけてドラゴンの口

「リイシャの武器って、飛行攻撃型なんだ?」

目に、 その姿がサルへと変わる、 肩乗りサル。 まぁるい耳になぁがい尻尾、 愛くるしい

ない。 リィシャ はっきり言って、 の性格には会うが、 あってない。 リ イ シャの着ている着物にはあってい

「うき?」

っていうか、主人と似た性格しているなぁ。 こんなときにサルからバナナもらっ てしまっ た。 馬鹿なとこが特に。

「え?これ以上にないぐらいぴったりやン?」「てか、名前.....まんますぎろう」

きっと、 口の中にバナナ(皮付き)3・4個つっこんでる。 テキトーに考えたんだろうな ぁ サ ルがリィシャの

· ひゃうよ!!うふぃほ!」。あ?八ムない?ないよ!」・。 っあ!はふひゃい!!

牛男?」

後ろ振り向く。 ドラゴンが口を大きく開けて突っ込んできていた。

・・・・・・頭ん中、真っ白

たぶん・ 呆けていると、 物凄い速いスピードで何かが横切った。 リィ シャだ わかってる、

『妖刀村正』!!」

何処からもなく日本刀が現れ、抜き放つ。

ぴゅ

ドラゴンに、 線が引かれる。

その言葉と共に、 刃は鞘に収まり、 ドラゴンがずれた。

妖刀村正・ リィシャの真の武器?」

がものすごくいいもの、特異能力を持つもの.....。 的に優れているもの、 そして、生まれたときに『真の武器』と呼ばれる、 ハンターになる人には生まれつき特異な人が多い、 知恵が天才的で凡人を超越しているもの、 運動能力が突発 運

己の最大の武器

見られちゃった.....、 まぁいいや」

を持って出こと。

がるので戦闘時『真の武器』 己の最大武器は己のもつ力の度量を表しているので、 を使うということは.....まず、 弱点にもつな ありな

え?うん?」 うっ わー 強い んだな、 リィシャ 敵にまわんなよ?」

わかってない。

どうでも良さそうなリィシャみてたら、 ってきた。 まぁ いいや コッチまでどうでもよくな

いてて」

?

-!

ドラゴンから人語が聞こえたと思ったら、 の親父が汗を拭きながら出てきた。 中からハゲ・デブ・

よくみると、ドラゴンは本物ではなく機械で出来ていた。

「・・・・・なっ」

みつこの肩が震える。

なんで!!親父なんやねーン!!」

ロアを大きなハリセンに形を変えさせ、 ぶっ飛ばす。

「あちゃーーー」

っていいながら親父は倒れた。

すごいなぁ、 コレ。どうやってつくったん

・がふがふ」

「うきw」

ドラゴンの機械に感心している主人に否応なくバナナを口に嬉しそ

うに突っ込むサル。

「 はー はー 。帰るか」

リィ シャにそういって振り返ると、 リィシャの姿はなかった。

·.....なにしてんのん?」

黄色いものの山の中にいるであろうリィシャに声をかけると、 もうお腹一杯」ときこえた。 サル一匹嬉しそうに飛び跳ねるのであった。 いったいこの量のバナナ.....どこか 微かに

•

「 クエストかんりょー _

に入ってこようとしたリィシャが入ってくる前に足で扉を閉める。 クエスト屋カナタのところに行ってから大事なことに気がつく。 故

がらん!ごろん!

嫌な音でお客訪問のベルが鳴った。

たことにしよう。 扉の向こうでゴスッっていう音が聞こえた気がするが聞こえなかっ

何してんの?って言う顔でカナタがみつこを見つめる。

「報酬くれ!あたしに!!」

みつこの至った考え。

リィシャと協力、 イコール割勘(?)貰える金が!ただでさえも少

ない金が!!少なくなる!!!

そんな邪な心をよんだのか、 カナタは呆れた顔 つ ていうか、 無

表情な顔でみつこを見上げた。

「金、ちゃんと二人に同じ額渡すぞ?」

なよ~」 「え?そうなの?.....。 もー!リィシャなにしてんの!はいってき

若干涙目で入ってきた。 からんころん、 っと扉が開けるとおでこを真っ赤にしたリィシャが

「みつこ~なにするん~」

なにが?なんのこと!リィシャが勝手にぶつかったんだろ?」

カナタがリィシャに哀れみの目を向ける。

「.....。まぁ、はい」

クエスト完了報酬を二人は受け取る。

カナタは引き出しから分厚い本を取り出して何か記し始めた。

ハンターみつこ・リィシャクエスト完了、 あと....

二人なんとなく黙って聞いてみる。

「親父回収、これで十一匹目」

『多つつつ!!!???』

これが、 俗に言う『親父狩り』 と呼ばれるのであった・

なーんてね

終わり

出会い~リィシャ編~ (後書き)

すから 天然キャラリィシャトージョー。 またそのうち出てきます。 仲間で

31

んだよ・ ? んだよ・・・?あと、ハンターが弱くてもパートナーは強いんだよハンターって誰でもなれるわけでも、誰でも楽しめるわけじゃない

32

守護~ヤスコ編~

もに特殊体質をも持つ。 ハンター は『真の武器』 を持つものがなれる職業であり。 それとと

力があれば、気も強くなる。

まさに、彼らにとってハンターとは天職なのである。

んで、 力に驕っているみつこに、このクエスト」

「殺すぞ」

来たとたんにこの一言。 喧嘩売ってるとしか思えない。

「 金、...... なかなかだぞ?」

みつこの耳がピクリと反応する。

べ、べつに!きょ 〜みないけどぉ、どのぐらい?」

「……このぐらい」

「おぉぉぉおおおお!!!」

なんかやる気出てきた!きたきたきたきたきたぁぁああ

やる気MAX!!

・・・・・・ということで

「さむぅー.....」

やる気DOWN.....。

来た場所、 極寒の地。 クエスト内容、 見習いハンター 回収。 期間、

回収するまで。

「えー.....と何コレ」

全く。 カナタに参考までに渡された書類を広げる、 あぁ、手がかじかむよ

にやったっけ?」 「ハンター適性チェック?わー久しぶり!ハンターになる前のとき

ハンター 適性チェッ クアンケート

勇気はある。

どんなときもマイペース

意外と残酷

嫌なことでも、やるとなったらやる。

自分最高だ

な.....ふっ」 「『ハイ』か『いいえ』だったよね。 私は確か『ハイ』四つだった

そして回収人物の回答。

勇気はある。 いいえ

どんなときもマイペース いいえ

意外と残酷 いいえ

嫌なことでも、やるとなったらやる。 いいえ

自分最高だ いいえ

゙オール『いいえ』.....」

だからコイツからの情報は物凄くたまに役に立つ。 もう一枚の書類を見る。 カナタからだった一応クエスト屋兼情報屋 しかしたまに有

から見ても不適応だが、ヤスコの師でもあり、スポンサーでもある 今回、 やすいんや新屋。氏に押され、 回収するミニコ・ヤスコ・パチコはハンター 適性チェ ハンターとなった。 6 ック

やすいんや....新屋?」

厳しい新屋氏の指導のもとを家出。今に至る』 きているとは到底 逃げてきたって.....こんな極寒の地に一人で、 ヤスコ氏がハンターをやる気があるかといえば、 -しかもヘタレが生

あえて言うならこの寒い極寒の地にいるのは.....。 この白い大地にはテントもどこかの民族も氷の家もかまくらもない。 ペンギンのむれ

まさか、 なに~?」 ヤスコがペンギンってわけじゃあないだろうし.....

ヤスコはいったい何処に.....」

「なにぃー」

はは・・・・・。 幻聴が聞こえら (笑)

「もしかして現実!?」「よんだぁ?」

しかし、 すらない。 前も後ろも右も左もいるのはペンギンだけで、 しかも居たならば気がつくはず。 人間の人影

いっす」 「てか、 ペンギンさんあつまりすぎっす..... さすがにちょっとこわ

ちょっとくじけそうになる。

『がぁあああ!!』

ロアが元の大きさに戻って唸りあげる。

「!!!」

するとペンギンは吃驚してぺちぺち、 ていった。 すいーっとお腹で滑って消え

何匹か氷の隙間から落ちていった。 馬鹿だ

「チョット可愛い」

匹だけ、 しかも、 かなりでっかい一匹だけ残っていた。

····· MASAKA?」

おそるおそるペンギンに近づく。

「や、やすこ?」

「うん?」

ヤスコはハンターじゃ なくペンギンでした?!

「ぁ、もしかしてやすぃんや新屋のパートナーとか」

師匠のことしっとん?だれなん??」

にゆっ

「ぎゃわっ!?」

ペンギンの股の下から女の子が顔出した。

・・・・・・自重しましょうよ。

あたし、ハンター初級のみつこ」

うち、ハンター見習ヤスコ.....何のようなん?」

連れ戻しにこいクエスト、 一言で言えば回収しに」

だれを?」

「あんたを」

「なんで?」

ゑ..... なんでって

「え?えーと?.....クエストだから」

どこにいくん?」

「さぁ?やすぃんやんとこじゃない?」

質問攻めばっかだな、 今度はペンギンの背中に回った。 と思っているとヤスコが素早く股から這い 寒くないのかなとか思ったり

[・]うち、帰らんきん!海里!!」

呪いの銅像か何かか貴様!? いままで物動じず静かに目をふつんでいた、 ペンギンが目を開く。

し、 !

口が大きく開かれる、直感で横に大きくそれる。

ごぉおおおおおお

吐いた氷で床をつるっつるに凍らせてお腹ですべっていった。 な!?こ、このペンギン口から凍り吐きやがった!!さらに自分の ススケート? アイ

「ま!待てぇえええ!!ロア!武器!」

ロアの体が武器に早や変わりする.....が、

つるっ・・・

ぁ

手がかじかんでちゃんとつかめなかった上に、 しちゃった。 ゴメンねロア. 落

「のぁあああ!?」

ą ずごぉおお!!猛スピードで海里が過ぎてい 武器化したパートナーはもちろん動けない。 杖と離れ離れにな

「ロア!通常モードに.....!!」

ごぉおお !氷の炎が邪魔をする。 目の前でロアが武器のまま凍る。

「ロアぁ !!

ているわけでは、 ハンター 適性チェックオールアウトのヤスコがこれを考えて命令し ない。

高さが憎らしい。 すべて独断で、 かもかなり狡猾な判断を下す。海里自身のLVの

畜生」

詐欺師がぁああああああ!! 口汚い言葉をはき捨てる。 クエスト料金が高いわけだ。 あの無表情

「ん?もう一枚書類が」

闘能力と頭脳を兼ね備えており、 7 なお、 つえええ!!どうすれば.....。 ヤスコは海里、 絶対防御を頼り、 ん? プロ級ハンター三人を斥けている』 このパー トナー が高い 戦

ものすごー く小さな、 本当に小さな存在がちょこんと目の前にいた。

「鼠?こんなところに」

物凄く寒そうだ、 こっちが自分の存在に気がついたのを確認して紙

を取り出した。カナタからだった。

『相手のステージで勝てると思うな』

ಶ್ಠ そんなことは分かってる、 当たり前のことをいわれてイラッってく

9 海里は強い、 ん?まだあんの?つか、 知ってるっつってんだろ!!ってうわぁああ!」 でも、その土俵から出ればロアのが強い。 どっからだしてんのあんたら」

海里が突っ込んできたのを結構無理やりな格好で避ける。

「 むぅー..... 諦め悪いなぁ、帰りなよ」

帰れ?帰りたいよ。 Ų 疲れてきたし。 寒い ロアは凍りづけだし、 かじかんで痛い

・・・・・・でもな、

「ここで帰るのはみつこの名に傷がつく!それ以上に・

ここまできて、 やらっれっぱなしでかえれるかぁあああああああ

!!!

鼠が紙を見せる。

でもこんなにハイスピー ドじやぁ

『5秒だけ、止める。』

「悪いけど、強制退場してもらう!」

海里が突っ込んでくる。

調子に・ ・のんなよぉおおお!!」

きた。 海里は一瞬躊躇したように見えたが、止まることはなくつっこんで 今はカナタの策に乗るしかない、今度は逃げずにどっしり構える。 さすがだねその心意気.....だが

- 笛の、音?)

ビクン!!海里が止まった。 ヤスコが焦る。

か、海里?!」

止まった。急いでリーチをつめる。

海里がこちらが反撃に出たのに気がつき、突進してきた。

おりゃぁあ!」

カナタが書いた紙では、 こういう作戦だった。

『小さくしてしまえばいい』

小さくする。

どす

「ぐふっっっ」

込みながら起き上がる。 小さくなっても、 突進の余韻は収まらなかった、 お腹に海里を抱え

いてて・ あれ?ヤスコ・ ・ い た

乗っていたものが小さくなった上にハイスピ 落ちたらしい。 雪の中に埋まっている。 ものすごくお間抜け ドでとんでいったか

「いてて!かむなペンギンやろう」

「海里~かえしてぇええええ」

こうして、無事 (?) ヤスコを回収したのであった.....。

•

「もぉおおお、ヤスコぉぉ!!」

す` ____

かなり嫌そうにヤスコは顔をそらす。

とうございます。本当」 「もぉおお、ほんと人様に迷惑かけて~ごめんなさいねぇ、 ありが

「おかん」

違います!!まだ、そんな歳じゃありません!

やすいんや新屋はとっても五月蝿かった。

「新屋」

「ナカタもありがとう~」

· カナタじゃ !!.

いった。 めずらしくカナタが怒って目を見開く。 そして諦めたように簡潔に

店、アケッパ」

• きやあああああ!大変わたし帰らなきゃ、 それじ

急いで扉のところまで走っていく、 と止まった。

両親に言いつけるから」 「そぅそぅ、ヤスコ!帰ったら店てつだうんよ!じゃなかったらご

「お前は継母か」

「違うっていよるだろ!それじゃあ失礼します。

からんころん、店の扉が揺れる。

・・・・・。さて」

カナタがみつこを振り返る。

「何コレ?」「報酬、とコレ。ヤスコも」

「うちも?」

「みつこの同期はもういい時期だしね」

「 ? ? ? 」」

二人貰った手紙を読む。

『ハンター初級・見習・新人の皆様

今回正式にハンター 養成学園に迎え入れることになりました。 おめ

でとうございます。

また、これは強制であり、

断る」

「逃げる」

「サボる」

ンターの職業を剥奪させていただきます。ご注意ください。 などのことを行った場合は、 | 年間生徒としてハンター基礎を学び存分にお楽しみください。 言い訳の有無は一切聞かず強制適に八

ハンター協会(理事長)ミスター・クレア)』

「一年だけ?」

そうだよ、一年だけ。 よかったな。 一年だけで」

「何、その含みのある言い方。」

カナタの眉が崩れる。

なんか、 目が死んで遠いものを見るような目になった。 嫌な記憶を思い出している、そういっ どうした た顔だった。

私のときは6年だった。 しかも、 さな ۱) ۱۱

いやいや気になるし、これから行くし?

ん?ってことは、 カナタってハンターなの?」

となく、 ハンターをやめている。 · 元 だけど、 6年制のときの生徒は全員卒業するこ やすいんやもそうだよ」

「ヘー?何で誰も卒業しなかったの?」

奪されるよ。 「学園に行けば嫌でも分かる。 あと、学校辞めてもハンター · 地位剥

はぁ と溜息をつく。 よほど過酷な何かがあったらしい。

「あ、これ個人的なお願いなんだけど」

カナタが手紙をもう一つみつこに渡した。

ってない。 リィ 多分、 シャに渡してくれ。 森にいる。 _ 二週間前にクエスト渡して以来あ お駄賃は?」

「は??」

・・・・・・え?や、だからお駄賃」

·・・・・・んん??」

こいつ。 聞こえないフリで白を切りとおすつもりかっ

「・・・・・・まぁ、今回は許そう」

リィシャとは仲良くなったばっかだし、 コは悲しそうに手紙を見つめていた。 消えてほしくは無い。 ヤス

だれも死んでないんだから.....そんな面すんな」

「だって・・・・・。」

「ヤスコも一緒に行くか?」

小さく首振る。 そもそも行きたくないのね

金やるから、コレの世話たのんます」

カナタが前払い金を払う。

「いぃやぁあああああ」「よっしゃ、いくぞヤスコ!!」

うよヤスコさん・・・・ やすこの悲鳴だけが店の中で木霊した・ 頑張りましょ

おわり

守護~ヤスコ編~ (後書き)

はいくつでした? 適性チェックは「はい」が三つあればハンターになれます。 あなた

学園~サキ編~ (前書き)

は~い、 !クールに残酷に色っぽく、そして!!あ?自重しろ?すんません お勉強の時間ですよ。 ハンター は戦うだけじゃ 駄目だぜ!

学園~サキ編~

学園は無駄にでかかった。

昔この町が首都だった頃のお城を改造して学校になってんだって」

なんで?」

「あったからじゃない?」

· みつこ~ コロシアムてきなんあったで!!」

はいはい、うろちょろしないのよりィシャちゃん」

ターは少ないといわれているが、こうしてみると多いように見られ に足を運んだ。 みつこ、ヤスコ・リィシャは強制的に来い。と言われていた、 他にもパートナーを連れたハンターが見える。 ハン 学園

よそみをしていると、誰かとぶつかってしまった。

「たっ!!ごめんなさい」

「いや、いいっすよ?」

「大丈夫か?」

「うん」

ぶつかった人は特に気にしなかったようで、 い人でよかった。 あっさり許してくれた。

「くぅ~んきゅぅぅ~んくぅぅん」

ぶつかった相手のパートーナーだろう小型犬は、 うにめちゃくちゃ甘えていた。 主人を心配するよ

ていうか.....甘えすぎだ。

「雷!ちょい落ち着けって平気だから」

り込んだ。 頭を撫でたところで、やっと落ち着いたらしく、 横でちょこんと座

「うん、雷ってつけた。そっちは?」「ヘー可愛いな、パートナー?」

三人はついでに自己紹介をスマすことにした。

サキってよんでくれな」 ああ、 俺 神チャー 仔サキ......誰がつけたんだろうなこのあだ名、

「うん、茶色」

頭凝視

ごちん。 頭見てたら頭殴られちゃった.....なぜ?

はしい、 授業始まるよぉ!はいったはいったぁ~」

. 羊お面野郎!」

「野郎とはあいさつだなぁ~はっはっは!」

あやしーやつ」

園長ですよ」 おやぁ、 あやしくなんてぇないですよ?私はミスター

えぇぇ..... みんなががっかりした声を出す。

あんな変なオッサンが.....。」

サキもなにやらショックを受けている。

「ミスター・クレアって誰?」

リィシャがみつこの服を引っ張る。

言う噂ってだけ。 んだってそれを封印したのが勇者クレア。 「エート、カナタがいうには、昔ジャグラー つまりあのおっさんって っていう、 魔王がいた

ハー、と興味なさげにサキは返事した。

「てか、カナタってうざくね?めんどくさいクエストばっか渡す上

に物を壊しすぎとか、人に怪我させすぎとか」

「分からないけど、だぶんサキが悪いと思うよ」

「えー?でな、 ムカつくから看板にラクガキしてやった」

「・・・・・、カ?」

「そうそう、それそれ!」

サキは嬉しそうにソレ!っとゆびを鳴らした。

クエスト屋のクセに『バー』の意味わかんねーし?」

眼鏡で賢そうなのに、どうしてしゃべると馬鹿そうなんだろう。

「はいはい!早く教室に入ってくださいね」

ミスター レアにせかされて教室に入る。 - うん、 中も広い。

がらがらがら・・・・・。

教室の扉が開く。 入ってきたのはスラリと長身な、 柔和そうな男の

人だった。 している。 まるでクリー ムのような髪の色は優しそうで、 ふわふわ

まぁ、一言で言おう、・・軽そうだ。

は~いはい!座って、 アレが、 教師?」 ジュギョーはじめんぞ~」

よわそーと男子がコソコソと笑いあう。

「はい、今日は純粋に基礎講座しまーす」

「純粋じゃないのってなに??!!」

みつこがつい勢いよく突っ込むが、答えは無い。

からといってなにか有るわけでもないけど」 はい、 今日は『武器種類属』について覚えましょう。 ŧ 覚えた

「まさかの、いちゃった!?」

「いいの?!それで!」

あはは~元気いい生徒だな~と先生は笑う。

無視するらしい。

武器種類族別

「ごく一般的なのが、 コレで主力だな、 主人公精神まっしぐらだぜ

接近攻撃型

まぁ、 そのまんま、 近づかないと攻撃が当たらないタイプ」

武器の例 剣 ダガー 拳 など・・・・・・

「ンで、その次に多いのが・・・・・」

飛行攻撃型

だな」 遠く の敵や空の敵に攻撃できる遠距離型だ、 よくある補助タイプ

武器例 弓矢 アーチャー 拳銃

「結構少ないのがハンター向きじゃない武器」

絶対防御

大抵盾だな、 たまに魔法属性結界ってやつもある」

武器例・・・・・てか基本、盾のみ

「んで、そこそこ多いのが」

特殊部類

·別名『その他』攻撃系でも防御系でもない」

武器例 が生まれる、 糸 ようするにフェイク その人に糸をつけるとその人と同じ人形

ちなみに、 この例はやすい んや新屋のパー トナーです」

「そうなの?」

「うん、キリンなんで」

「よくはいるな!って・・・・・あぁ」

やすこの海里がはいるくらいだもんな、 まぁ見たことないけど。

「さて!最後に紹介するのはコレです」

魔法特殊系

「みつこじゃない?」

「そだね」

ま、コレ系統がハンター になることはまずありえないがな」

「なぜですかー?」

禁止されているからさ」

え?

「魔法属性の武器及び魔法術者体質者はハンター にはなれない、 さ

せない。そういう規則だ」

「なんで?!」

ついみつこは叫んでしまう。 だって.....じゃあ、 自分ハンターって

おかしくない?

・・・・・・それは、何でだろうな」

「おしえろよ!教師だろ」

「君、・・・・・あせる必要が、あるのか?」

口を紡ぐ、 バレテはめんどうだ、 ここは、 一度流しておこう・

•

「べっつにぃ?」

た。 謙虚な態度(?)で身を引く。 なんだか教師が笑ったような気がし

どもありだからな、 「いいか~、パートナーは獣系だけじゃなく昆虫魚類ハチュウ類な 「適応って何が?」 難点を言えば適応しにくいんだがな」

と思ったからだ。 ヤスコがみつこに聞く。 みつこは軽く無視した。 どうせ先生が言う

な。 たとえば トナーは気が合うだけじゃ駄目なんだ、 ・・そこの君」 波長もあわせないと

リィシャを指名する。

「あと、君も」

それからサキと・・・・・。

「そう、前に来い~」「おれっすか?」

ちかな?はい、 例えば、 この二人がバトルするとする・ 君 勝つのはどっ

ヤスコは指名され・・・・・ごもる。

わかるわけないやん」

するならきっと、 そう、 戦ってないんだから分からないだろう、 勝つのは彼女だろう」 だがもしも戦うと

と言って、 サキの肩に手を置いた、 がサキは嫌そうに避けた。

たとき、二匹はどう反応したかな?」 「なぜかというと、 パートナーの行動を見てみよう、二人が移動し

「え~と?」

駆け寄りついてきた。 二人が前に行くとき、 サキのパートナー は言わずともサキの足元に

バナナを食べていた。 ソレに対し、リィシャ のパートナー は何もしない。 あえていうなら、

つまり、 この差」

リィ シャはわかんないとでも言いたげにくるっくる回っている。

といざと言うとき役に立たない。 波長、 使いこなせるか否か・ L١ いか?このサルはきっ

サルの耳が反応する。

ろうな」 恐らく、 主人がピンチに陥っていてものん気にバナナくってんだ

うっきー

おこったサル吉は先生に飛びついた。 がいともあっさりつかまれ行

「あと、コレも問題だな」

、え?」

「こいつらは、ただ一緒にいるだけだ。_

そんなこと、ない.....よ?」

そこは自信を持って言おうぜリィシャさん。

こいつらなら乗り切るだろう」 戦闘時に大事なのはパートナーだ。 もしピンチなことに陥っても

サキたちを親指で指差す。 サキは少々誇らしげにライを見つめた。

「つまりは……」

は・・・・・?

「友愛度がタリンのだよ!!お前は」

「波長がどうたらは?!」

るだろう?ソレがだめなんだ、 つまりはな、 仲間意識が薄い 永遠強くなれない」 !お前等は別々の行動ばっかしてい

「まじすか、なんで?!」

「え?さっきまでの説明聞いてたか?.....まぁ ۲*۱* ۲۱ ということだ」

もう、 た後頭をかいた。 席戻っていいぞ~と、二人は席に戻る。 めんどくさそうに笑

とにかくただ仲良しさんじゃだめだ心の成長も必要だぞ」

なんか、 言ってることが毎回違っているような.....。

「長つ

パ ~ ~ 「おう、 終わり終わり、 じゃ今日はココまで~さぁて、 ナンパナン

ヤッパリ女たらしなんだ。

け。 他の生徒もぼちぼち教室から出て行く。 残ったのはみつこと三人だ

どういうことなんだろう なにが?」

ヤスコが首を横に傾げた。

ロアの武器のことか?」

おੑ リィシャにしては珍しく一発正解.....でも、まだあるよ」

なに?」

ってのがあってね、 あぁ、君らは知らんのか、 ほら」 あたしの生まれつきの能力が大小変換

議に驚かなかったらしい。 知っていたから特に驚かなかったらしい、 ロアを元のBIGサイズに戻す。サキだけ吃驚した、 というか二人は特に不思 二人はすでに

魔法使いじゃ なくて魔法系はハンターになれないって・

さぁ?聞けば?」

きけないよ!だってもし聞いてばれたらハンター のっ職業剥奪だ

よ?!やだよそんなの」

せっか んよ? の金の儲けがなくなるう なんてことおもってませ

「深刻な悩みだ....。」

「聞いたら?」

だから.....」

登録受付者にさ」

•

からんころん・・・・・

お客訪問のベルが鳴る。

はぁ、 学園終了時間後はハンターが多いな.....。

カナタが一息もつけんとブツブツ文句たれる。

「クエストじゃなくて、真相を聞きに」

「ぬえ?!」

明らかにカナタが動揺した。 みつこはカナタの前にどっしり構える。

「真相って?何?」

「とぼけんな!ハンター登録したのカナタだろ」

「はぁあ?」

別のことを気にしていたのだろうか、 なんか素つ頓狂な声を上げた。

ハンター協会には『問題ない』って送ってるから大丈夫だ」 あたし、魔法系なのにハンターなったぞ?!知ってたんだろ?

「なにが?!」

みつこの能力は『大小変換』のみ、 この程度なら、 ハンター にな

れる。」

「マジで?よかったぁ」

れもなく続けた 本当に安心したようにほっとした顔を見せる。 しかしカナタは悪び

「でも、ロアは別だ」

「え?」

· せいぜい見つからないことを祈るね」

「どうゆうことだよぉ!?」

首をつかんでがくがくがくがく と揺さぶる。

「ぁぁあああ・・・や~め~い~」

「なんでロアはアウトゾーンなんだヨォ~ぅ」

・それは、いえない。 規則だから」

「ンな規則あるかぁ!!」

「いや~・・・・・。 やめい!

ばしん!!と手をはたかれる。

今は、 何も言えん。 だけど気をつけたほうがいい。 とくに、

トナーに」

?

協会じゃなくて?

それ以上は何も言う気がないのか、 口をつぐんだ。

何をかくしてんのかは知んないけど・

サキがカナタの首をつかむ。

「もし、 ハンター 協会にこいつらのことチくったら ボ

コすかんな!」

「それは、ない。」

カナタはみつこの方を悲しそうに見つめた。

「 ?

みつこには、 ハンター でいてもらいたいんだ・

「なんで?」

・・・・・・。内緒」

・・・・・ポッっと頬を赤く染める。

「お前は恋する乙女かぁああああ!!」

「 ぎゃ あああ!!店内武器化禁止 ・!」

どっかぁぁぁあ ん!!

サキの理不尽な突っ込みでカウンター は真っ二つな上に少し焦げち

やったのであった・・・・・。

学園~サキ編~(後書き)

のですねはい、ハンターについての豆知識~ってことで。まぁいろいろある

「え?」

みんなは自分の耳を疑った。

トルは禁止』ってかいてるけど?」 今日は、そうのうちコロシアム大会を始める練習をします。 あれ?でも、 ハンター協会の本では、 『第5条ハンター 同士のバ

ミスター ・クレアには規則なんてない、 なんてたって.....おっと」

笑いながら口をつむんだ、言う気はないらしい。 さてさて今日は学園裏コロシアムに来ていた。 のか、って言うぐらい綺麗場だ。 使い込まれていない

「さて?今回は分かりやすくお手本を用意したいと思う。 プロでも来るのかな?」

にた。 と皆わくわくする。 しかし先生の言った言葉は皆の期待とは違って

はい、 サキとリィシャココに来い」

え?」

おれ?」

指名であせる。 二人はまさか自分に来てないと思っていたのだろう。 いきなりのご

いか証明できるってことだ」 昨日俺がサキが勝つって言ったろ?俺が言ったことに間違いがな

あっはっはと笑いながらやってきた二人の肩をつかむ。

「両手に花~」

二人に殴られた。 しかしめげることなく話をすすめる。

じゃあサキはあっちの入り口から、 リィシャはその反対な」

ていた。 先生に言われるままに二人は移動する。 になったときのためちゃんと見る。 みつこのみその顔に影を落とし 他の生徒も自分もやるよう

(もし、 戦って魔法使ったら..... ロアと離れ離れに.....)

ドが許さない かといって、 武器を使わなければ不審極まりない。 なによりプライ

じゃあ、 俺が口上をいうから、 ソレが終わったら入り口から姿見

せろよ?」

. わ、わかった」

· · · · · ?]

まだ分かってないリィシャをよそに始まる。

では・・・・・」

眼鏡はいったいなんだ! 眼鏡かけてクー ルビュティ かと思えばただの凶暴ガー ル!その

赤コーナー !サキ

ふざけ んなぁああ

すばらしい なかった。 とび蹴りを教師に向ける。 攻撃こそ喰らったものの倒れ

痛い ・あいつより捻りがあっていたい」

アイツっ て誰だよ」

(にた)」

もう一発殴られてる先生をよそに、 まだかなー?とかおだすリィ シャ

じゃあ次ぎ」

姿かたちは侍そのもの、 しかし中身は天然おばかちゃ hį 嘘も故意

もございません。 素です!!

青コーナー !リィシャ

もうでてい い?あ、 ۲۱ ۲۱

とことこあるいていく。 特に突っ込まないらしい。 聞いていないだ

けかもしれないが.....。

「まぁ、 はまだ今度で良いだろう。 入り口前で一回止まって客にアピールするんだけど、 ソレ

一人真ん中で向かい合う。 勿論パー M O : は 片一方は主

人に釘付けでもう片一方はバナナ見てる。

に戦え」 「バトル開始のベルが鳴ったら武器化だ、 それからあとは二人真剣

先生が離れる。

.....カァー ン!!

開始のベルが鳴る。二人は同時に叫んだ。

「「武器!!」」

先制したのはサキだった。 武器化した雷は電気を帯びた斧になった。

あれがサキのパートナー武器化、接近攻撃型」

「あの静電気何?」

た。 ヤスコが先生に質問すると、 いいところに気がついたと先生は褒め

を持っている」 らにも備わっている。 「あれは、 パートナー が持つ特殊体質、 そして雷はその名の通り電気を放出する能力 ハンター が持つようにやつ

「くらええ!」

サキがリィシャに容赦なく襲い掛かる、 で難なく避けた。 リィ シャは持ち前の身軽さ

サル吉! !バナナくっ は飛行攻撃型本来ならこちらのほうが有利てんからだぁ!」

だ 1 シャ の パ ー

「あのサルも特殊能力もっとン?」

あぁ、 バナナ出してたろ?それはそれは..... (ムゲン) に

「・・・・・・。あぁ」

それでリィ シャ が埋まるぐらいのバナナもてたわけだ。 納得

「あと、あのサルの耳の形が変わる」

戦闘とまったく関係ないな」

· そ~ゆうのもあるってことさ」

「あ反撃に出た」

打ち落とされたサル吉に興味なさげにリィシャは変な構えに入った。 そこで中止が入った。 ブーメランがサキに襲い掛かるがオノであっさり打ち落とされる。

. はい、タンマ」

リィシャの頭を小突く。

いま、 さっさと『真の武器』 を出そうとしたろ」

「駄目?」

よ?この場に将来ハンター狩りになるやつがいるかもしれんだろ?」 あのね、 \Box 真の武器』は切り札、 ソレをこの場で出してどうする

えへ、とリィ シャは誤魔化し笑いを浮かべる。

サキは中断させられて不機嫌そうに渋い顔をしている。 なさそうだ。 おもしろく

か おまえのパー トナー は使い捨てか?拾われんのまってんじゃ ねし

サル吉は武器化したまま動かない。

.

先生はサル吉の所まで行くと、おもむろにブーメランを踏みつけた。

「うっきーーーー!!」

悲鳴と共にもとの通常モードに戻った。 口にはよだれが・

0

ちぇ、つまんねー雷」

雷も元の通常モードに戻る。そしてサキに飛びつく。

「きゅ〜ん」

· はいはい、よしよし」

サキは適当にあしらってから教師を見る。

「で?本番って死亡者でるの?」

゙デナイヨ」

((明らかに嘘だ))

みつこはぼーとそれらを眺めていたが正気に戻ったように目を大き くさせた。

才能があれば三歳から始めるし。ハンターってさぁ何歳から?」

あ 新屋つ若い のにもうハンター 始めてやめてるのはそういうことか

考えているうちに別の方向に思考がいったらし

やすい んや新屋の年、 ハンター候補生は沢山いた。

がはじまった。 そこからがハンター たちにとっての悪夢の始まり『六年制の地獄』 件が合う体質者にはこの上のないぐらいの天職だったから・ ていたミスター ハンター ・。 しかし、そのときにはすでにハンター協会に顔を知れわったっ の仕事は安定しており危険も伴うが金もよかった ・クレアが学園を成立、入学することを義務つけた。 から。

・・・・・なにそれ」

ふ、よそうぜ、この話はよう」

先生も六年制の人らしく顔が暗い。 てか目が死んでる。

バトルも強化練習も暴走もして良いぞ」 とりあえずコロシアムは基本毎回開いてるから、 ココでなら

- 第6条ハンターは力を振り回さない・
- コロシアムで優勝したら『 戦士 の称号をもらえるぞ。
- 「なにそれ?優遇いい?」
- 「けっこう中々」
- 「よっしゃ頑張ろう!!_
- 「おい!みつこ」

サキにチョップを食らわされ頭を撫でる。

「ばれたらどうなるか忘れたのか?!」

「あぁ.....!困った」

「お前実はそんなにこまってねぇだろ」

「困ってないわけないよ!どーしましょ」

どっごおお

ん ! !

「きゃああ」

「うわぁああ」

コロシアムが崩壊する。

「なんてラッキーいや、じゃなくて!何事?」「こりゃ先延ばしになるな大会」

煙の中からごつい大男が現れた。

る!武器!!」 「くっくっく、ミスター・クレアもこの学園も全部ぶっつぶしてや

男の傍にいたゴリラが大きなハンマーに姿を変える。

「お前は、ビルメイ!」

ほぉお?俺のことをおぼえてねぇのか?まぁ仕方ねえか『六年制』 !?俺の名をしってるらしいが、誰だてめぇ」

でコロシアムで一番最初にアタっていっつも俺たちにつぶされてた

からな」

何言ってやがる!おれのあたる一番手は常に小娘だったはず」

そこで少女たちは頭の上にはとを飛ばした。

「・・・・・・釜?」

「違う。断じて違う」

てか、 毎回同じやつに当たって敗退してるってのもかわいそうだ

な

「哀れむんじゃねええ!」

「あいつの、 真の武器は『砂』 でな砂を操って目潰しして来るんだ」

-北 | |

「人の真の武器ばらすな―!!」

なんだか向こうさんが哀れになってきた。 と皆が思い始めてきた。

アもぼこそうと考えてたけどやめだやめ!!」 「くそぉムカつくぜ!ここいら建物全部壊しつくしてミスタークレ

ハンマーを大きく振りかぶって大地に叩きつけると。 しのように持ち上がった。 地面が畳替え

「きゃあああ!!」

「うわぁああ!?」

悲鳴が上がり、何人かは逃亡を図る。

んだ!!」 「ちょーどいい!まえからハンターとやってみたいっておもってた

待ってましたとばかりにサキが立ち向かう。

サキやつを甘く見るな!!」

雷をまとい渾身の一 そして相手は土.... 撃を浴びせようとしたが。 相性が悪い。 残念ながらサキは雷

きかねえな!

ばきぃ

ぐあつ?!」

サキのからだが楽々浮かび大地にただきつけられる。

のやつでハンター狩を行うやつらが多い。 いっとくが、 クエスト量が少ないが戦闘能力が高い つまり」 のが『六年制』

戦闘能力でペーペーがプロに勝てるわけがない。

サキ!!大丈夫か」

なんとか」

きゅううん!くうん」

じゃあ!次ぎ俺!!」

リィ シャが緊張感のない声で嬉しそうにかけだした。

サル吉! !武器」

武器化したサル吉を投げ飛ばす。 男 ビルメイは難なく

避けた。

うりゃ

さっき何気に先生が渡した清流刀で襲い掛かる。

「なんのこのぐらい!!」

ばされた。 男の固い体で余裕で清流刀は折られ、 かし悲痛な叫びは上げなかった。 いきなりのことだったので受身が取れず地面にめり込む。 あいた手でリィ シャは殴り飛

「ヤスコ助けてやれ」「痛い。」

はしい」

海里に乗ってリィシャの足を引っ張る。

「はい、次は誰挑戦する?」

「挑戦って馬鹿にしてんのか?!」

「いないのか?みつこは?」

「いや、いいっす。金もらえるならやっても」

「おぃ」

や!遠慮します、あはは.....」

「じゃあ、誰か.....」

が!!」 お前さっ きからふざけんなぁ !武器ももってねえ マル野郎

ハンマー構えた男の方が震える。 怒りの限界を突破したらしい。

着ついて面白くない」 はん?俺とやろうってのか?イッヤだね俺とやったらさっさと決

なろう、 言ったな!! 叩き殺してやる!!」

先生武器は?!貸そうか?!」

その必要はない」

先生は笑うと口笛を吹いた。

男が反応した。

その音は.....まさか」

にや.....。 勝気な教師が笑う。

う がああ!

ゴリラが通常モードに戻ると教師の元まで駆けつけた。

残念だったな、 俺だけでもこのぐらいはできる。 格が違うんだよ」

ゴリラの姿がハンマー になり教師の手にとる。

もう一度、てめぇの武器の痛さ思い出させてやる

てめぇ!アポロか

あばよ!また来な」

すっこぉぉおおおん

男は自分のパートナーにぶっ飛ばされ飛んでいった。 軽く吹くとゴリラが元の姿に戻り。 主人がいないことに気がついて 先生が口笛を

急いで追いかけていった。

その様子を生徒達はぽかー んと成り行きを眺めていた。

先生アポロっての?」

おう、 ŧ めったに名前呼ばれないけどな」

じゃ、 なんてよばれんの?」

「ネズミ」

にかっとアポロはわらった。

しかし、 また壊れたなココまた新築せにゃあ」

ここが真新しい理由使われていないじゃなくて、使われすぎ、 だっ

た。

「先生もはんたーなの?」

おう!元....な。 いまはただの」

きーんこーんか

h

「ながっ!」

今日はココまでー んじゃな!さーてナンパナンパ」

いまはただの・ ナンパ野郎?

「てことがあってさぁ」

なんとなくカナタと仲良くなったみつこ。 つい一時間前の話をする。

「まぁ、『六年制の地獄』を体験したやつにとってあの学園は悪夢

の象徴だからね、壊したがるのも無理ない。

「ところでさぁ?カナタもハンター?」

「元、ね私も『六年制』だから・・・・

「てことはさ?パートナーどれ?」

とことこどだどだ・・・・・

ネズミが屋根裏で走り回る音が聞こえた。

カナタの顔が苦々しくなる。

ネズミ」

終わり

学園~戦闘編~ (後書き)

地獄ちょくちょくでてきますww パートナーは常に一緒にいるってわけじゃあないんです。 六年制の

師匠~弟子入門編~ (前書き)

が やっと男のハンターが出ました。まぁ、 前にも出てますけどね?豚

「反省してください。」

「「へえーい」」

なだけなのだが・・・。 リィシャの四人で怒っている・・ みんなで地味な返事をする。 皆って言ってもみつこ ・というか諭しているのはカナタ ・ヤスコ・サキ

怒られている理由と言うものがまたクダラナイ。

「サキはクエストごとに建物崩壊しすぎ」

「だって、壊れるんだもん」

· もんじゃねー よ!ヤスコはクエストにこない」

「いきたないもん」

「こい!!リィシャは帰ってこない!!」

「え~あはは?」

「はぁ~、みつこは最近クエストしない。

いっじゃん別に」

みつこの場合

「やらない」

ではなく

「やれない。」

のほうが正しいのだが・ 理由は前回の通り。

とにかくどれもコレもカナタを悩ませるものだった。 くてもいい気もするが・ 別段気にしな

·って、ことでやり直してもらいます。.

「いきなりだな、おい」

「何をやりなおすん?」

カナタの人生?」

「嫌だよ!じゃなくて君ら!!」

え~、と文句たれる四人を無視してカナタは机の上においてあった

紙を取り出す。

「ハンター 協会第1 4章『問題児はプロ級についてもらいましょう』

てことで」

「どゆこと?」

カナタが笑った。 しかも『にこ』じゃなくて『にたぁ』 つ て

•

嫌な予感。

予感的中、

カナタに指定された場所は学園コロシアム、 そこにいたのは体形の

いい男たちだった。

「キャー犯されru・・

「わけないから」

冗談なのに・・・。

ハンター・プロ級一流上流の人たちです。

カナタが簡単に説明すると男たちに頭を下げた。

んじゃ、説明すると」

ムツキさん接近攻撃型に長けたハンター・上級

キサラギさん飛行攻撃型に長けたハンター・プロ

フヅキさん 防御型に長けた ハンター・一流

戦 士 パートナー 無しでハンター になりそこらへんのハンターを超えた超

ハズキ

ナイト

「・・・・ミスタークレアの、コネ」「・・・ミスタークレアの、コネ」「すげーよく呼べたな」「ってこところ?」

サキが黙り込む

ゴメン、カナタ。 俺らそんなに酷い?」 か~な~り」

「こか、一く、つこうはらしノフ「即答かよ!」

ランクなんて、 てか、ナイトってもはやハンターじゃないやん?」 そうゆうものさ」

「て~か~さぁああ!!」

みつこが嫌そうな顔と声を出しながらハズキを指差した。

「なんで居るかな~!師匠!!」

· · · は?

皆がみつこを見る。

ハズキはしばらくみつこを見つめていたが ふっと笑った。

「ソレが・・・」

ー い。! !?

みつこの両頬をつかみひねりあげる。

いだだだだだ!!リアル痛い!これは!?ギブ ! まぁ じゴメン

<u>!</u>

「久ぶりにあっ た師匠に、 61 口の聞き方だなぁ?みつこ」

「ごめんなさぁああ!?」

数分後・・・。

· はぁ、はぁ、はぁ_」

みつこって師匠おったん?じゃあうちと同じ『見習』 じゃないん

?

「わたしは優秀だからね!卒業したのさ!」

「卒業してもまた習う羽目になっ たんなら意味がないと思わんのか

<u>!</u>

・・・けっ」

まぁ後ろのほうで関節技されているみつこは放って置いて・

•

「おくんだ」

この行動は私はコレで・・・ともとれる。カナタは(んじゃ)っと手をあげた。

「どこいくの?」

リィシャがなんとなくカナタに聞く。

「ん?帰る」

き止める。 本当にそのまま帰ろうとしたカナタをサキは首根っこをつかんで引

ちょうマテやゴら、自分主催しといてなぁに帰ろうとしとんのや」

「すごむと怖いなぁお前」

「真面目に聞け!」

「あのね、サキちゃん」

カナタは遠くを見るような眼で言った。

゙ 君らと違って暇じゃないのよ?」

いいわけ?」 「えっと、 みつこもカナタも関節技されてるけど、 俺らどうしたら

「とりあえず、鍛えるから来なさい」

- あ、は - い」

いった。 リィシャ はキサラギさんに連れられ、 ヤスコはフヅキに連れられて

はいえないものだ・ 愛らしいが、関節技されかけている様子はどうとっても、 サキのところにムズキがいきサキを連れて行ったおかげで、 タは消えていった。 かカナタは骨を折られずに済んだ。 犬がじゃれる様子は見ていて可 とわけの分からないことを思いながらカナ 可愛いと

残されたのは、みつことハヅキのみ

「さて、そろそろ始めるか」

「ウィ〜っス、あ!質問」

「ん?」

「金貰うの?!これ!」

「お前は金ばっかか!!」

「参考までに・・・」

「金などもらわん」

「うっそ、馬っ鹿で~ぃ」

•

ここが訓練始めるのは、 もう少しかかりそうだった

そして、サキのところ~

接近攻撃はリーチが短いから、 飛行攻撃型には弱くなる」

(リィシャには勝ったけどな)

しかし、 自分の武器がただの武器と思うな。 生きた武器だ」

「はぁ」

すこしかわいそうだが、 飛行型モンスター に武器を飛ばすことも

戦術の一つだ。」

「え?そんなことしたら・・・丸腰」

「そこで、だ」

レを手にしたとたん素早く 自分の傍にいた鹿を武器化した、 鹿は接近攻撃型武器になった。 ソ

長刀を遠くの大きな木のもとにまで投げつけると、長刀は刺さるこ となく貫通した。

こい!スィ!!」

鹿は主人のところまで駆けて来た。 そしてすぐに武器化した。

をつけろな」 「ここの移動・武器化を素早くしないと、普通にかっこ悪いから気

「は」い

ためになる戦術をならったサキのあと、 リィ シャのほうでは~

· な~、えっと、キサラギさん?」

「ん?」

「この紐なんでしょう?」

サル吉とリィシャは体を紐でつながれていた。

「おっとと、わっとと」

サル吉があっちらこっちら移動するからリィ シャはフラフラになり

困り果てた。

最後にはキれた。

じっとせぇいや!この馬鹿チンが!!」

それを見ていたキサラギは困ったような呆れたような苦笑いを浮か サル吉の頭をぶん殴ると短い紐は地面に叩きつけられたサル吉の分 の間が縮みリィシャもバランスを崩して倒れた。

あのねぇ、 君たち」

ーぎゃー 喧嘩を始めた二人に制止の言葉をかける。

ず結果二人とも弱くなる」 君たちは強いのに心がバラバラなんだよ、 だからバランスが取れ

「先生も言ってたきがするな?多分」

せないと駄目だ」 「・・・。ま、まぁそんなことだから、 君たちはサル吉と心を通わ

サルとぉ?」

仮にも自分のパートナー に冷たいリィシャ

トナーと分かれる羽目になるぞ?いいのかな」 武器化はその人との相性だ。 そのままだと相性悪くなっ

リィシャの眼に悩む様子が浮かんだ。 可愛さあまって憎さ100倍ってやつだろう。 それはさすがにいやらしい。

じゃあ、 手っ取り早く始めようか?」

まぁ、 とりあえず。 パートナーから離れましょうね。 お互い」

「いや」

(コンコン)

'・・・。 (汗)

二人の息のあった力強い否定ぶりに、さすがのフヅキも困る。

先して攻撃しに行かなければなりません。それはいいですか?」 「えっと、いいですか?防御型をパートナーに持つ場合は自分が率

首を横にフリ、海里が立ちはばかる。まるで

「我が護るゆえ問題ない」

とでも言いたげに。

・・・。 (汗)

う問題じゃない。一言で言えば、清清しいほど(うざいさすがにココまで来ると、やりぬくいとか教えぬくいとか、 た顔だろう。 しかしそこはプロ。 にっこりと微笑む。 はたから見たら慈愛に満ち そうゆ

から、 いいですか?いつまでも動物状態に頼るわけにはいかないのです ね?

しらん」

まさかの即答

ヤスコの意思は硬かった・・・。無駄に

「こ、困りましたねぇ」

風景であった。 若干額に青筋が浮かび上がっている。 思わず頑張れと言いたくなる

あった。 パートナーが無駄に強いだけにヤスコが堕落すのも仕方のない話で

そして、みつこ。

「お前・・・」

「そんな眼でみないでぇえええ!」

みつこの周りには大量の武器

「どれもこれも、 悪くないもん!普通だもん・・・しっくりくるのがないだけで」 相性が悪いなんて」

た。 器を集めてもらったのだが・・・。 師匠に例のことを話したところ、パートナー無しで戦うなら、と武 皆平等に普通。 まぁ言うなら コレというものが一つもなかっ

あ~まぁい いんじゃね?」ってやつであって。

うのすら、 ない。 いかも~」っていう、 なんかそこそこい い感じってい

ようするに、才能がない。

•

味で。 不憫なものを見るような眼を向けられる。 コレは辛い。 いろんな意

なかったぁああ!!) (無駄に普段やれば出来るぜ!へぃ へい !みたいな態度とるんじゃ

恥ずかしいやらなんやらで、頭を抱える。

「みつこ、・・・。・・・すまん」

謝んないでよ!!よけい虚しいじゃん!あたしが!!!!」 なんか上手いこと言おうとして何も思いつかなかったからって!

・。まぁ、 逆を言えば悪いのがなくてよかったじゃないか、

普通で・・・。 普通一番!な?」

あたしにフルな!てかソレ慰めてるの?!皮肉じゃなくてか?

「・・・くっ」

だ~か~ら~ ミスったみたいな顔するなぁ!」

゛がぅ?」

び師匠に戦い方を教えてもらえるのなら、 そうだ、 暴走している主人を不思議そうに見上げるロアをみて、 ロアのために。 ココで突っ込んでいる場合ではないのだ。不覚にもまた再 教えてもらおうじゃぁな ハッとする。

どれでもいいから、おっせーて?」

なんだ、 イキナリ、 まぁそうだな、 遊びはここまでに

遊んでたのか?!あたしのこと玩具にしてたのね

「・・・・・・。さて、手始めに」よ」

コイツ、スルーしやがった。うぜぇ・・・。

「まぁ、俺は教えるのが苦手でな」

「う"過去にも聞いた嫌な予感。

習うより慣れる、だ」

ハヅキは背中から大剣を取り出した。

その細身からでは想像もつかない神業である。

「まさか?」

「本気でかかって来い」

カナタは遠くの『バーカナタ』 の店でお茶をのんびり飲んでいた。

いいのか?こんな荒療治で?下手したらお前」

「あ~なんか、ネズミがほざいてるぅ~」

カナタの隣に座ってた男・ アポロは汗を流した。

「ま、まだご機嫌が直らないようで?」

「ア~耳ざわり」

「・・・。 (汗)」

困ったアポロは滝のように汗を流した。

れよぉ~主人ぁ」「・・・。」「ごめん!もう仕事ほっぽってナンパしにいかないから!許してく

どん!!とコップを机にたたきつける。

献したことも!約束を護ったこともないだろうが!!」 「あのな、 アンタがパートナーになってから、 私に!まともに!貢

あ~はは~ (汗)大丈夫、ちゃ んと例のブツ調べといたから」

ホラ、と笑顔で例のブツを差し出す。

・ ふ ん

カナタは紙に眼を通す。そして驚愕する。

アポロの口に笑みが消える。

「そろそろ、やばいかも知れんな」

カナタの手から紙がすべり落ちる。

・みつこ・

終わり

修行?~カナタ編~ (前書き)

る~状態です。えへw ちょっぴり前に進みそうで進まない。 い~っぽすすんでにほさっが

修行?~ カナタ編~

目覚めのときは、 刻一刻と近づく.....。 戦士はまだ卵の中.....。

たなんだけど?」 ねぇ~今度はなにさぁ?こちとら馬鹿師匠のスパルタでくったく

「おまえもか?俺もだ」

「うちもぉー!」

「俺も……怖かった。でも、面白かった」

子でその表情は見えない。 そろった四人を集めたのはカナタで、 目深にかぶったチェックの帽

一確実に、時は刻む」

「はぁえ?」

「先に謝っとく、ゴメン」

カナタが頭を下げた。

「アポロ」

合 点!』

た。 良さそう。 ネズミの姿から人型に変わる。そして何処からもなく剣を取り出し カナタの身長にあわせた軽量型らしいが、 見るからに切れ味が

最高の職人使用.....ソードです。」

させ、 説明いらないから、 いや要るけどそうじゃなくて・

!

みつこは反射的に師匠にもらった薙刀を構え、 回避した。

•

っうわ!?」

油断していたサキのほうにもその刃は向けられた。

「武器ならここに」

カナタの足元には大量の武器、 先ほど師匠が用意したやつだ。

「なにしやがんだ?!」

· あぶないやんかぁ!」

四人勿論怒り出すが、 カナタはそ知らぬ顔でソラを見つめた。

. 日が沈むまで、私は本気で君らに」

眼を前に向けた。

「殺しにかかる。」

背が小さいから、 その場でしゃがみこまれると視界から消えたよう

に見えた。

そのせいで、反応に遅れた。

う"にやぁ!!」

とぶつかり倒れこんだ。 リィシャの体が吹き飛ぶ。 運悪くその後ろに居たヤスコもリィシャ

「だって~、俺じゃ……!うわっと」「リィシャ!!」

身軽な反射神経で刃から逃れた。

「ふざけんな!痛い目見せてやる!雷武器!」

・・・・・。しーん

雷?」

 \neg

ゕੑ いつも傍らにいるはずの雷が今日、このときになって傍に居ない所 ぼうっとしたように主人を眺めていた。

雷!?」

呼びかけても反応はない。

?!

カナタに蹴り飛ばされた。

いってぇ!くそ、根暗のクセに一体何処にこんな力が」 もしかして.....アポロ、 先生が」

みつこがアポロに眼を向ける。 にやりと笑った、 かすかに音が聞こ

える。

先生の能力は 人形化……まさか

正解、 んでもって自分は人形化の能力で肉体のみ操られているから、 君らのパートナーの意識は封印させてもらっている」 反

..... あんたらが思うほど、 私は運動音痴でもないけど?」 射神経とか運動能力とか関係ないわけだ」

ざしゅう!

あ。!980円もしたフードがぁ」

- 安いんだからそんなわめくなよ」

「ゆるっさん!」

みつこも薙刀を構え突っ込んでいくが避けられる。

ほら、 さっさと攻撃して来い。 時間無いんだから」

「海里!!」

ヤスコが悲しそうに海里しがみつく。

「うぉりゃああ!」

はいっとな」

すばやくカナタの背後に立っ えるようにソレを主張した。 たリィシャにカナタは、 当人によく見

「サル吉!?」

切りつけることが出来ず腕を止める。

その隙に間合いを取られ、

ソ

- ドで振り払われる。

「卑怯だぞ!」

でもさ、 リィはコレのこと、どうでもいいんだろ?」

! ? .

゙あと、真の武器をださすなっつってんだろ?」

さっきから陰険なコトバッかしてんじゃねぇええ!」

殴りこもうとした。 サキが大量に積み上げられた武器の一つ、 槌で隙だらけのアポロを

「わぉう!?」

これには吃驚したらしい、 だが、 LVが違いすぎた。

残念だったな」

ぴゅう。 っという短い口笛で雷がサキに襲い掛かった。

ぐ!?さっきからお前等卑怯だぞぉおお! !真面目に戦えよ!」

真面目も真面目、大真面目」

楽しそうにアポロはそういった。

「う"ぐぐ!?」

カナタは苦しそうに唸っ しかし意識はあるのか、 白けた顔でアポロを睨む。 たと同時に地に倒れた。

```
体限界、
                   俺は下げてないぞ、さがってんのはマスターの俺に対する評価」
                                        アーポーロ.....シンクロ率下げてんじゃねーぞ」
動かん・・
仕方ない、
もう一度匠達に頼むしか.....。
```

ちらり、 と男のハンタ のほうに目を向ける。

皆苦笑いをしている。

一度戦ったし.....それに、

なぁ しゃぁない」 パ I 無しで女性に攻撃するのは

カナタの体がうつ伏せから仰向けになる。

今から5数える内にパートナー 回収しないと、 大変です。

はぁ?」

早?!」

「海里!」 サル吉!」 ロア!」

呼びかけても反応はない。

かっ

パートナーが自力で呪力を打ち破り相棒の声に反応した。

「わん!」

きい 先には海里がおり、 飛び出たようにサキに嬉しそうに飛びついた。 ぴっしゃぁあああん!!雷と同化してサキの横に落ちる。 そこから ぃいいん!ヤスコの足元が氷の道と化して滑っていった。 ヤスコを受け止めた。 その

「海里!」

ヤスコは嬉しそうにそのふかもこのお腹に身を埋めた。

バナナの雨がリィシャの上に降り注ぐ。

「うわぁ!?」

リィシャが黄色いものの山の中に埋まった。

ぷは

出てきたリィシャにサル吉はくっつく。

「がぁあああぅ!!」

このところに駆けて行った。 小型からもとの大きさに戻っ たロアはアポロを跳ね除けてからみつ

そのショックでアポロはハー フモルモット (?)姿に戻る。

ロア!」

おーい、大丈夫か?」

?

まぁ、 若干雷の雷を食らったカナタは煙を上げて沈黙していた。 自業自得ちやぁ、 そうである。

ごほ まぁ、 うん。 一応上がったかな?」

何が?」

「シンクロ率&単独のLVのUP」

「やる意味あったのか?」

なかったらこんなめんどくさいことするかっつー

σ,

まぁ、正論ではあるが。

「で?何がしたかったんだ?」

「まだ教えない」

サキに腕を逆方向に持っていかれる。

「いだだだ?!暴力反対」

「さっきまで暴力しまくってたのは誰だよ!」

「でもさぁ、サキ考えてみ?」

?

ロアに乗ったみつこが上からカナタを見下す。

うわ、いやなポジションだな」

どくさいことが回って来るってことだよ。 て親切なやつじゃないし」 しかも強引にレベルUPをカナタがするわけないじゃん?カナタっ あたしら限定で鍛えるってことはさ、近いうちにあたしらにめん じゃなきゃこんな急に、

「なるへ~」

カナタの顔に汗がたれる。 図星らしい。

近いうちに大変でめんどくさいことってゆーたらぁ?」

がら首をかしげた。 自問自答なのかはたまた聞いているのかヤスコはう! ん?と唸りな

ジャグラーじゃない?」

あっさりリィシャは答えた。

「それはさぁー上が処理すんじゃね?」

「あー、そっかぁ」

とりあえず座らせる。 四人カナタを見つめる。 いつの間にかうつぶせに変わっていた。

「で?正直にいってごらん?」

「ゲロッちゃいなよ~」

「すっきりするぜ~」

「さぁさぁ」

思いっ 尋問するが、 きり悪徳セールスマン風に変わりながらカナタが吐くように 中々口を割らない。

よほど言いたくないのか、 はたまた言えないのか。

とにかく、答えなかった。

」うっ」

!?

ぱかっ・・・ふいいぃ~

カナタがショー トした。

「ちょぉお!?カナタさぁああん?!!」

「え?え?え!ちょぉやばくね?!」

「口から魂でてますやん!!!」

「戻ってきてぇええええー!」

ということで、カナタの隠していることを聞きだすことはできなか

ったのであった。

ざ~んね~ん

カナタぁぁぁああ・・・

終わり

更新これから少しずつ遅くなります。理由 時間がぁ

クエスト~音楽会編~ (前書き)

サキがLVア~~~っプ!!そのことで新たな新技や、なんとなん と~雷が!!!みつこの活躍も見てね?

クエスト~音楽会編~

· · · · · · ?]

しかも、 なにか、 彼女はそう思いながらもどう頭をひねっても思い出すことはない。 しかしふと違和感を感じた。 ソレはここんとこ毎日繰り返しているような気がする。 俺は忘れているような気がする。

がさ・・・・・。

違和感の正体はポケッ なんだ?これ?? トから出てきた5枚のメモ用紙

書いている内容に眼を通して、納得した。

あぁ、またこれかぁ・・・・・。」

そうして彼女は嘆息しながら家を出るのであった・

•

「みつこ~」

「 ん?」

少しクセッケの髪の毛をフードに包んだ少女、 サキは話しかける。 『みつこ』 に彼女

助けてほしい まぁ、 聞くだけなら」 んだけど?」

おかしくね?この会話

識だろうに、まさかの「聞くぐらいは」 普通 いろんな意味で。 「助けて」っつたら「 いいよ」か「 から入るとは。 どうしたの?」 さすがだぜ ぐらいは常

まぁ、 そうかい、 交渉は後でするとして、 大変だねぇ」 実はな俺ちょぉー う困ってんだ」

けなくする。 といって歩い ていこうとしたので、 足でフー の裾を踏みつけ

聞く気すらないんじゃないか

実は俺、 五日ぐらい前からあるクエスト受けたんだ。 で?何がどう大変なのさ」

されたわけだ。 心底嫌がった。 それは難易度が高いクエストで、どうも他の そこで、 まぁクライアントが協会ってのが気になるけどな。 ハンター 初級の中で一番有能な俺がかり出 ハンター は受ける のを

お前 の賛美はいいから

「ふぅん?嫌な任務だね」日後に音楽会が開催されるんだけど.....ソレの阻止が任務なんだ」 ムカつくな、それで、 そのクエストって のが今日を入れ て

そうか?楽しそうじゃないか?

楽しそうって.....。 してないの?」 いろんな意味で問題だけど、 まだクエスト完

そこが問題でさぁ」

どれもこれもクシャクシャになっている。 サキはそういうとポケットからメモ用紙5枚を取り出した。

らしいので、 『忘却の町に来た。 俺もなんか書いてみた (笑)』 この町の人が言うにはメモは欠かせないと言う

......?なにこの『忘却の町』って」

「ハイ、二枚目」

が唯一の手がかりだ』 一度この町に来たはずなのに何かした記憶が無い。 このメモだけ

·サキに一体何が!?」

さあ?」

笑った。 当の本人にも分からないのなら、私にもわからんなぁ~とみつこが

三枚目」

9 何気今まで存在を忘れていたが雷がいねぇ!どこいった?』

雷!?」

· あ、本当だ何処言った?!」

サキ、 今頃気がついたらしい。 大丈夫か?頭が.....。

「コスて」

「なんか、ムカつくこと考えたろ」

「べつに~、んで四枚目?」

それにしてもこの町の人は少々ポケボケしすぎだと思う、 したのにいつまでたってもきやしない』 今までのとこの町のことについてみるとメモはかなり重要らしい。 料理注文

かは不明だがなんと学習能力の無いこと、 後は永遠愚痴ばっかりだった.....。 なんて無意味な とは当人にはいえないな 何があった

· コレがラスト」

っているから、 この町について調べてみた。 昔の書物などが大量にあり、 この町は毎日日記のようなものを取 おかげでやっと謎が解

けた。

「よかったね」

「メモに褒めるな」

もう一つ紙があった。 く順番どおりに出てくるなぁ 古臭いし昔の文献のようだ。 しかしまぁ、 良

れており、 なくなった あるときは同じように楽しんだ。 『蒼の町は古くから水月族と深い交流を保っていた。アッオイ 水月族と一緒にいる限りわれわれ人間が襲われることが 水月族は他の魔物類にも大変好か お祭りなどが

いいことじゃない」

みつこが頷く。サキは残念そうに首をかしげた。

「ンで、続きがコレ」

聞こえるような.....』 最近物忘れが多くなってきた。 それに最近水月族の演奏が近くで

「.....で終わり?」

終わり、さも、 書いてる最中になにか有りましたてきな」

· んで?」

「ちなみにクエストの書類ね」

ンター 忘却の町の音楽会を全力で阻止せよ、 協会 期間;一週間 依頼者:八

詳しい内容:町の近くで棲息しているセイレーンの一種『水月族』 彼らの演奏はモンスターには深い感銘と評価をうけている。 耳にも名演奏らしいが聴いたものは記憶の一部分を失う』 人間の

「意味ねぇ!!」

だから町のやつらメモばっかとってたんだな」

「サキちゃん、サキに思い出してからきてね?」

「あぁ、ごめん」

ちっとも悪びれた風もなく飄々とそういった。

種だが.....先に事項した『水月族』 族が揃って大演奏音楽会をすると町だけではなく国全都にまで被害 は加わるだろう』 の音楽会交流がある。 今は町のみにしか進出していないが、5年に一度『天音一族』と 『天音一族』 と同じ類である。 もまた歌に長けたハーピーの一 この二つの一

なんてはた迷惑な!!

あと二日で何とかしなきゃいけないわけだ。 まぁ、 そんなことらしいな。 つまり俺は5回失敗してるから.....

だが曲を耳にしただけで忘れてしまうのだから対処の仕様がない。 サキはコレに悩まされていた。

「依頼者:ハンター協会かぁ」「ってことで、手伝ってくれ」

渋る金の亡者。

に断るわけな 「だよね~」 ひいい !リョ、 (にっこり) て・つ・だ・って?」 しし じゃなぁ 了解っす! いやだなぁ、 私がサキのお願いを無下

と、いうことで、行くことにした。

意外と町は近かった。

やない。 海が近く首都町周辺からは離れている、 っという微妙なポジションの町についた。 田舎だけどそんなに田舎じ

これが『蒼』町?」

石畳の道がなんか物寂しげに見える。

おぎゃー おぎゃー

赤ちゃ は正気がないのかぽ~っ んの泣き声が聞こえる、 と空を眺めていた。 赤ちゃんを抱いたまま母親らしき女

あのおう!!」

あげて飛び上がった。 思いっきり窓から叫んでみると、 女の人は「きゃあ!」 っと悲鳴を

が冷や冷やした。 そのとき赤ちゃんを落しそうになったものだから、見ているコッチ

· あらあら、よしよし」

やっと赤ちゃ んのことに気がついたのか、 あやし始める。

「.....。何していたかしら?」

た。 母親は困ったように首をかしげた。 そして上を見て顔をかがやかせ

「そうよ、町を出なきゃ」

「え?なんで?」

くれた。 みつこが思わずつっこむと、気を悪くしたふうもなく親切に教えて

ちゃんと母親は子供が5歳になるまでは、 けないの」 「この町では皆いろんなことをすぐ忘れちゃうから、 この町から離れなきゃい 妊婦さんと赤

「なんで?」

「え?.....?ん~なんでだったかしら?」

育児忘れるからじゃないスか?またも赤ちゃ んのことをわすれてい

そうな母親を見ながらそう思ったが、 時間の無駄そうだったから。 さすがに口にするのはやめた。

たしか、 西の沖合いにステージがあった気がする.....

自信なさげな口調で進んでいく。

音楽が聞こえてきた。

「ロア武器、拒絶法衣」

通に曲を聴いても平気だろう。 服にピッタリまとわりつくように薄い結界が張られる。 これなら普

「......ほぅ!なるほどいい曲」

落ち着いた中にも明るさの盛り込まれた癒されそうないい曲だった。

さて、 悪いことしてないのに、 っていうか、 とにかく楽器と歌のハーモニーを邪魔すればいいんだろ?」 倒しちゃえばい ソレは酷だぜ?サキよ」 いじゃん」

氷でできており、 テージ! いーじゃん、 と歩いていると。 月の光できらきらと輝いている。 ステージが見えた。 まさしく光のス

しつこい奴だ!また邪魔しにきたんだな!!

何処からもなくそういう声が(声だけでも美声)響くと共に、 海か

ら魚人間や人魚が現れ襲い掛かってきた。

「うわっと!!」

思い出したから『魔法の耳栓』買ったんだった!でも!!」 思い出した!二日目は記憶薄れ度が低かっ でも?!」 たからこのことすぐに

邪魔な方々!邪魔ばかりなさるなんて人間とは愚かだわ!!

天音一族も出てきた。 なぁるほぉうど~~ぅ

「って感心してる場合じゃないな!」

「しかもしかも!」

音一族いがいの魔物たち。自分たちの楽しみにしている音楽会を邪 魔されたくな サキが言いたかったであろうことが言う前に出てきた、 いのなら当然と言えば当然だが.....。 水月族と天

他のハンター が嫌がるわけだぁ ああああ

攻撃を避けながらみつこはサキに向かって叫んだ。

他の魔法は使えん!つまり」 サキ!残念ながらあたしの LVじゃ魔法一つ継続している最中に

「つまり?!」

どす!っと杖でモンスターを追い払う。

致命は負わせれないってこと!早く雷捜して!

天と水なら雷に弱いだろう。 しかし当の犬は何処いった?

わ! おい 口の利き方のない無知な人間め!あの獣なら氷付けにしてやった !きもげろ魚人間!!雷をそこへやった!!

ステー ジの隅のほうに氷付けされた雷が飾られていた。

「てめぇえええらああああ!!」

怒りに力を振るうサキだが多勢に無勢残念ながら圧倒的不利。

「くそ!」

撃も与えられず。 サキの持ってきた剣でなんとか攻撃はかわすものの、 に頼りっぱなしで他のことに挑戦がしたことがないため、 普段から武器 いまだー

水と天のモンスター は自分のテリトリー ドが上がっていた。 させ、 もし慣れていたとしても、 内故に普段より数段もスピ 不利であっただろう。

「どうしたら.....っ

9 自分の武器をただの武器と思うな、 生きた武器だり

•

か八か.....。

「はい?!」「みつこ!」

断られても断られなくても、 にはな! ンマなんて俺には似あわねぇ.....。 とりあえずは俺は前を見据える。 せめて、 かっこ悪くないぐらい

「それで?」「ライに向けて杖を投げてくれ、思いっきり」

なことを言ったのにもかかわらず。 みつこは否定も拒絶もしなかった。 唯一の武器を飛ばせなんて危険

「さぁて?」 して攻撃.....できるか?」 「雷の氷が割れたらロアをすぐに獣に戻してまた自分の元に武器化

なんか、コイツとは気が合う。 みつこが笑う、 つられて笑う。 昔からの仲間のように.....。

「補償はないね!!ロアOK?!」「失敗なんてかっこ悪いまねすんなよ!」

思いっきり杖を振りかぶって、投げた。

「いっけぇえええええ!!」

ぱりんっ

わん!!」

氷から解放された雷が飛び出す。

「雷!! 怒りの雷 !!」

稲妻に乗って雷はサキのところまで戻ってきた。

「きゅうん」

「よっしゃ、 雷行くぞ!!

雷が武器化する。

ら、進化型に変わった。
ライの元々もつ放電がオノにチャージされたままで、 接近攻撃型か

「魂の髄まで痺れさしたらぁいやぁあああああり

雷が一筋の光の柱を創った。

かっっ!-

・結界魔法」

ピッシャ アアアアアアアアアアン!!

•

「サキさぁん、やりすぎ」

も死んでいない。 でも手加減はしていたのだろう。どの魔物も、 に今入るのは……。 みつこは呆然と屍と化した『水月族』と『天音一族』を眺めた。 危険だろうな。 湯気.....たってるぜ? 致命傷ながらも一匹 海

· うきゃあああ!?」

久振りに聞いたサキの悲鳴。

·どったの?って、・・・・・。」

ている。 見知らぬ、 少なくともさっきまでは居なかった少年に抱きしめられ

なんとなく見たことのあるような赤毛に、 可愛らしい眉毛....。

「誰だおまえぇええ!?」「サキ~」

っていうか、この一方的な愛の表現を見れば、 一目瞭然と言うか..

Ξ,

サキ、 はぁ?!雷は犬だし?俺コイツしんねぇし?!」 それさぁ 雷じゃない?」

混乱しているなぁ

「アポロ?!でも、え?あれ?いや、で、でも」「カナタのもそうだったじゃん?」

混乱中、混乱中、只今混乱中。修正します。

「落ち着け」

どす!!

「ぐふ?!」

サキの腹部に杖を叩きつけてみる。うん、 ある意味沈黙。

雷

「んー?」

サキのために獣に戻ってやりなさい」

゙あーい!」

ぽふん・ 本当に獣になった。 ほう! (びっくり)

「本当だ.....おえ」

「わぉん!きゅううん」

すりすり・・・・・。

どうやらサキはLVがあがったのであった。 たたたた~ん

なんだ?もうクエストやっちゃった?」

「カナタやん?どったの」

ちょっとばっかしめんどくさくて逃げてたけど」 「どうしたもこうしたも、 元々このクエストは私の仕事だったのよ、

サキの肩が震える。

「うぎゃああああああああっ!」 「死にさらせぇぇえええええええええええ!!!」

クエスト~音楽会編~ (後書き)

感想あったらお書きください。でわでわ! はい、一人目~シンクロ進化達せ~い。次はもう分かりますよね?

122

クエスト~甘い蜜編~

うちも、 いややなぁ~~~、 ハンターやけん。 こまったなぁ~ でも、 やらないかん。

•

•

あ、..... そうだ。あの人に頼もう。

あの人なら……。 大丈夫やろ

•

· みつこ~~~~~~ ぉ .

「無駄になげぇ!!」

ょとんとした顔で彼女 探し出すのに意外と苦労した。ヤスコを見つめた。 フードの上に猫を乗せたみつこはき

「ふぅん?ヤスコから来るなんて珍しいね?なんかよう?」 手伝ってほしんよ」

その一言でみつこは黙り込んだ。

二人、沈黙に身を投じる。

「OKなにすんの?」

「クエストなんだけど・・・・・これなんよ」

期限:二日目まで 『クエスト:大樹の桃源郷から女王の蜂蜜を取りに行く。 依頼者:世界的有名天才パティシエ』

簡単そうじゃん?」

女王の部分が気になるけど・ とみつこはにが笑いを浮か

昨日このクエスト貰って、 いったんよ海里と二人で」

桃源郷の名に恥じない美しさ、 養にも体の保養にもなった.....。 魅惑の花々に美味しい空気、 じつにいいところだった。 眼の保

だけど

「虫一杯おったぁ~」

· そりゃそうだろ!?」

森なんだから!!

「うちもちゃ んと行ったヨォ!ちゃんと女王のところまでたどり着

いたし。」

おぉーやすこにしては凄いな~えらいえらい。

「むぅ~」

馬鹿にされていけ好かなかったので、 腕をつかんでひねり回す。

いてででで!?ごめんごめん」

あやまっ 解放された腕を震える片手で撫で始めるみつこを無視して..... たので20秒経ってから許すことにした。

イテムもっとったきん助かったけど死ぬかと思った。 猛毒の使い手『ビィイ』 にうちやられたん、 そのとき回復魔法ア

そうかい、で?私が盾になれと?」

首を横にふる。 回はそうも行かない。 普段なら海里に攻撃任せて適当に流してきたが、 今

うちらの、うちの一人の力で倒さないかんの」

「なんで?」

「一族がうるさい」

五人の勇者の一人の血族であり、 ヤスコの一族は『ジャグラー』 が現れる前からいた、 代々のハンター • 族なのである。 魔王を倒した

つってもねぇ ハンター 一人前にはならんかったら.....。 みんなから怒られる。

れんの」 言い訳無用の厳しいところでな?一族の名に泥ぬったら一生でら

「どこに?」

・・・・・・。しらん」

やすこはふるフルと首を振った。 知りたくもないとでも言うように。

やすい んや新屋も一度イッタらしい、 どこにかはしらんけど...

六年制に耐え切れずやめたきん」

義、結果。 は卒業扱い。 ことは名目に残った。 カナタの配慮のもとミスター ハンターをやめてしまったが。 事実全員やめたが形上五年まで我慢した生徒 ・クレアとハンター 協会に講 ハンター であったという

とりいなかった。 しかし、 ここまできてハンターやろうという気力を持つものは誰ひ

しんよ。 まぁ、 そんなこんなでハンター 育成に協力することででられたら い迷惑やわぁ

いや、 なんや」 お前 の場合どんな状況でも師匠ついたと思う。

•

労はなかった。 ヤスコの言うとおり、 クイーンのところまで行くのにはたいした苦

・・・・・虫が多かったけど。

麻痺・ 毒 眠り・行動不能避けのアイテム切れた~金があ

多大なアイテムを使ったので、 涙が出てくる。 みつこちゃん。

師匠が大量に持たせてもろたアイテムも一瞬だったなぁ

「海上なら海里のが数段も上なのにな」

海里も口惜しそうに頷く。 思い っ きり本領発揮できないのが悔しい

みつこも同様で苦々しくなる。

クイーンの巣までは簡単に辿りついたのに、 まではいけなかった。 そのクイー ンのところ

・・・・・・あれ?

「マヨウサいないなぁ」

森の中なら何処でも生息しているマヨウサの姿を今日は見えない。 なんで?

「マヨウサ見えるのなんてみつこぐらいよ」

゙.....え?何?その毒のある言い方」

「気のせいよ」

のくせに』のように聞こえたのは、 「本当?……いや『~ぐらい』 って聞いてるこっちからしたら『 私の耳がおかしんっすか?」

「おかしんよ、みつこの耳が」

いや、やっぱり毒はいてるって! お前も『ビィイ』 になれるぞ」

'勝手にみつこなっときな?」

びゅうううん

「 ! ?」」

ソラから振ってきたものがなにかみつこは分からず反応が遅れた。

海里」

しゅるん

美しい力強いシッカリとした光沢のある硬そうな立派な防御型

た。 白銀に薄い藍色がうっすら浮かんでおり海里の誇りが誇示されてい

わぁぉ

立派なつくりに見ほれた。

.... それより

重くないの?やっちゃん」

おもないよ?」

ヤスコの身長をはるかに超えているのに、 やすこは軽々と天に向け

て持ち上げていた。

みつこもハイりぃ

ん?

あれ毒酸性やけん、 結界とけるんじゃないかな?」

うわ!本当だ」

結界が焦げる音がする。

みつこは急いでやすこの盾の下に行った。

「あれが女王『ビィンズ・クイーン』 どうやって蜜手に入れようか、

なやんみょん?あぁ、 悩んでいる、 か

いま、 コイツ何語しゃべってんの?って本気で思ってしまった。

でも、 大丈夫海里の氷で女王を少しの間動けなくすればいいんだよ」 •

言いたいことはわかる。

女王の攻撃が止むことなく降り注ぐ。 のみ受け止めれる、しかし盾は盾.....。 結界はきかない、 攻撃はできない。

「一瞬でも、女王の攻撃とめれんかな?」

「頑張れ」

私は手出しはしない。

一族がヤスコー人の力で倒せといったのなら。

私はヤスコがやられそうなときの為の保険だ。

「むう~~~……

動くこともままならない。完全ジレンマだ。

「...... やってみよ」

ヤスコはそういうと何気いつも腰に装備していた武器を取り出す。

漆塗りの弓矢。 矢数は10本

「おぉー、いい弓持ってんな」

ヤスコって実は金持ち?

盾をみつこにパスした。

ずしん、 るって!! と重い。 シンクロの差なのか?この重さは10tはいって

「まってやぁ」「お、おお、もい!やす.....はやく」

あはは~良く骨折れないな~なはは~ ロアも大きくして盾を支える。 それでも足が地面に埋まっていく。

_ ん ___

ヤスコが構え矢から手を離す。

びょぉぃん

矢は曲線を描いて戻ってきた。 とんだ距離の距離。

「 · · · · · ° 」

·ヤスコ!真面目にしろぉ」

「真面目やもん!できんだけで!」

界 キれなくていいから、早く終わらせてほしい とにもかくにもヤスコにいったん盾を返す。 腕が限

「駄目だった。」

知ってるよ、見てたんだから。

腕と足に力が入らず横に転がる。

それまで大人しかったロアが、 鼻をひつくかして動き回り始めた。

あ?攻撃止んだ」

見てみると、しーんと静かになっていた。

一体何が?

ロアと海里が同じ方向に眼を向けた。

ンズ・クイーン』 他の木など比べ物にならないぐらい大きな大樹.....。 の住み着いた城の そして『ビィ

ぶぅぅうううん!!

ビィ イたちが木から出てきた、 幼虫を持ったものが多く二列で出て

きた。

大樹に拠点を張る『ビィイ』 が巣を捨てるなんて」

· みつこ!」

?

やすこの示す方向に眼を向ける。 大樹の根元に炎・

「火事だぁああ?!」

「うるさい」

「あ、ごめん叫んでみた」

しかし大樹とて只の木ではない(らしい)だのに炎が燃え上がるな

んて・・・・・。

ロアの眼がソレを捕らえた。

人?」

ている。 飛行攻撃型の武器を持つ女性が燃え上がる炎を前に満足そうに立っァーチャー

_! _!

怒った『ビィンズ・クイーン』が巣から飛び出してきた、 しい金色の体に毒々しい紅の模様.....何よりその針は太くて先が細 大きく美

まるで注射器・・・・・おぉう、寒気が」

アーチェリーを構えた女性は全くの躊躇なく、 むしろ不適に笑って

クイーンに矢を射た。

一本だった矢が三本に増えた上に炎に包まれた。

(おい、やすこ)

(なに?)

(速やかに撤退することをお勧めします。

「なんでえ?!」

(しいー!!)

聞こえてないか確認する、 すこしほっとする。 こちらに気がついた様子はない。

(あれは多分ハンター狩りだよ)

(?、モンスター狩りよるよ?)

(アレは多分クエストじゃない私利私欲のためだろ、 それやるハン

ターってのは六年制のやつらぐらいだろ?)

(そうなん?)

つまり、 をつけられたらめんどくさい。 ているのだから。 前回のビルメイ同様戦闘能力においては向こうのが上。 只でさえヤスコは貧弱オーラー出し 目

女王が押されている。

からか、 「おぉそうか、マヨウサいないのあのひとが狼王のしずくをまいた それだけはありがとう。

楽にこれました。

「邪魔よ!」

女王を退けた。 ヤッパリその強さはみつこの予想を当てるのには十

分な証拠だった。

した。 この言葉は師匠がいった言葉で、 『強いハンターは田舎にとどまらない。 カナタも否定しないどころか肯定

強いハンターは上を行く、 んど居ないらしい。 人のためにハンター になったやつはほと

大体が金・力・権力である。

(こう考えるとハンターって.....。)

人のことが言えないから苦笑いになってしまう。

· あぁ!」

ヤスコが声を上げた

女性は巣にあがりこんだ後、 と違いクイーンの幼虫は薄いオレンジの色をしていた。 幼虫を巣から落とした。 他の白い幼虫

危ない!!」

ぽすヤスコが海里に乗って幼虫まで滑り出した。

なんとか地面衝突は避けられた。

「・・・・・・。うぅう~」

やすこが泣きそうな顔をしていた。

ちゃっ たぁ」 ぐらいか?) あれは「キャッチできて嬉しい」 じゃないな「さわ

嫌そうに幼虫を抱える見捨てないあたりまだましだが。 助かった反面、 われわれは危機に陥ったわけだ。 まぁ幼虫が

あら?幼虫の心臓を取りにきたついでに、 弱小ハンター に会うと

やっぱりハンター狩りのようだ。 最悪だ。

「何で心臓?」

れるとソレはそれは美しい虹色に輝く金色の宝石になるのよ?」 あら?知らないの?ジィンズ・クイーンの幼虫の心臓は空気に触

こは現実逃避を図る。 しかも私利私欲説もあたった。 自分探偵になれるかも?なんてみつ

ていうかヤスコ興味ないならきくのやめようぜ?

「ふふ…。」

アーチェリーをかまえた。

いでしょう?」 「死にたくないでしょう?痛いのは嫌でしょう?女の子だものか弱

優しく諭すように女性は語り掛ける。

タイガー を持っ その手に持っ たそこの子もね」 ているものと、パー トナー置いていきなさい?勿論

「..... ぎくり」

ますねぇ 口に出してみる。 女性は嬉しそうに微笑む。 あぁ、 見下してくれて

嫌 !

ヤスコはきっぱりと断った。

「なんでやらないかんの」

最もだけど、自分の置かれた状況を確認しようぜ?

「そぅ?じゃぁ仕方ないわね?さようなら」

アーチェアから矢が6本放たれる。

ヤスコもそのほかの虫たちにも結界を張る。 の場所.....次々と森に火をつける。 炎の矢の焔が獲物以外

「酷いことするなぁ」

虫たちも当然騒ぐ。

や二つ燃やし尽くしたぐらい、 あら?都会に行けばこんな森いくらでもあるわ?田舎の森の一つ どうってことないわ」

つまり、あんたは弱い。

あれ?思ったよりも短気? みつこの言葉に女は手を止めた。 ずっと微笑んでいた笑みが消えた。

それは?どういう意味かしら?」

しまった!と若干思ったがココまできたらもういいかと腹をくくる。

ないじゃん?つまり自分LVにあわせてるってことなら、 ゆうとおり、弱いってことなる」 「だって、 それなら王都でも都会にでも行けばいい のに、 そうじゃ あんたの

できて自分のおかれていた状況を思い出した。 でしょお?と満足げに尋ねると女は頬をひくつかせていた。 そこま

よわいことになるわよねぇええ?!」 「そぉおおう、 私が弱い.....ソレよりも貴方たちはもぉおおおっと

炎の矢を無数に放つ大人気ないなぁ真実言われたぐらいで。 と吃驚したが、 あることに気がついいた。 あわわ

「森を焼き尽くすなぁああああ!!」

手には盾。ヤスコが.....敵に立ち向かった。

「邪魔よ小娘!!

矢が放たれた。

「ヤスコォオ!?」

海里が盾になった。 どんな攻撃も通用しない。

海里!!いくよ」

絶対防御型の進化型盾から剣が装備された、たて 氷のようにクレアで美

静かなる怒り 氷の刃!

きゃあああああああ!

アーチェアが傷つけられ、 武器化をといた。 どうやら白いリスだっ

たようだ。

そんなことより

ヤスコは呆けた沈黙で、 海里のは なんだろう?

とにかく、 海里も人間化した。

なんかコメントしろよ!!」

あまりの二人の静かさに思わず耐え切れず突っ込む。

ビィ ぶっうん イたちが三人と一匹を取り囲んだ。

なんだ?やるのか」

ぁ 海里がしゃべった。 海里はヤスコを護るようにして前に立つ。

•

がしい

海里の眼を盗んでビィンズ・クイー ンはヤスコをさらった。

゙ あぁー りぇー 」

呆けているやすこの変わりに叫んであげてみた。 っていう顔をされてしまった。 そんな顔で見ないで? ロアにどうしたの

•••••

海里が攻撃しようとしたが上からヤスコが降ってきた。

・ 蜂蜜貰ってきたぁー」

海里もソレを見て納得したのか獣に戻った。ビンいっぱいに蜂蜜を積めて戻ってきた。

「みつこー」

「ん?」

「うち、やったでえ」

ヤスコの笑顔にみつこも嬉しくなって笑顔になった。

、よっしゃ、帰るか!」

•

「帰り道わからーん」

!

まよわせーる まよわせーる

「だから!まよわせないでぇええええええ!!!」

終わり

クエスト~迷いの墓編~

突っ込みも虚しいなぁ ここはどこ?私は誰?いや、 ソレは分かるから! 人

帰れない。道は何処だ?道なき道を進む俺・

「おーい、誰かぁ」

繋いだ手が離れない。 ひんやりと血色の感じられない冷たい手。

行けども行けども先は見つからない.....。

サル吉

お前だけが頼りだよ

•

くい、くい・・・・・・

フードに違和感を感じ、後ろを振り返る。

誰もいない

「きゃー(棒読み)」

「うきぃ」

サル吉か、 どうした?リィシャと喧嘩でもした?」

居るのはサルー匹。 そんなに珍しくもない組み合わせ。

しかし、 この真夏にマフラー?

うきぃ

夏ばて気味やン」

マフラーを取ってあげる。

手紙が仕込まれていた。 宛名はリィシャだった。

リィシャから?なにかね~」

『ゴメンナサイ助けてマジたのんます。

だけかい!?」

けがない。 他に詳しいことは何一つ書いていない。 助けに行こうともいけるわ

うき!」

ついてけって?OK行くよロア」

がう

森は薄暗く真夏なのに寒い。 行き着いた先は俗に言われる『死者の森』 なるほどサル吉が真夏なのにマフラー だっ た。 ひんやりとした

していたわけだ.....。

うきぃ?」

まぁ、 ココまで来て、 仕方ないか リィシャの行動先は不明になった。

「狼王のしずくをまかないとね」

こんなところにも居るのか・ マヨウサ。

「好きだな~いや、好きでいるわけじゃないのか?」

いや~ん、とマヨウサは去っていく。

・去っていったはずなのに戻ってきた。

はぁう!? いっやーん

目がもろ合うともう一度逃げていった。

「マヨウサが迷った?」

だとしたら狼王のしずく……無駄に使っちゃた。 もしかして、 マヨウサ無しでも、 いやそれ以上に迷うダンジョン?畜生!

・・・・・・くう」

「あ、みつこ」

「うきゃあああ?!ってリィシャか」

「逃げたほうがええよ?だって敵が」

後ろを指差す。 骸骨とお化けが浮遊しながら追いかけてきていた。

いやっはぁああああああある?!」

吃驚しすぎて変な悲鳴になっちゃった。二人一緒に走り出す。

あいつらゴーストタイプだから物理攻撃効かん~

`あぁ、それであたし呼んだと?」

「そぅそう」

持ってきたのにさ。 もっと詳しく書こうよ、 そしたら『ゴースト仮肉体』ってアイテム

ロア!武器化」

魔法の杖に変わる、炎の魔法を食らわせる。

攻撃が当たればそんなに強くないのか、 一瞬で姿を消した。

「......で?何があったの?」

· クエストよ」

ね~まぁ、 また、このノリか.....。 金貰ってるけどさぁ~あーあ、 最近多くないですか?絶対苦労するんだよ いい加減諦めてきた。

えっとなぁ、 依頼主がこのお方で、 ないようが」

· ちょいまち」

「え?」

今、「このお方」っていった.....?

このお方」

リィシャが左手を上げる。

顔をしたに向けた青白い髪の長い少女の霊。

悲鳴あげそうになったが、 ・なんで繋ぐ意味あるの? ソレよりも声にならなかった。

「何で、手繋いでるのさ?」

だからクエストだって」

わかんないから」

【墓を・・・・・

「どう?!」

イキナリ声が聞こえてきた。

【私の墓を探しております。 この方にお頼み申しました】

な、なるほど」

リィシャに頼むってのも無謀な気がする。

てさそこの城の中があやしいと思うんだ」 俺も初めて知ったんだけどさ、この森の深く置くに... : 町があっ

· なんで?」

勘?

か。 なんて根拠のない予測。 まぁ獣っ子だし。 野生の勘に頼ってみます

【こちらです。】

幽霊が道案内してくれた。

「えっと、クライアントはなんて名なの?」

忘れました、 もう何年もさまよってます。 墓を見つ

ければ思い出すのですが.....】

「そ、そう?」

見た目年下中身かなり年上、と見た。

•

ほんとだ、町だ」

王都並に広い。 活気盛んな土地だったのだろう家や公園が沢山ある、

ただし面影が.....ではあるが。

(ん?看板『帝都ルークリスレイ』?元は帝都だったのか)

本当に出てきた。

【気をつけて、

帝都の中にもモンスター

は出ます。

薄紫のお化けに青いお化けに何故か赤いお化け

あーもう、うっとしんじゃあ!」

団駄踏む。 リィシャがサル吉を投げるが、 本人曰くすっぱぁんってやるのが好きらしい 貫通してノーダメージ悔しそうに地

炎攻撃!」

掃するが次々と出てきてキリがない。

「ええい!走れ!!」

何とか逃げ回って城の中に入り込んだ、 が中はもっと凄かった。

「まるで、 ロア!最大炎攻撃!!」まるで、モンスターの単 の巣窟」

ゆらり、 だ? 何度でも復活する。 なんてこったい。 どうしろっていうん

理攻撃喰らわないのだから無駄なきがする。 リィシャもサル吉を飛ばしまくっている、そんなことしたって、 物

Ļ

がしゃ ああん

さぁぁ

何かが壊れた音とお化けが消えた音。

?

何した?」

わかんない」

わかんないのか、 手がかりになると思ったんだけどな。 と歩いてい

城!= 箱= 宝!!

「・・・・・・駄目?」

見つけちゃいました。宝箱

【ドウゾ、 もう、 私たちには必要ないものでしょうし】

ということなので遠慮なく貰うことに.....、 中を開ける。

[銀色の剣を手に入れた。]

おぉーぅ!たっかそぉう

ラッキー !と思いながら歩いていく。 と、こけた。

'いてえい」

幸せ度ちょっと下降。

「なんね?」

足をさすりながら起き上がってソレを見る。 した死体。 立派な服を着た白骨化

霊はソレを無言で眺めていた。 リィシャと二人飛び上がった。 なんかもうここ心臓に悪いヨォ?

お、お知り合い?」

ちょっと失礼な質問だったかな?と苦笑いで誤魔化す。

【はい、 記憶にございます。 ハッキリではありませんが

感じたからだ。 霊が顔を上げた。 二人も顔を上げた。 つられて、 では無い。 殺気を

【ぎゃあああああああああある】

大きな山羊骨の頭を持つ怪物がでてきた。

. こっちがぎゃーだ!この野郎」

何あれ?!怪物?!」

【アレは.....、そぅ。 魔王です】

魔王?!二人は反応する。

うな】 【死せる魔物の王..... サーガです。 昔はもっと知策に溢れていたよ

今は理性がないのか、イキナリ襲ってきた。

「ぬあああああ?!」

「くそ!死者の王が死んでどーするよ?!」

【もともと、あぁでしたけど.....】

戦闘開始!

魔王は死者を呼んだ。 みつこは魔法を唱えて消滅させた。

. やばいやばい!」

魔王のゴースト吸引、その際体力回復

「もともと、全回だろうがぁ!!」

みつこの攻撃 サンダー 魔王にはきかなかった。

「うぉりゃああ」「まじか?!」

リィシャの攻撃、しかしきかない。

「飽きるなリィシャ!!」「もぉやだぁ」

魔王の攻撃 冥界への道

黒いブラックホールが何もない空間から突如現れる。

「やだやだやだやだ!」

「やばいやばいやばいやばい!」

【きや!】

なんとか、 二人一生懸命ブラックホー やりすごした。 ルに背を向けて走る。

マジで死ぬかと思った!」

みちこ!」

みつこだよ!!」

リィシャにブー メランでぶっ飛ばされた。 いたいぞ (怒)

うぉおお!動けん~」

っ た。 骨ばった手 (というか骨) に押さえ込まれてリィシャ行動不能にな

みつこのいたところにも骨の手が落ちてきた。

間一髪

リィシャ

親指を立てる。

(許す!)

「うっきぃいい!!」 助けて~ (汗)」

サル吉が自ら助走をつけて武器化した。 骨にアタックするがダメー

ジ5ぐらい。

炎攻撃!!」

ごぉおおお!!骨を焼き尽くす。 危うくリィシャまで焦がしそうに

なちゃった (星)

サル吉のもう一度のアタックでリィシャは脱出成功した。

【大丈夫ですか?】

心心

しかしまぁ、へろへろだ。

自分が動く系なのに、 クライアントとずっと手を繋いで、 攻撃は物

理攻撃がきかないし。

め、涙でできたリィシャちゃん。

「うっきー!!」

サル吉も同様に悔しいらしい。 当たりすらしないんじゃ、 ないプラ

イドが許さないらしい。

【うがああああああああああある】

「うがああああああああああああああああああ

(わざわざ敵と同じ雄叫び上げなくてもいいのに

二人が初めてダッグを組んだ。

【綺麗・・・・・。

光が二人を包む。

飛行攻撃型の進化型 (卍型手裏剣) プーメッシン に変わった。

いっけぇ 光速の怒り 疾風朧!!」

卍型の手裏剣が光に包まれ、 数を増やしていく。

【がああああああ】

「切り刻め!!!」

光り輝きながら動く手裏剣は闇を照らしていった。 魔王は、消滅した。

【ぎゃあああああああああああああ】

.

「リィシャ、お疲れ、バナナ食う?」「あぁー つかれたぁ.....」

ぐいぐい、頬に黄色いものを押し付けられる。

邪魔!」

が瞳に涙を浮かべる。 ばしぃ!バナナを地面に叩きつける。 Ķ バナナを持っていた少年

「う、う、うう~」

うるる~

リィシャのバかぁああああああ!!--

バナナの雨が降ってきた。 なくなった。 それにリィシャが5秒もかからずに見え

みつこはなんともいえなくなった。

えしん」

【あ、あのう?この方は?】

サル、それ以外でもそれ以上でもないから気にしちゃ駄目だゾウ

(星)」

【は、はぁ】

なれたので、リィシャをほっといて先に行く。

・・・・・・。凄い、立派な中庭」

魔王がいた先は中庭で、 綺麗な庭園だった。 その奥に一見彫刻に間

違えそうな像が見えた。

優しく微笑む銅像。

コレは.....!」

【思い出しました。】

少女はおぼろげな姿からハッキリとした姿になった。

長い髪は優しい蜂蜜色の髪で、 瞳は癒しをたたえた翡翠の瞳...

【私はこの帝都の第一王女.....シェンジェ】

みつこは王女を称え膝まづいた。

「王女?!」

獣になっ 上げる。 たサル吉を連れてきたリィシャがそれを聞いて驚きの声を

゙リィシャ!!」

傍に来た馬鹿の頭を下げらせる。

私は亡くなっております。 【どうぞ、 お立てになってください。 わたくしだけではなく、 もとは王女だとしても、 民も】

悲しそうに顔をゆがめた。

いったい、なにがあったのでしょう?」

【神です。】

、 え ?」

神?

突如現れた扉が開いたのです。 【扉を繋げたのです。 魔物も魔王も、 そして、 元はこの世界に存在しません。 その扉を開けたのが、

そんな、馬鹿な・・・・・。

王女が嘘を言うわけもなく、 事実だとしても・

ありえない。

扉なんて見たことないし。 魔物なんて、 ほいほいいるし。

のです。 力尽きたようですね.....】 【帝都は滅びました。 最後の日までカレは、 このように、 セーガと戦ってくれていましたが、 魔物の世界の瘴気に当てられた

に触れることができない。 みつこが足を引っ掛けた骨にそっと手を触れる。 しかし、 幽体は物

・足引っ掛けて、ゴメンナサイ。

良心が痛いです。

はさせていただきます。】 【...... ありがとうございました。 私は帰ることができました。 お礼

クエストを完了したわたしたちは森を去った。王女は儀礼にのっとった形で頭を下げた。

•

·ってことがさー、あったのよ」

カナタにいってみる。

リィシャが帰ってこないのはそうゆうことがあったのか.

ものことだと思ってた」

「え?俺そんなにおそい?」

「おそいよ?!自覚ないの?」

え~、と納得できなさそうに口を尖らせる。

なんか、 そう」 あたしの周りで進化しまくってんだけど?あたしのけて」

ムカつくのでカナタの飲んでいたコップを奪う。

なんで、これいっつも髑髏の煙ういてんの?」

そーゆう飲み物だから。.

うまい?」

中々」

口貰おうとしたらカナタが声を漏らした。

・・・・・・なに?」

髑髏ふきとばさにゃあ、死ぬ」

「どんな飲み物飲んでんだよ!」

なんか、飲む気うせたので素直に返した。

「お前も早く強くなれよ。じゃなきゃ

· ?じゃなきゃー?」

・・・・・・・・。えーと、可哀想」

「溜めてから酷いこというな!!」

みつことカナタがもめている間、 リィシャはボーっと考えていた。



みちこー・・・。えぇ只の打ち間違いですよ。

王都~そっくりさん!?編~ (前書き)

入るにはソレ相応の身分がいるのです。 王都は町や村に囲まれていて、さらに高い城門に護られているから

「やっすこちゃぁん」

「ぅわきも」

「一言目がソレか」

しない。 公園にてヤスコを呼び出した。 勿論用事もないのに呼び出したりは

「王都いこーぜ」

無理よ、だってハンター は中級にならな地元から出れんって言う

....

違う違う、遊びに!遊びに行く権利ぐらいあるっしょ

でも、 あぁ、 とヤスコは続けた。 たしかに~とヤスコも頷く。 珍しく物分りがよくて嬉しいぜ。

「通行所、持ってないで?いくの町じゃないんだろ?」

行所いるんだよね」 町なんて休日はいりゃぁすぐいけるっツー තූ そうなんだよね通

けだけども..... 王都に住むことも難しい.....。 王都は大事な各町や村の要、 そう易々とは近寄れない まぁそれは只単に物価が高いからだ し入れない、

とにかく、王都への通行所をもってるのは商人か役人か金持ちかハ ター 中級以上ぐらいだ。

. やすぃんや新屋に頼んでも駄目かな?」

だとしたらもちろん都会への仕入れもやってるはずだ。 一応何気に大手アイテム会社の一つだ。

「聞いてみる。」

「まじで?やった!さんきゅ」

「いやわからんけどな?」

と、言うことで聞いてみた。

「いいけど?」

「マジでやったアリガトおかーさーん」

誰がお母さんよ!!あ、 でも行くなら三日後がええで?」

「なんで?」

お祭りがあるんよ、たしか末姫様のお誕生日際だって紹介状あっ

たらお城の舞踏会に参加できるらしいけど」

「姫とか、まじどーでもいいし」

かマジどうでもいいしぃ~ あっさり切り捨てる。姫って高飛車なイメージあるしぃ、 舞踏会と

お母さんじゃないっていってるでしょう! それより当日ようにお金ちょーだいおかー さん

「冗談だよ。狼王のしずく買いまーす。」

「まいど」

サキやリィシャも誘うかな~。 あーたのしみ。

【三日後・・・・・】

「わーいお願いしまーす」

いい?!はぐれないのよ?!無駄遣いも駄目!迷子にならないこ

と!とくにリィシャ」

「何で俺?!」

「はーい、おかさーん。きをつけまーす」」

誰がおかあさんやっちゅうねん!!」

馬車で移動すること約半日。

・・・・・・ケツいたい」

お尻って言いなさい!もう」

「何が違うんだ?」

· さぁ?」

夕暮れ時になっても熱狂は留まる事はない。 人がもの凄く多い。

「はぐれるなよ!リィシャ!」

「はぐれんて!」

いや、お前なら分からん!

「ランジェ!?」

ぐいっ!!

「え?あ!」

腕を引かれ何事かと振り返れば、 そこには居るはずのない人がいた。

゙カナタ?!」

のかめんどくさいのかよくわからない無表情女・ いつもと同じ緑帽子にベストとシャ ツ そし て不機嫌な

「・・・・・・あ、え?」

らした (んだこら)。 向こうもおとぼけた顔をしたあと、 サキたちも気がついて挨拶を交わす。 納得したのか目を思いっ きり逸

「なにやってんだ?」

え?べつに?なんでもいいじゃん」

゙オネーさまぁ > > みぃーっっけ」

吃驚した。 カナタの後ろから聞き馴染んだ声がした。 今度こそ声も出ないほど

み、みつこが二人!?」

違いなくみつこそのもの。 の前にいる。 カナタの後ろで「 お姉さま」 しかしロアの主人のみつこはカナタの目 とほざきながらくっついてい るのは間

みつこのそっくりさんがジロジロみつこをみる。

「ふぅん?あなたがお姉さまのぃ」んぐ!?」

なんか気になること言いかけたがカナタに口を塞がれ中断する羽目

になった。

こっちとしてはちょーう気になるんですけど。

余計なこと言わなくていいから、 帰りますよ」

ずるずるそっくりさんを引きずっていく。

「えーやだぁ、 私も城下で遊びたーい~いいじゃなー い私の誕生日

なんだからさぁ

「駄目に決まってんだろ」

私の誕生日?ってことは」

「姫?!」」」

笑った。 そーでーす とうれしそうにみつこそっくりさんもとい、 お姫様は

何から何までそっくりだ、性格以外。

「そぉだ、せっかくだものお城に招待するわ!お姉さまそれならわ

たし帰ってもいいわよ?」

.....。だ、.....だめ?」

何で悩むんだよ、なんかあるのかよ」

てかなんでお姉さまなん?」

お姉さまはお姉さまよゝねー」

私の姿声でお姉さまとか寒いー

本気寒そうに肌を擦っている。 カナタは苦笑いを浮かべるしかなか

さぁさぁ !いきましょうよ」

がついている。 大きなお城は純白で汚れ一つなく、見事な細工は施され、 なんというか言葉に出せないぐらいスゴイッス。 ということで、 トで埋め尽くされおり、 お城に入っていった。 シャンデリアなどには惜しげもなく宝石 天井はア

四人は魂を出すしかなかった。

新屋は?」

師匠本店のほうみにいった。

ふしん」

お前等地味に現実逃避すな!」

ガチャ 扉が開いた。 みつこそっくりさんが二人に増えた。

MEがふたりに!?」 ねー違うわよぉ!」

姫(?)は嬉しそうに微笑むと片方のみつこの頭をつかんだ。 黒髪

が流れる。

ぁੑ カナタ。

目が死んでる。

おあは 面白いでしょう?前に影武者してもらってから、 惚れちゃっ たの

「ランジェ・ しゃってるんだから」 そろそろ舞踏会に、 兄上多数陛下もいらっ

「あっそう」

姉君多数陛下さまもね」

・仕方ないわね」

渋しぶ行く準備を始める。

「多数って.....。

「王族だもの、 普通よ」

一夫多妻制」

横でカナタが付け加える。

「王族は違うな~ミィも王家に生まれたかった。 ぁ、 すんません嘘

です。

「お前、言ってて悲しくないか?」

「三つ個双子だったん?」

いやいや、んなわけないから。

メイドさんにペットはお預かりしまーす。 と運んでいった。 海里を

苦もなく運ぶなんて、 やるな!!

もうそろそろお暇せなな、って!運ばなくていーしっ

遊べへん」

遊んでいきなさいよ」

姫が笑う。 屈託のない笑みだった。

別名、 これは 全くの有無は言わせないぞオーラーであったが.....。 これは

「嫌な予感」

「同じく.....」

「着替えなさい!」

指をぱっちんとならすと、 ズら!!っと沢山のメイドさんが現れた。

「え、ええええ」

がし!がし!がしぃん!と一人ずつ捕まっていく、 行かれるのみ。 後はもう連れて

なすがままのハンターたちにカナタは同情のまなざしを向けた。

「まずはお風呂からです!ですです」

「ぷわ!は、鼻に水が」

んたち。 ザッパーン、 とお風呂に投げ込まれる。 意外と雑だぞココのお姉さ

「なんかうぜ!ってでででえで?!」「よぉーっく、洗ってください!さいさい 」

なんっていう拷問!?ごーしごーし、力いっぱい現れる。

「アァ、もうしんどいぞ!」「さぁさ、出てください!出る出る」

霊をかけて大否定、 体を拭かれそうになってなくなりかけの気力を奮い立たせて全身全 っほ 拒絶した。 メイドさんも、 無理強いはしなかっ

「でわでわ、お着替えでーす」

帰りたくなった。 拷問なんだろう。 シルクの滑らかで美しいドレス。 って言うか、 なきそう。 こんなものをきるのかと思うと、 貧乏人にはなんて堪える

いっそ楽にしてくれ。

ガチャ

おわりましたです ですです 」

の言葉に頷き、壁近くまで下がり銅像のように微笑んだまま動かな 何が嬉しいのか、満足そうにそう報告した後、 くなった。 こわぁっ 「下がっていいわよ」

他の三人も同様、もはやげんなりしている。

「んじゃぁ!行くわよ!」

「何処に」

「決まってるじゃない!」

カナタがい つもよりお つの間にかドレスから着替えた格好をしていた。 しゃ れしている。 こいつも顔が死んでる。

S!舞踏会~

大きな扉が開かれる。 あぁ・・ ・帰りたい。

皆が心の中で思ったことであった・

〜) (ふふん、今回の私の誕生日!おっもしろくなってきったぁあああ

終わり

王都~そっくりさん!?編~ (後書き)

に三つ子か!?みつこが、ひとーり、ふたーり、さんにーん・ みつこなだけ

・・・クダラナクテ、ゴメンナサイ。

兄弟姉妹多いッス

大広間への扉が開かれる。

ざわ

煌びやかな貴族や麗しきほかの国々の王族そして、 さんたちが開かれた扉に注目する。 かく所のお偉い

わ・ わたしら場違いじゃねぇぇえええ!?

4人当然の如くは尻込みする。

メンナサイ」 「ごめんなさい、ごめんなさい、ごめんなさい.....生まれてきてゴ

「みつこ、大丈夫か?」

ブルーな気持ち~現在進行形。

もたつく4人にじれったいものを覚えたのか、ランジェ姫が出てき

も一早く行きなさいよ、 後つっかえてんだからさぁ

がおきた。 たしかに、 でも階段の下は未知なる生物がいるような、 そんな目眩

恐ろしすぎる。

やぁ、 愛しき我が姫」

そ :: っと優しく手を引かれる。

「え?」

美しい藍色の髪に、 お持ちだった。 力強いサファイアの瞳、 慈愛に満ちた雰囲気を

っていうのに ?どうかしたのかな?いつもなら『お兄様、 キモイ』

「あ、あたし」

嫌だわお兄様ったら、 実の妹も見分けられないの?」

ランジェが隣に並ぶ。

「おや」

「よう、 アイルどうした?ご婦人をお待たせするなんて、 感心しな

いな」

「カイル、どうもこうもランジェが二人に」

短いぐらいだ。 同じ藍色の髪に、 サファイアの瞳・ 髪がさっきの人より

「双子?」

そうだよ、そうしていると君も双子みたいだな」

· さっさとおりましょう」

ランジェに促され階段を下りる。

「ランジェ姫、お誕生日お祝い申し上げます」

「これは、痛み入りますわ」

いやはや、 ランジェ姫こうしておりますと双子のようで..... . 影武

者ですかな?」

いいえ、カーレ大公彼女は私のお友達なのですわ。

さっきとはうってかわって『姫』らしい態度になる。 キャリアが違うなー

[・]君たちはランジェのお友達かな?」

「わぁ?!」

った、 イキナリ気配もなく後ろに立たれ思わず吃驚して大声を上げてしま リィシャ。

だが、 しまった。 このお祝いの宴のなかでは、短い悲鳴も簡単にかき消されて

おや?ハンターの割にはまだまだだね」

を細めた。 くすくす笑いそのやわらかな薄紫の髪をなびかせながらルビー

おぅ、サーシェリ来たか」

喜んで参上しますとも」 『来たか』 とは、 ご挨拶ですね。 カイル兄上愛しい妹のためなら、

「よくいうぜ」

· ちょっとみんな、とくにあんた」

ランジェが四人を集める。 シャ は府抜けた声を出した。 とくにリィシャを指差しながら。 「おれ

あんたよ、 サーシェリにい様が来たところ確実に一人死ぬから気

をつけなさいよ」

「コワ!どんないわく付き?!」

から。 噂じゃサーシェリにい様は人をなぶるのがすきって言う噂がある まぁ、 あくまで噂だし、私は信じてないけど」

様は、 まぁ しかし、 怪しいことこの上ない。 そうはいってもにこにこ絶やさず笑みを浮かべている

「まだまだ出てきそうだな」

「サキソレはしつれー.....」

. 何が、ですか?」

「どうわ!?」

サキの斜め横から急に声がかかったもんだから、 飛び上がるぐらい

吃驚する。

今までの男たちに比べて、 低い背の蜂蜜色の髪の毛に琥珀の瞳.....

けなげなまさしく王子様って感じがする。

·ヤーウィルこれたのか」

「はい、お兄様方にはいつもご心配おかけして」

、それは、いい」

ランジェ が嬉しそうにヤー ウィ ルに飛びついた。

「おにいちゃーん」

「ランジェ」

抱き合うと同じ蜂蜜色の髪の毛が交わる。

同じ妃から生まれたものは違うネェ、 くすくす」

は本当なのか? 不穏なことを流すから変な噂が流れるというのに、 のしかしたら噂

ナ姫ナァシィ姫ハリュル姫マリウェンダ姫のご到着です。

「「げ」」

アイルとカイルが苦笑いで反応した。

様でその姿を表せた。 その言葉通り扉が開かれると、その身にあった綺麗なパーティ用ド レスを身にまとい、上に立つものとして恥のないぐらい、 堂々たる

. う

ランジェも嫌そうだ。

゙お久しぶりですわね。カイルにアイル」

「ターナ姉上もお元気そうで」」

「えっとぉ、どういう順番?」

ん?うーんとあかさたな順よ。 たなはま、 あかさ、 やらの、 順

(あいうじゃねぇ!!))

・・・・・。「わ」は?」

「ん?何聞こえなかったわ。」

「え?いや、なんでもなイッス」

せっ かくだもの、 踊りましょう。 おねーさまぁぁぁ

た。 ランジェはクリン、 っと一回転まわるとカナタに向かって飛びつい

わたくしなど、 とてもとても」

ということで踊りまショー」 「謙遜なんてそんな......私の舞踏会では身分なんて関係ないのよ

いえ、 自分は踊りが苦手なので」

いーからいーから」

カナタは心底嫌そうな顔を見せた。

そうだ、 せっかくだもの。 あなたたちもお兄様たちと踊ったら?」

え?」

それは結構だ

人は踊ることになった..... しかし王子様は踊る気満々だ断れるわけも無く困ったことに五

「ふふ……今まで見てきたご婦人の中でも、 君は慎ましいね」

だけなんですけど? コは困った顔を向けた.....慎ましいというか、 アイルは嬉しそうに目の前の女性、ヤスコを見つめ微笑んだ。 ただ何も考えてない ヤス

たかな?」 サキ. ..だったかな?つまらなさそうだ。 私相手は不服だ

カイルにそう言われて直ぐに愛想笑いをうかべて否定した。

そんなこと.....ただ慣れなくて、 ほら!お、 私平民ですから」

はともかく、敬語は苦手ダ サキは肌がむずかゆいのを我慢した。 普段一人称俺から私というの

アイルはサキを愉しそうに眺めた。

「 照れる.....」

みつこはヤーウィルに見つめられ踊りどころではなかった。

「あの、何が?」

· え、ああ!いえ、すみません。.

またランジェに似ているとか?

貴女がどんな女性か、良く見てみようと思いまして。

「?どんな.....女性か?」

はい、 女性と云うものは裏表のある恐ろしくも美しい生き物だと

.....教わりまして」

あー.....間違ってはないんじゃない?

納得

なダンスに試行錯誤していた。 豪華なパーティ ーの中でも興味なさそうな顔をしたリィシャは苦手

クスクス.....君は不器用だね?器用なぐらい。 こういうのなんて

いうか知ってる?」

だから当たり前だが.....。 サーシェリに貶されたリィ シャは答えれなかった。 聞いていないん

「ふふ.....ねぇ君はホラーは好き?」

囁くようにサーシェリはリィシャの耳元で言った。

今夜、死人が出るよ」

きやああー!!

悲鳴が上がった。

- 人が死んでる—?!」

「いやぁー!」

ざわざわと落ち着きをなくす。

「ハイハイ、ごめんよ~通らしてね~」

ほんわかした、 の所にいく。 どこかマイペー スな女性が人の輪を通り抜けて死体

「おや、つぢじゃん」

「いや、トゥディだからね?カナタ」

「カナタの知り合い?」

みつこは不思議そうに尋ねた。こいつに友達いたとは。

「あーうん。分かった」

見ただけで分かったのか?!どんだけ天才だ!!」

「え、違う違う。 いつものような犯行だってこと」

まだ捕まらないの?」

トゥディはあたし医者なんだから知らねーよと呟く。

「ハンターなんだから犯人捕まえてや」

履き違えるな、 ハンターは狩人で探偵じゃないぞ」

怒ったように答えたカナタに比べ、リィシャは嬉しそうに目を輝か やりたそうだ (汗)

おぉ、 犯人を捕まえてくれるのか?ありがたいの」

「だれ?ひげもふのあふろ爺さんは」

「父上だよ」

ヤーウィルが父上といった。王子の父上といえば一人.....そう、 \neg

王様」只一人

ワタシナニモイテマセン

れた。 みつこが渾身のボケで誤魔化す。 優しいヤー ウィルは聞き流してく

気がつかなかった、 なにいってるのお姉さま、 いつからお出でに?」 初めからいたわよ?」

「まじか」

もっとひどいのがいた。

「犯人を捕まえるまで、 いつまでも滞在してもよいぞ」

える

「それって……」

そんなこんなで犯人探しをすることになりました (汗) ぎゃくにいう、犯人捕まえなきゃ城から出さないぞ宣言?

終わり

王都~犯人確保~

事件から一夜明けた.....大きな国の象徴のお城は静かに目覚めを果

「起きてくださいませ」

ごろりん

あぁ」

メイドさんに布団をひっぺがされ布団から落ちる。

「さぁさぁ、皆様お待ちしてますよ」

といって追い出された.. に皆様揃っていた。服を着替え客室に行くと、あっら~本当

· おはよ~」

昨日スッキリ眠れたみつこは清々しい気分で挨拶する

が

「はよー」

['] おふぁよー」

「...... お早う」

サキもリィシャもヤスコも眠たそうだ。 曰く『緊張して寝れなかっ

た らしい、 何を緊張することがあるのだろう。

名乗るような立派な肩書きも無いけどね~」 あるだろ!もし事件解決しなきゃ名に傷がつく!」

サキから飛び蹴りをくらい倒れ込む。 と扉が開いた。

レン= ワイズマン!あいつ絶対......おぉ、 起きてたのか」

ハロー皆」

「カナタとトゥディ先生おっは~」

レン=ワイズマンって誰?」

リィシャの言葉に皆で黙りこむレン= ワイズマンを知らないと?

「 ハンター 協会会長だよ」

゙ふぅん?で?それがどうしたの?」

カナタが停止する。がすぐに動き出した。

..... 今回の事件解決できたらハンター協会の利益に入る。

えーなにそれ!うっぜぇ」

逆に、 できなければ.....困ったことになる。私にとってね」

カナタが困ること?

「って?」

.....、私紹介だから」

あらそー。ということで移動してみた。

トウディの死者の死因・場所 ・関係者の資料を貰っ てみたけど」

関係、 場所、 すべてばらばら、共通なのは殺され方。

「背中を一気に裂かれ、 頭カチ割って目玉と脳みそ引きずり出して

「グロテクス」

「てか、ツゥディ先生よくさらりといえるなぁ~」

「トゥディね・・・・・・慣れてるから。」

ホラーとか強そうだ。

コレだけ見ても何にも思いつかない。

`もうさ、確信に迫ろうぜ。たいそいし」

皆が疑っているだろう、『サーシェリ』王子のところだ。 サキはそういうと『ある人』 のところに歩いていった。

くす、私が犯人だって?」

「いえ、あくまで参考までに・・・・・」

とか下でに出ているが目は疑っている。

「私じゃないよ、 殺す理由はない 何より殺された人なんて顔も

見た事がないからね」

「無差別・・・・・?」

簡単に答えたリィシャのほうを眺める。

侮辱罪で訴えてもいいのかな?」

「コイツだけなら、どーぞどーぞ」」

「 すばらしい仲間愛だね— カナタ」

そっすなツヂ」

「トゥディ・・・・・」

堪忍したように王子は肩をすくめた。

ま、まさか、 本当に犯人で殺人趣味の悪癖残虐の確信犯?!

「実は私....」

「犯人です?!」

リィシャが先走った。

・・・・・・。訴えていーい?」

「「コイツだけならいつでもどーぞ」」

わーん、皆で俺見捨てるー!?」

サキは仕方なくリィシャの口をふさぐ。 いんだけどね、 と苦笑いを浮かべた。 王子はそんなに大事でもな

私は人の死を直感できるんだ。信じないだろうケド」

ウン、と頷きかけたリィシャを殴って止める。

「でも、そうそう重なるもん?」

「重なるようだね」

っくす、っとわらった。胡散臭い。

その犯人を捜すのが君達の仕事だろう?頑張ってね」

結局犯人決定にはならず、 イル・カイルにも部屋を訪ね聞いたが何も得るものがなく終わった。 部屋を追い出されてしまった。 この後ア

あとは.....ターナ姫とか?」

・ 姫類は止めといたほうがいーよ?」

なんで?せんせ」

・・・・・、女って怖いじゃん?」

納得

とかいっていると、

ったりとした趣で歩いている。 れるようにしていた、とくに目立とうとも思っていなさそうな、 マリウェンダ姫があるいてきた。 パーティのときも姉姫の後ろに隠

これは、マリウェンダ姫」

カナタとトゥディが頭を下げる。

あぁ客人?どうぞごゆるりとご滞在くださいまし」

「はぁ~.....」

なんか力の抜ける姫君だこと……。 つつ聞いてみた。 捜査チー ムは無駄だと分かって

「えっと、連続犯.....?」

あぁ.....はい、可愛いです。

ですよねー?

「え?」

「はい、可愛いです、ます。」

いや、

言葉オカシイッス・

いやいや、

それより可愛い?

「犯人知っているんですか?」

いいえ、ご存じないです。

どっちですか?

イメージが見えます。 わたくしはそういう能力があるから」

どういう能力ですか?

だからといってそういう趣味でもないらしい。 彼女が言うには犯人は人間ではないらしい。 ないらしい。 人を殺しているのは殺意があるからではないらしい。 もっと言えば魔物でも

・・・・・・にしても、

「さすが王族(変な人が多い)・・・・・」

なにか言いたそうやな」

ゃあすまない。 ヤスコに心見透かされてみつこはあせる。 ばれたら怒られるだけじ

めんどくさい!!」

皆でなんかめんどくさくなった。

いうことで・・

「お前が犯人」

「だろ、 で、いいじゃん」 たぶん」

やない?」

「だとおもう」

さした理由。・・・・

皆同じ人を指差した。

なんとなく直感的に。

指された人。オヤジ。

・オヤジ!?」

出会った時の敵が『オヤジ』だった。 その場にいたヤスコ以外のハンターが反応した。 を示していた。 そのときと同じ顔・ リィシャと初めて 肉・性格

ぎゃぁああ!」

何故叫ぶ!?」

だって、きもいんだもん。

同じ人間が何匹もいるなんて、もはやホラー以外の何者でもない。

「コイツ犯人だー!!」

「ぜったいそうだー!!」

皆ではやし立てると、親父はビクビクしたように頷いた。

・・・・・頷いちゃってるよ。

事件でも何でもネーな (汗

「逮捕ね」

カナタが手錠を持って親父にかけた。

「親父24匹目確保」

『増えてる!?』

こうして親父が捕まった。

犯行理由、自分が分からなかった。

私もわかんない」

こうして無駄なたんていごっこはおわった。

おわり・・・・・。

王都―犯人確保― (後書き)

す。えへ 見ての通り、犯人適当です。 マジスイマセン。 全然推理じゃないっ

狩~弱肉強食~ (前書き)

ものがあっても、スルーしといてください。 技名は適当に考えているので、意味を調べたり「えぇ?」ってある

「ライオン気取りの猫を捕まえます。」

え、

「ちょ」

「その言い方怖い」

カナタの言葉に皆反応する。

「 気取りとか..... コワ」

、そうか?で、内容だけど」

も可 クエスト内容:ハンター 狩を捕獲 捕まえる人数が多ければ多いほど報酬額が上がります。 抵抗するようなら痛い目見せて 六

年制』を捕まえましょう。

何これ、『六年制』って……猪?」

「あ、まぁ、あいつらみたいな?」

逆非道のやつらが大抵そろう六年制経験の方たち.....。 やたら戦闘能力の高く、人のパートナーを奪い金に換えるという悪

でも結構、頭悪いやつばっかだと思う。

「ハンター狩狩りかぁ」

なにそのがり り君みたいな言い方.....

「で?なんであたしら?」

いつものメンバー

サキ・リィシャ 手にわめく。 ヤスコ・みつこの四人だ。 いつものとおり好き勝

「うち初めてや~」

「楽しみだ!やっと人切れる!!」

犯罪者予備軍か貴様!!サキ!リィシャとめようぜ!」

「えー、たいそい」

「まさかの!?」

ことにする。 カナタは髑髏の浮いたお茶を手に持つ、 とりあえず収まるのを待つ

「俺どっちかってーとみつこと切り合いたい」

ヤダよ!何その考え!Sなんじゃないの!?」

「なんでためたんだ?」

「リィシャはな……みつこが好きなんよ」

そんな師匠みたいなひねくれた愛はいやよ!?」

続けようとコップと机の上に置く。 カナタは終わりを待っていたが、 。 もうすでに温めだ・意外と長そうなのでい のでい い加減話を

「てことで、そういうことなんで」

「え?どゆこと?」

もう一度書類を見せ付ける。

「で、本題に移るけど」

はいはい、 ミイラ取りのミイラにすりゃ ۱ ا ۱ ا

ん?あー まぁ

間違ってはない。 みたいだから適切ではない。 と思う・ ある意味もっと性質わるい気がするけど そう聞 たち きゅうしょ シャップ くと悪徳セー ルスマン

かつての仲間に情もないんだな」さぁさぁ、捕まえて来い」

仲 間 ・ ・?はつ」

鼻で笑うカナタに四人は若干引く。 六年生って.....(汗

仲間だったときなんてないよ。 チーム編成もなかったし」

やることといえばバトル・バトル・バトル三昧

辛かったなぁ

カナタが遠い目になり始めたからいくか」

しな。 行く事にした、一人でも行けるけどみんなで行ったほうが楽できる サキが椅子から離れ、ドアノブに手をかける。 三人はノリでついて

ちでない。 所詮クエスト依頼者が『ハンター協会』だからか、 相手が六年制って言うのもあるのかもしれない。 やる気が

外に出る、 たまに思う 涼し い風がみつこの天然クセッ ケの髪をなでる。

アタシって主人公気質だなぁ

「ぽかて」

サキになぐられた・

ナゼ?

自分に酔ってなかったか?」

そんなナルシストじゃあるまいし。 ソレより作戦立てようぜ」

作戦?」

ヤスコはめんどくさそうな声を出した。 クエストすらしないものな

ないんだから仕方がない。 らないわけにも行かない。 しかし今回の依頼はハンター全員に配付されたクエストだから、 というかクエスト屋が他のクエストくれ

たいていさぁ『六年制』 って弱いやつ狙うじゃん?」

「俺ら強いけどな

「だからさぁ~」

みつこの声が小声になる顔が・ てか目が光っている。

「こう、 沢山のハンター が居るんじゃ あ向こうも迂闊にテェ出せな

いだろ?」

「まぁなぁ」

「ってことは、だ」

みつこの目がヤスコの方に向けられる。 か慈愛とかじゃなくて、 ハンター の目・ どちらかというと優しさと ハンター だけど

これ以上にないぐらい自然体の『弱い』 オーラだしてるやつが居

たらさ......自重しててもやりたくなるでしょ?」

「なるほど、人間抑えられたらやりたくなるものな」

「嫌なところで正論心理出すなぁ」

ヤスコはこの話の流れの成り行き上、 れなかった。 嫌な予感を感じられずにいら

....そう、この流れの成り行き上、自分はきっと。

゙ってことでヤスコは『囮』だ!!」

ちね!!!」

に殴られた。意外とコイツ..... つよい! 可愛い言葉で恐ろしいこといわれた気がする.....っていうかヤスコ

「ゴメンよヤスコ.....でも前言撤回する気はない!」

バキ!!

LV上がった気がする。

「おい

急に声がかかり顔を上げた。

. お前等ハンターか」

゙そういうオッサンは.....ハンターかりかり?」

あぁ?かりかり?」

ハンター 狩の狩って自分だった (笑)

「ぶちゃっけ『六年制?』」

おっさんは一時停止した。

まさか・・・・・・マジで切れる十秒前?

六年制?・・・・・ってなんだ」

「え?」

チュ

「おぉい、リィシャ今軽く舌打ちしたか?」

してないよみつこちゃん 彡」

おっさんは困った顔した。

そんなことより、君たち早く帰りなさい」

· なぜ?」

「そりゃあ、 君たちテレビ見ていないのかい?」

扉を空けた。 ナゼにテレビ?と不思議そうな顔しているとおっさんは近くの家の

「え?」

え

「え・・・・・」

を察したのかすぐに弁明を入れた。 みんな不審者を見るような目でおっさんを見た。 おっさんはその目

しらないっていうから見せてあげるよ、 窓からのぞいてごらん」

こじんまりとした部屋だなと全員思った。窓のほうに移るとテレビが見えた。

「うん、もうそろそろかな」

っ ? -

たららっら~ん

ニュー スのじっかんでぇ えええええええす!!

超ハイテンション

は同じぐらい? アナウンサー 7 ヨッ シィ I ・ミン』が大声で司会を進めている、 歳

なんか.....」 「なんか、 ハンター協会のほうで発表がありました!っていうのも

忘れたらしい、 た後良い笑顔で言った。 メモを取り出してみる。 そして納得したように頷い

魔王ジャグラーが復活するんだってぇ!」

でも、 あたしらには関係ないし」

なにを.

おっちゃん、 おれらハンター

え?」

きょとんとした後大笑いし始めた。

「それならそうといってくれりゃアいいのに、 ハンター は子供から

でもできる仕事だもんなぁ

「おっさん、俺ら一応もう16なんすけど?」

「就職してまだ一年だろう?まぁ10歳からでもハンター入り許可

だもんなぁあっはっは」

きしり笑った後ハンターの四人に情報をくれた。 何がそうつぼったのかはわからないが、 とりあえずおじさんはひと

ぞ?まぁうちの娘の情報だがな」 町外れの廃墟でハンター 反組織がなにやら不審な行動するらしい

だって、どうする?」

「うーん、 近いし行くあても探す方法も特に決めてないし、 h

じゃない?」

おっさん、 あんがとう!」

元々この町の一部だったがジャグラー 出現の際に大きな被害を加わ そんなところで四人は身を潜み獲物が来るのを待つ。 リモンスターがたびたび現れるので廃墟られた場所だった気がする。 ということで、 おっさんに別れを告げて町外れの廃墟に行く、

鏡を見ましょ うくぐもった鏡を、 顔の似てない二人笑いあう」

「みつこ黙れ」

なに?それ」

`ふと暇だったから思いつた言葉を言っただけ」

「ふーん?」

みつこはソラを見る、 自分も小さい頃この場所に住んでいた記憶が

ある。

風の匂いが変わった。

「きたな」

ハンター 初級技 気配消

四人に気もつかずやって来た人影は小声で会話していた。 一番気配消すのが上手なリィシャが顔を上げて獲物の顔を確認する。

もう一人は髭もじゃ のごつい体格のいいオッサンで、 もう一人が

.....誰だろ?」

「どうかしたのか?」

サキが聞くとリィシャは小首をかしげた。

みつこよりごつい黒いフード着ていて分からん」

「ってことは、お偉いさんか」

れをみてみつこは苦笑いを浮かべた。 みつこの言葉にサキは頷いたがヤスコは不思議そうな顔をした。 そ

るやつイコール?」 を見られたら困るってことだろ?つまり世間でも顔の知れ渡ってい 「こんな怪しい取引に応じてるときに姿が分からなくするのは、

「あぁ、お偉いさんかぁ」

たんかー リィシャ い (汗) が納得したように手をぽんっと叩いた。 気がついてなかっ

取引に応じて、 ブツ受け取ったときに突撃な」

了解

軽く会話した後に鞄と謎の瓢箪と交換した。 った今この瞬間がベストのタイミング。 お互いのブツが手に渡

·うごくな!ハンターだ!」

ハンターならモンスター狩れよって話だけど気にしない!」

`みつこ、ソレ言わんで良いよ?」

とにかく倒す!」

リィ シャ が先走って男に武器化したサル吉を投げつけた。

<!!<u>.</u>

男がパー になった。 トナー を武器化する前に瓢箪がブー メランにあたって粉々

いで 瓢箪の中のものが大きくなった、 それこそまさに天に届きそうな勢

黒い漆黒のうろこに禍々しい鮮血の赤を瞳とする、

本物の

邪神黒竜鬼 (ダーク= ドラゴン)」

みつこがハンター協会出奔の本を見ながらその名を口にした。 していた男が逃げ出そうとしたがサキがすぐにねじ伏せた。 取引

怒り狂ったドラゴンに適うわけないって!逃げろ」

はいはい、 五月蝿いよー」

ドラゴンが黒い炎を吐き出した。

廃墟が黒ずみになり影を立体的なものにしたのかのようになっ た。

ヤスコがソレに軽く触れると僅かな風にのって流れていった。

本気でやべぇbyハンターマデ ガー ・ルズ

ロア!」

ロアを呼んでその背中に乗る、 そしてサキを載せる。

行くぞ、 サキ」

あ?」

ロアがドラゴンの顔近くとんだ後思いっきりサキを投げ飛ばした。

OKOK!いっけー!さぁるぅ!!」リィシャ!サキ援護!」おぉぉぉお!?」

た。 吉 忘れてるぞ。 みつこはロアが地に着いたのを確認して武器化し

「 結界衣 !」

ドラゴンは容赦なく黒い炎を吐き続ける。 五人の周りに薄い微弱に見える強力な結界を纏う。

「雷撃速流・・・」

硬い鱗には効かない、 こんな火花程度の炎、 なんでもないだろう。 もともとドラゴンは灼熱の中にいるのだから

「うっきー!」

が正面を捉える。 サルが竜の後ろで叫ぶ、 ドラゴンの気をひきつけたうちにリィシャ

「おりゃぁあああああ!!_

神剣、村正

「一撃必殺、間合い切り」

キィィン!

チした。 反動でリィシャが落ちる。下で待機していたヤスコが海里でキャッ

「大丈夫?」

「うん、でもあいつかったい!一応切れたけど致命傷じゃない。 魔

法使った!」

「リィシャにしてはよくわかったね、 あのドラゴン 自身強化 の

魔法使うみたい」

「世こい~!」

自分も十分せこいやり方でしたよ?

みつこも前に出る。

「ロア!通常モード」

ドラゴンに接近する

「武器化!」

ドラゴンの口が開かれる。 あぁ、 ヤバイ逃げれないな 三

「「みつこ!」」」

仲間の声が聞こえる。

炎が目の前で放出された。そう、 今がチャンス。

最大防御魔法 反射コピー

攻撃を跳ね返す。

自身の攻撃を自身で受け取った。 敵はわが身にあり ょ

くいったものだ。

どんなつわものも、 自分自身には適わないんだなぁってことが

しみじみわかるねぇ~」

ながら行った。 みつこはとっさのことに ハンター狩も捕まえれたし、 仮死保存魔法 をつかっ たドラゴンを見 立派にハンター の仕事

もこなした。

充実した日じゃないか。

0

なぁ、 友よ」

いいとこ取りされた三人は白けた顔してみつこを見た。

なっはっはっは!」

うちなんか、 心配して損した」

俺も」

先になんかいっとけよなぁ~」

あっはっはと旗を仰いでいると、 けわしい顔をしたカナタが別部屋

から戻ってきた。

報告書を書いてくれたらしいが、 難しい顔をしていた。

· どったの?ちびたん」

けんかうっとんのか、 いやねさっきの仕事のことだけど」

言いぬくそうに口を閉ざしたが、 すぐに言葉を紡いだ。

がかなりの大物だからお前等の みつこの考えどうりだから、 隠蔽される恐れがある。 • また、

言葉が止まったが、続きは大方予想できる。

見られたからには命を狙われる恐れがある、 か : :

「大丈夫、俺らつよいから。」

. 武力と功績は権力の前では弱いよ」

「愛と勇気はあるから」

「いらねえよ」

「否定!?そこ否定しちゃう?!

安要素は増すばかりであった。 くつものルートに分かれている。 いつものテンションで難しい雰囲気は消えたが、 時は近いのかもしれない。 かなたの中での不 運命はい

願わくば・・・・・

. 願わくば、.....。」

それ以上は言うのを止めとこう。 みつこのほうを見る。 目が合う。 無表情で返すとなぐられた。

絶対神様も天邪鬼だ・・・・・

あるわけないじゃん」 「隠蔽されるならクエストこなしていないと判断されるんだから、 「ところで報酬って」

「おーまいご—————!!

終わり

道修正してみました。はい。やっと、ハンターになりました。 いままでマンネリ化してたので軌

狩〜狩られるもの〜

「おい、常にピンク色の脳内野郎」

ぽと.....。 物は食べかけのサラダを手から落とした。 その言葉にハムスター だかモルモットだか分からない生

そして急いで看板を取り出した。

『え?なに?いきなり』

. 奴の様子がオカシイ。調べて来い」

『仮にもパートナーに対して酷くない?なに上から目線』

は?何?ネズミ風情が」

『ヒド!!』

少し口論した後やっと情報収集しに行った。

最近なにやらいろいろ怪しくなってきた。 ドラゴンの件についても

.....気になるし。

うしん

めんどくさいことは考えたくない。 とりあえず情報が集まってから

行動するか・ 集まっても何もしないかもね。

からんころん

扉が開いた。 ふわふわの髪の毛の上に乗った白い子猫

つこだ

眠たそうな顔で目をこすりながらやって来た。

「任務—」

「眠いならくるなよ」

今は朝だ、紅茶ぐらいはいれてやる。

椅子に座って寝始めた。 いやいや、ここでねるなよ.... 汗

からんころん

æ.

しぃー、とされて黙る。

気配もなくその人はみつこに迫る。 みつこは起きない。

ぷす

「いってえ !まじいってぇ!?誰だ糞!いてまうぞ!?

・・・・・・。(にっこり)」

この頭の上がらない存在の一人、・ みつこが苦笑いで黙り込んでしまうのも仕方ない。 師匠なのだから。 なんせ彼はみつ

え、何?なんですか、てきな」

「たるんでるな、鍛えてやろうか?ん?」

「結構です。むしろお断り」

「遠慮するな」

「いいですぅ~、むしろヤルナてきな~?」

じの響きだけど、 二人だけの世界に入っていっ 実際はもっとぎすぎすした、 た。 この言葉だけなら恋人てきなかん っていうか、 殺気と

んでますぜ

しかし彼が来るなんて珍しい。 イレベルクエストが入ってくると思うのだけれども。 彼ほどのものになれば直接いろんな

「で、ハズキさんどうしました」

· うん?あぁ」

すぐには飲めない。 今私の存在軽く忘れてましたね。 自分用の髑髏茶を入れる。

「情報がほしくてね、売ってくれるか?」

「カナタ情報も売ってるの?」

これでも情報屋なんだけど・・・・・」

クエスト屋はハンター協会にやらされているだけで、 ってみつこにいっても仕方ないか。 本職じゃない

俺が知りたい のは『帝都ルークリスレイ』 についてだ。

「ん?」

みつこが反応した。

きいたことあるような。

その言葉を聞いたみつこの師匠はあざ笑うように鼻で笑った。

メモリ』 お前が聞いたことがあるわけないだろう。 の中でしか記されていない、 隠蔽された国なんだから」 ハンター協会『旧時代

るのも仕方ない。 けようとしたが、 その言葉にカチンと来たのかみつこは師匠の足を思いっきり踏みつ いけど、 『帝都ルークリスレイ』?だっけみつこが聞いたことあ あっさり回避されて悔しそうだ。 楽しそうなのも

「みつこ、クエストでいったじゃないか。」

「え?いつ?」

「リィシャの幽霊の墓探しに」

「あー、『シェンジェ』姫ね」

ハズキの顔が厳しいものになる。

「見つけたのか?」

おう、ついでに魔王サーガってやつも倒した**」**

ちゃった?てきな顔で。 沈黙されてみつこは困ったようにかなたを見た。 あたしなんかやっ

は前世紀魔物はいないかったという今世紀の問題への謎が記されて いるからな。 『帝都ルークリスレイ』 の最後王姫が『シェ ンジェ』 で書類報告で

なると。 の名を知っているのはハンター協会重役とミスター の興味をもつわけがない。 みつこ同様、 傲慢で金好きなハズキが独断で『帝都ルークリスレイ』 まさか他の一般人が知る良しもなく、 ・クレア..

みつこ、 9 帝都ルー クリスレイ』 の場所。 吐くなよ」

'なんで?」

ハズキさん、破壊しに行くつもりだろ」

ものだ。 否定も肯定もしない。 やっぱり、 黒幕は奴かっ しかしソレは逆に肯定していることを認めた

ちょ 売っ てく れないんなら、 まった」 ١J 自分で探そう」

みつこが止めに入る。

けど 「なん で破壊すんのかわかんないし、 しんないし、 興味もない。 だ

みつこはロアを頭から腕に抱えた。

邪魔するよ」 死者の思い 出の場所『帝都ルークリスレイ』を壊すってんなら、

いたと、 待つ間に何もないところで一人待つなんて、辛すぎよう から外れてしまったらしい、 まだあそこに居るらしい。 リィシャが言ったのを聞いた。 道ができるまで待つのだと姫がいって 長いごとさ迷い過ぎて死者の輪廻

ほう、 師匠が見つけれるとは思わないけど、 チンクシャが言うようになったじゃないか」 邪魔するよ?」

殺気を飛ばしあうのはい いけど、 ここでバトルしないでね。

゙きゃあああああああ!」

悲鳴!?

二人のハンター は外に出た。 見せの外ではハイレベルモンスター

ヒョウガが暴れまわっていた。 店からカナタも出てきた。

ター;スカイギルバーがあばれまわってるんだと」 どっちか、 忘却の町に言ってくれない?あっちで高レベルモンス

「何!?どうして街中に出現しない奴ばっか出て来るんだ!? 私に言われてもネェ」

け、こ2がよ丁ご出るよげりなゝ高ノ、レイスミたちがどんどん紙を持ってくる。

ないな。 すべて辺鄙な町で出るはずのない高レベルモンスター 出現&暴れま わっているというもの。 これはハンター 来るのを待ってる場合じゃ

「ネズミ1、 ネズミ3、トゥディを叩き起こせ」 ミスター・ クレア。 ネズミ2、 ヤスコ&やすい んや新

ネズミたちが各方向に動き出す。 やれ面倒になってきた。

ンスター 一人じゃ 無理」 師匠!これ倒してから行って来て下さいよ!こんなハイレベルモ

お前さっき俺に喧嘩売ってきてたんだから平気だろ」

「師匠人間だもん!」

当たり前だろ!?いいから狩れ!ハンターだろ」

言うが速いやハズキは馬に乗って町へと駆けていった。

キシャアアア!!

モンスター が吼える。 ヒョウガ 氷タイプ。

「ん?.....」

王都は混乱中にて姫の護衛&影武者を要請する ネズミが新たな情報を持ってきた、 王国にて国民の避難相次ぐ

あの姫は野次馬根性だして拐われそうだしな...

となると

「みつこ、チェーンジ」

肩を軽くタッチして場所を入れかえた。

「 カナタじゃ 無理です」

地味にいいやがったな」

みつこは武器化したロアをカナタに突きつけながら説得した。

能力皆無じゃ 勤勉な私が調べたところカナタは特殊部類系の武器!それは戦闘 . ん!

「忘れたのか?私はね戦士の称号をもつ

「それ以前にお前のパートナーどこだよ!?」

「あ

忘れてた。情報とりに行かせてたっけ?あはは

「参ったね」

お前タマに無謀だよな!」

「わ!?」

「町内放送?こんなときに!?」

ついた。 も聞こえてしまう音量に頭を痛めた。 モンスターも今の音にビビッタのか氷の魔法を使い家の半数は凍り んなときに何の放送だ!結界を張りながらみつこは聞きたくなくて 中の人は阿鼻叫喚な様子で荷物を持って逃げ惑う。

復活しました さんは王国に非難してください、 ハンター協会からの速報!魔王ジャグラーが復活した、 繰り返します!魔王ジャグラーが 国民の皆

その情報を流すタイミングは、 最悪に近かった。

· にげろぉおおおお!」

「きゃぁあああ!?」

「えーんえーん」

になり、 阿鼻叫喚、 へと逃げ出したため渋滞し逆に滞らせる、 踏みつけられ重体者が相次ぐ。 まさに地獄図、 モンスター から逃げ惑う人々は同じ方向 ソレがまた混乱の引き金

死にかけの中からやってきたよ、 カナタちゃ

すでにぼろぼろのお医者さんトゥディ その身を捧げてね には多く の仕事をこなしてもらわなくてはならなくなった。 予想よりも彼女 ごめん、

みつこ」

肩をつかむ、 これはもう隠し事をしている場合じゃ ないな。

・みつこ、ジャグラー は魔王じゃない」

「じゃあ何!!つか今それどころじゃ」

居ていないんだけなんだ。 てか、ジャグラーはミスター ᆫ ・クレアのパートナー で今は修行に

弱小モンスター みつこにはカナタが何が言いたいのかさっ が増えてきて躍起になる。 ぱり分からない。 雑魚の

コレは、 このモンスターは操られてるんじゃないってこと」

「だから!?」

とは、 もう馬鹿か!ジャグラーの能力で魔物が増えたんじゃ 誰かが裏で糸を引いているって思わんのか!?」 ないってこ

わかんないから!いつそんなヒントいったよ!!」

アポロがやっと帰ってきた、 みが乱れて汚れている。 裏ルー トを使ったのかずいぶんと毛並

めたらしい』 ミスター レアつかまったぞ!やつら鍵を諦めて他の作戦を始

「やっぱりか」

たみつこに攻撃を仕掛けた。 カナタは納得してもみつこには分からない。 モンスター が気が乱れ

氷の魔法が降り注ぐ。

やば!」 『炎の如意棒』

果抜群だった。 武器の名前と共に業火の焔がモンスターを襲う。 氷は火に弱い。 効

そして炎の出現した方向を見るといつもにまして強気なサキが紅色 の不思議な模様のついた武器を持って仁王立ちしていた。

サキーのそれ真の武器?」

まずそこか、 もっと他にいうことが つ

あぶなーい」

飛び降りるようにおちて言った。 リィ シャ に蹴られてせっかく かっ こよく屋根の上に立っていたのに かわりに氷の刃は避けれたが・

カナタ連れて来た」

ヤスコごくろうさん」

海里に乗ったヤスコは登場と共にヒョウガが造った氷のフィ ルド

を使って体当たりした。

今この場において海里は最強ナリ。

どうしようか。

カナタは悩んだ。 そ して悩んだ末に結論を出した。

もう放棄しちゃえ。

あのね

弱小モンスターが襲い掛かってくる。

「アポロ」

弱小モンスターはすごすご脳内命令で帰っていった。 カナタが名前を呼ぶと人型化して口笛をふいた。

す。 モンスターが流れ出ました。 扉】が突如出現しました。 「昔々この世界にはモンスターが居ませんでしたが、 その扉が開いたとき水が流れ出るように、 この世界がモンスターと混ざったので あるときに

「扉?」

「昔はいなかったの?」

まぁ、 最後まで話しを聞こうぜ君たち。 わたしも詳しいことは全く知らないけどね。

たのが今この状態」 「人と魔物は交わることなく平行した世が続き、最終的に落ち着い

とにかく、 のがいまだ謎なところだが。 の武器を手に入れるようになった。 人が生き残るために手に入れた力がハンター 素質を持つという、 世界は進化を遂げた。 動物の中でも武器化するという 真

くことはなくなった。 いまは魔物も落ちついて、 そのことで困るのは、 人間も魔物を見てもそうそう恐怖を抱 誰だ?」

「誰も困んないんじゃないか?」

「えー。バトルできないのはつまらないぞ~」

平和になって困る人?平和= 魔物との共同生活?つまり

「もしかして、ハンター 業廃業?」

Y E S , 廃業ともならなくてもクエストはへる。

サキは眼鏡を取り、曇りを取る。

つまり、 この黒幕 ・ハンター 協会か」

もっと言えば会長【レン=ワイズマン】 金に溺れた典型的な悪役

*t*a

「じゃぁ、今回のことも金儲けのために?」

「そんなことで、うちの仕事増やさんとってー」

ばなくてはならないらしく重労働にヘロヘロになっていた。 ぼろぼろから泥だらけになったトゥディが顔を出した。 けが人を運

働け王宮付き名医

じゃあこいつらに罪はないのか」

「そうだね、一応」

「じゃあ、攻撃するのかわいそうやな」

るだろう。 しかし、 向こうも怒り狂っている。 やめたとして向こうはせめて来

まぁ まぁ。 ここはやすい んや新屋に任せて。 いきますか。

こむ。 馬車にのって現れた、 新屋を引き摺り下ろし自分たちは馬車に乗り

勇者一族御三家の一つ、 ヤスコの師匠なら大丈夫だろ?がんばー」

馬を走らせ、駆けていく。

「う、うそやろーーーーー」

新屋が何かいっていたきもするが気にしない。

サキが不思議そうに質問した。

「 勇者 | 族御三家って?」

いった若者が三人居て、それぞれ勇者として名を残し、 「昔はハンターなんていなかったから、 魔王が出るたびに出撃して 結構な地位

と権力を持って奉られてんのよ」

「うち、その勇者の一人の一族なん」

「 ヘ<u>ー</u>」

いやいや、 ヘーっていってるリィシャも御三家の一つだから。

「マジで?!」

「知らんかったんかい!?」

いことは知りたくないだろうしな。 の運転苦手なんだけどな~っというのは黙っておくことにした。 人々が王都に向かっているため馬車を走らせにくい、 ただでさえ馬

「後一つは?」

「 王 家」

シャは知ってようよ・ 納得したように四人は『 あ | |-• と頷いた。 っていうかヤスコとリィ

「ところで」とみつこは聞いた

「何処いってんの?」

「 王 都」

「なにしに?」

、殴りこみ」

•

「ハンター協会にか!?」

「遅!!そうだよ!?」

自分何もできないけど。決めるのはそう、こいつらだ。 いい加減、 腐ったハンター協会は見過ごせないからな。 かといって

かどうか」 「とりあえず、 向こうに着くまでに考えてね、 ハンター 協会を叩く

本部を叩くということは裏切るということ、裏切りは死を伴う・

・死ななくても処分は下るし失業は確実に決定だ。 若いしハン

ターの仕事を楽しんでいるこの子らにはきついことかもしれないな

・って考えていたのに。 なんか嬉しそうではあー りません

裏切る、面白そー

か?

もいいかも」 知らないうち悪役倒して平和にしましたてきなシチュエーション

辞める名目できていいかも~」

「殴りこみ上等やーい」

やる気満々だった・・・・・。

自分からさそっといてアレだけど・・・・

「お前等最悪だな」

・・・・・・殴られました。

おわり

狩~狩られるもの~ (後書き)

ラストがちかくなってきましたね~・ ですよね、きにしなーい 本業しろよってはなし

ハンター 協会.....ここにくるの2回目だ」

ここで、 パートナーと出会ったっけ?」

もいない。 正教会のようにも見える本部協会にはいっていく、 物静かなほど誰

カナタはまよわずまっすぐとすたすた歩いていく。

奴の居場所は南最深部の部屋だ。 気をつける、 ばれ てる

ばれてるって、どうして?地獄耳ってわけじゃないんだから」

いや、奴の副会長の耳は地獄耳さ」

何で?」

なぜなら.....」

足元から黒いものが浮かび上がった。 触手のようにも見えるソレは

カナタを包み込んだ。

うぉおお!?」

カナタ!?」

きゅっ

人の心配をしている暇はない、 自分たちの足元にも黒い触手は生え

てきた。

絡みつかれると全くの温度もない無機質なものでぞっとした。

苦し・

首や口を押さえつけられる、 どうやら向こうは手加減が苦手らしい、

このままじゃ死んでしまう。 もがくがどうにもならない。

「サキ!!」

雷が発光して触手を退けた。 どうやらアレは影だったらしい

・。退けたがまた再び絡み付いてきた。

· もぉいやぁああ!!」

た。 やすこが怒りと不快感をこめて『真の武器』 トライアングルを出し

『一掃の音色』爆破!!」

した。 トライアングルを鳴らすと、音が響く間に何もないところが大爆発 みつこたちも軽く爆風で飛んだ。

破壊力抜群、さすが勇者一族の子孫

は梟で、 俺 敵に当たったみたいだな、 知ってるぞ?この能力、 確か扱う人間がたしか.....」 影が静かになった。 特殊部類の能力『影使い』

9代目」 クロイ= ケー シィ..... お初お目にかかります、 暗殺勇者の若き9

っていうかさっきの自己紹介でつっこむところところどころあるけ 漆黒の長ったらしい前髪に黒縁眼鏡 このさい無視することにしたみつこ。 知的だがどこか禍々し 気になるほうをたずねる。

かと思うぞ」 ハンター協会のクセに、 魔物使って人々をおとし入れるのはどう

「仕方ありません、命令ですから」

「カナタを何処へやった。」

「お望みのところへですよ」

望み?」

墓場・・・・・?

「会長のところです。」

「あぁ、そっち」

やった ェ他にどこあるの?とサキたちが逆に仲間に問う。 えへ 間違えち

通せんぼするように廊下の真ん中に仁王立ちする男....。 んだったら、さぞや強いんだろうな.....。 副会長な

:

カナタは目を開けた。

窓に腰掛けるようにして座っている若者は、 よく見知った顔だった

:

レン=ワイズマン」

ハンター協会長殿がゆっくりと振り返る。

が笑っていない。 その顔はいつものように優しく微笑んでいるようにも見えるが、 どうやら結構頭に来ているようだ。 目

情報屋さんのアナタにはかなり絶望いたしました。

彼の傍らにいる狼 たいした教養だな、 : | | とカナタは心の中で鼻で笑った。 Ŕ 狼王が会長が動くと共に横に移動した。

るなんて、あの方は貴方にとんだ教育をなされたご様子で」 うちの期待のルーキー 達を誑かしてハンター 協会に殴りこ みに来

「あぁ、 そうですねぇ、 ろくな教養をうけてませんもんで」

した」 「アナタは才能があると思っていましたが.....とんだ見込み違いで

ませんな」 「才能があるのに世襲ですべて否定される会長には同情をしてやみ

.

- · · · · · ·

あざ笑うように会長は笑った。 自身にかカナタにか..

才能があっても、 発揮する場所がなければ意味などありませんよ」

会長の目が鋭いものになった。

「ミス・カナタ 鍵 を寄越しなさい」

「【六年制】なめんなよ?」

それがカナタの答えだった。

はあ、はあ」

「リィシャ大丈夫かな」

てたけど」 かっこつけて『ココは俺に任せて、 先行ってていーよ』 つ て言っ

乗る。 みつこは邪魔なフードをおろした。 海里は大小魔法で縮めてからロアの背中に乗せた。 ロアを巨大化させてその背中に

のに大丈夫か?」 あのクロイとかいうやつ、 影を操るんだろ?あいつ光りだせない

「いや、出せた気がする」

二人がみつこを見つめた。 みつこは一拍の間をおいてから言った。

必殺技だったから、覚えてないと思う。」

三人は一気にリィシャが心配になってきた。 サキと違ってヤスコとリィシャのパートナーの人間化は一時的なも かりなところだ。 のだった。ゆえにまた足の引っ張り合いで自滅していないかが気が いくらシンクロ度が上がって人間化できるようになったとして しかし今更心配しても仕方ない。

「そういえば、カナタどうするー?」

いや、そうするって行く場所に居るんなら、 居るんじゃない?」

おいおいカナタに対して適当だな」

撃してバランスを崩して倒れこんだ。 走っていると横から何かが突っ込んできた。 乗っていた三人も転げ落ちる。 おもいっきりロアに直

「ロア!大丈夫か!?」

起き上がった。 ロアの首元を軽く擦ってあげると一時的な失神だったらしくすぐに

「雷武器!」

サキが武器を構えて敵の姿を探す。

しゅるるるる

!?

 \neg

庇うように海里がヤスコの前に出でた。 ヤスコの方向に何かが飛んできた。 避けることもできないヤスコを そして代わりに直撃した。

「海里!!」

がら暇そうな顔をした男が立っていた。 飛んでリター ンした方向を見ると、フー 彼の手に戻ったのは小さな亀 センガムを口で膨らませな

「せーかい。ちなみに俺『上級』ね」「・・・・・あたしら捕まえに来た人?」

「だから?」

みつこが挑発したが男はどうでも良さそうにこたえた。

「逃げれると思うなよ?」

男が亀を回転をかけながら三人に向けて投げた。

ゲン『武器化』」

亀が大きくなって迫ってきた。

!

がら止まってまたこちらに狙いを定めて迫ってきた。 三人四方八方に避けた。 壁に当たるかとも思ったが途中で回転しな

「わぁあああ!!」

ゼッテーアレ切れ味いいぞ!?」

「うん、いい」

「きいてねーし!!」

こんだ。 男は頭をかきながら胸のポケットからガムを取り出して口にほうり して男に向かって鳴らした。 暇そうだ。 海里の事で頭にきたヤスコは真の武器を取り出

「 ん?」

ちっりーん

どがあああああん!!

煙が立ち込める。がすぐに吹き飛んだ。

しゅるるるるる・・・・・

亀が回っている。男の姿はない。

まさか、 力説すんな!!違うから!甲羅の中は入れないから!! 甲羅の中かぁ

亀が止まった。

前に出たようだ。さすが亀。 のんびり横に避けるとすぐ後ろに男が居た、 盾に向いているようだ。 爆発に当たる前に亀が

「ビビッタビビッタ」

ちっともそんな感じをさせない口調で男は髪を整える。

っていわれてんだけどさ」 ハルダっつっう名前でさ、 『キング・オブ・マイペース野郎』

聞いてねえよって顔で三人呆れた顔をする。

「本気、出しちゃって・・・・いい?」

. ! !

どごぉおおおおおおん!!

•

「やぁ愛娘」

「よぉ親父殿」

ミスター ・クレアとカナタはある部屋にとじこめられていた。

二人ともズダボロだ。

あぁ、 やぁっぱお互いパー ソウデスネ」 トナー無しだとキツイですネェ?」

カナタは汚れた帽子をはたきながら親父の言葉をシカトする。

「・・・・・・ 鍵 のほうはどうです?」

「今見る。」

だんだん形づいてカナタの手に落ちる。 カナタは真の武器を取り出した。真っ白に輝く朧な形をしたものが、

君の真の武器『 記憶の書』 はいつ見ても派手ですね」

「殴るぞコレで」

ぱらぱらぱら・ ・本のページが勝手に開かれる。

イツ ふむ。 リィ シャは副会長と交戦中で、 ヤスコは 誰コ

どうでもいいやと目を別のところに移す。

まだ、無事。今コッチに向かっている。

「いいのですか?彼とあわせて」

「大丈夫だと思う。奴は知らないだろうし」

「彼女も。知りませんよ?」

カナタは黙って本を閉じた。

•

「サキ!」

「 ん?」

すってシチュエーションじゃね?」 なんかさ、 仲間が一人一人消えていって最後には主人公が悪を倒

,お前って不謹慎だよな!」

えていないのかもしれない。 馬鹿なのか、 えー?そう?とみつこは笑う。 いまだサキには読めないところがある。 緊張をほぐしているのか本当に只の なせ、 何も考

もうそろそろだな。」

突入しようとしたが誰かが前に立ちはばかった。 軽く失神してしまったロアのかわりに小さくして運んでいたみつこ は目を留めた。 大きな扉が見えてきた。 アレか?

一敵を削除する!」

なんか真面目腐ったごついお方が出てきた。 く武器化すると大きな槍に変わった。 パ I はサイらし

.

アイコノアア・引ទ みつことさきは無言でお互いを見やった。

アイコンタクト内容

『お前行け』

『いやだよ、サキ逝って来い!』

チョイまてやゴラァ !なんだその含みのあるコンタクト!』

『気のせいだよ 彡』

『てめぇが逝ってこい!!』

です。

.

真面目さん、 真面目だから待ってたけどしびれ切らして突進してき

ました。

「これなるわ我がパートナー 朝雲 我はゴウダなり! いざゆかん

_

「なんでこっちくんだよ!」

「ぷぷ、後は任せたよサーキちゃん

背中を軽くタッチしてから扉に向かって滑り込んだ。

ばん!!

- 一番乗りもらったぁ!!」

みつこは威勢よく入ったが残念ながら敵は居なかった。 かわりに使

い込まれた広い仕事用の部屋が出迎えた。

大きなデスクの上には古い黄ばんだ大きな本が開いていた。

みつこはそれに興味を覚えて覗き込んだが。 何語でかかれたものな

のやら、 したみつこは目でカナタの姿を探す。 読めなかった。 読めないもの には興味ない、 と興味をなく

どうやらここにはいないらしい。

君が一番乗りのようだね」

敵に向けた。 いつの間にか背後に人が現れ、 とっさにみつこはロアを武器化して

魔法系武器だね」

(あ、 ばれた ・まぁいっか)

心の中で開き直ったみつこは不敵な笑みを浮かべた。

あなたが黒幕?」

黒幕?何のことやら」

優しく微笑む会長、 これじゃあこっちが悪役みたいじゃないか・ 白々しいがこうしてみると確かにいい人っぽい、 • それでも

いけどさ

ん? :

あぁ、 これ?楼っていってね」……!狼王」

優しく、 黒く、 微笑んだ。

ボクの武器なんだ」

狼王の姿が拳銃に変わった。

つ!!」

だから強いのでは? みつこは一瞬と惑ったが考えても見れば自分のほうが魔法使えるの

と思っていることが相手にばれているのか会長は笑っ

が安易な判断で無鉄砲な行動に出るものじゃないですよ

?

「無鉄砲じゃ」

しゅるん・・・・・

楼の姿が仙人とかが持っていそうな杖に変わった。

「もしかして」

「魔法攻撃系・ 0 楼の能力は何の武器にでもなれる。 魔

法は少々ですが」

にっこりっと笑った。 憎らしいぐらい い人ぶった顔で

「アナタに勝つ自身はありますよ」

言い切りやがった。 みつこは杖になっ たロアを持つ力を無意識のう

ちに強く握っていた。

こいつ・・・・・・・殴りたい!

辞めていただかなければなりません。 大変残念なのですが、 貴方たちルー しかしまた、 とカナタはハンター 悔いを改め再び 職を

ハンターとして働くというのなら.....

· 結構です」

みなまで言う前にみつこは断った。

あたし、 他人の下につくのは嫌なんで」

そこで初めて会長の笑みが消えた。

「無知ですね、 八 ンター 職についていればたくさんの富と権力だっ

て手に入るのに」

たいとは思いませんネェ」 「傲慢な、魔王なんてほら吹いて似非の偽善行為してまで手に入れ

今度はみつこが笑う番だった。

一番金と権力を欲して居るのはあんたじゃないっすか?会長さん」

会長の手にあった杖から光が集まっていく。

痛い目見ないと分からないようですね

そっくりそのまま返しますわ!!」

魔法対決が始まった。

強烈な光がほとばしり交わりぶつかり合った。

ミスター

んん?なんですか」

扉の向こうが騒がしい。 サキかみつこがついたようです。

心配ですか?」

カナタは本を構えて、思いっきり振りかぶった。

「うぉおお!!」

どごおぉ!!鈍い音が響き渡った。短い気合と共に投げ飛ばした。

•

「.....やはり所詮は女、でしょうか」

「男女差別さいってぇー」

肩で息しながらみつこはしゃがみこんだ。

大量のパワーでこられたから同じぐらいの力で返したが、 こちらは肩で息しているというのに向こうは余裕そうだ.....。 力負けし

どごおぉ !!鈍い音と共に扉が壊れてぶっ飛んでいった。

「みつこじゃん」

「カナタじゃん

一人は同時に「よ」っと手を上げた。

「まったく、 魔法系能力者は傲慢で鬼畜で金の亡者で態度がでかい

から困る」

あたし見ながらいうなや」

カナタは本を片手に上を見た。

会長、 残念ながらアナタが 鍵 を手に入れることはありません。

「 鍵 ?」

いうのですか?」 「どうしてです?まさかアナタまで 扉 の存在を夢物語だとでも

「いやぁ、否定なんかしていませんとも」

カナタは笑った。

「お前を会長の座から引きずりおろしてやる」

(これじゃあどっちが悪役なんだ!?)

持ち上げて本を消した。 みつこはカナタに恐怖を覚えた。 カナタは手に持っていた本を高く

り下ろすと?」 「特殊部類型及び戦闘能力皆無なアナタがどうやってボクを引き摺

け持ち上げて見下した。 あざ笑うような会長の笑みをカナタは無慈悲に口筋肉の片方の端だ

!

悪役・ !? じゃなくて味方です。

「特殊部類型って、便利なんだよね」

ネズミがちょろりと出てきた。 もっているものビデオカメラ

.

· · · · · · .

おもわず沈黙してしまった。

「正気ですか?」

そう聞きたくなる理由も頷ける。

ばぁん!!扉がひらかれる

おぉ。三人とも!」

サキ リィシャ ヤスコがぼろぼろながらもやってきた。

るのはアナタたちですよ」 いいんですか?ボクを引きずり落せたとしても困

どういうことだ?

五人はレンを睨みつけた。

ハンター協会が廃業となるとき、パートナーともお別れですよ」

平和な世の中に武器は必要ない。 つまり、 相棒とのお別れとなる。

上がります。 会は栄える。 そんなのいやでしょう?扉さえ今一度開けばもう一度ハンター協 そうなればパートナーと一緒にいられるし、 あなた方にとってハンター とは天職でしょう!?」 レベルも

パートナーと別れるのは、イヤ

でも

コイツの案に乗るのはもっとイヤ

自惚れるなよ」

笑顔でみつこは言った。

るってーの」 「そうなったらハンター 関係無しにロアつれてどっかいって商売す

二択問題あるなら別の選択作ろうホトトギス。

レンの顔がゆがむ

終わったな」

サキとリィシャは顔を合わせて何がなんだかって顔を浮かべた。 カナタが帽子をかぶりなおした。

結局 レン=ワイズマンは逮捕された。

クロイさんが行方不明だそうですが.....」

恐ろしいものを見るような目でカナタはリィ は眠たそうに「なに?」とだけ言った。 シャを見た。 リィシャ

・・・・・・ねぇカナタさぁ」

- 5h?

「 鍵 って結局誰持ってんの」

•

カナタは笑った、誤魔化しの笑みであることは一目散だ。

• • • • • •

みつこは笑い返した。

鍵

なんてなくても生きていけるから。

どうでもよかったから、

・・・・・・・・。キモイ」

サキに不審がられた

終わり

先に謝ります。ゴメンナサイ。脇役のバトルは省きます。

ハトル~学園祭~

アムを始めたいと思います」 「廃校になってしまうかもしれない学校の最後の思い出に、 コロシ

理事長ミスター・クレアの言葉で始まった。

「・・・・・しつもーん」

みつこが手を上げる。

「勝つといいことあるの?」「なんでしょう」

あくまでご褒美目的のようです。 ここまでくるとある意味さすがで

す。

· もちろん、賞金と称号が手に入ります。」

「ちなみにいくら?」

がめついにもほどがありますなぁ

ミスター みつこのことをよくわかっているものだ。 下手に低かったらみつこのやる気が損なうと判断したんでしょうね。 ・クレアは「さぁ?いくらでしょうね」と誤魔化した。

この試合ではAとBコートに分かれてもらいます。

方法だ。 そして勝ち進み決勝戦に残ったAとBの勝者が戦う。 簡単で確実な

ってことで~Aコート~・・・・」

は行かなくなった。 自身たちの予想では勝つのはみつこかサキと思っていたのだがそう 一年目ハンターみつこたちは顔を見合わせていた。

「Aコート俺とみつこか」

「まさか早くからサキと当たるとは」

「Bコートリィシャとうちやな」

(俺みつこと殺りたかった。)

一殺すな」

゙・・・・・・まぁ、アレだな」

サキが拳をみつこに突きつけた。

「手加減しねぇから?」

みつこも笑って拳を返した。

「こっちもな!」

青春してますね男なら決まっただろうが、 女ですから残念です。 男

なら・・・・・・

今回のお偉いさんはお姫様のランジェ姫でした。 コロシアムには一般の方々からお偉いさんまできます。 そのよこには何故

かげんなりしたカナタもいた。

ではぁ~Aコート準決勝戦

はい べつに手抜きってわけじゃナインデスヨ? ちなみに他の脇役たちの英姿は飛ばします。

青コーナーディダ・みつこ・MC~

みつこは微妙な笑顔で観衆に手を振る。

金の亡者の実力者~只今クエスト最多記録更新中~

誰がじゃ !!てか更新してんだ?すげぇアタシ!」

赤コーナー神チャー仔サキ~

ハンター業が終わったらそのあだ名ともお別れか」

サキは少し嬉しそうに出てきた。

破壊のクイーン~只今最多破壊記録更新中~

「そんなに俺こわしてたか!?」

まさか・ 自覚なかったなんて・

「地味にショック受けた振りすんな!!うぜぇ」

兎に角 向かい合って~. ファ イツ ツ Ġ

試合が始まり二人は同時に叫んだ。

「「武器化!!」」

先制を取られる。 お互いのパー トナ が武器化するがサキのほうが数秒速かった。

゙ はぁあああ!!!」

雷が光輝く

゙らぁあああああゎ!!!」

数の雷の柱が空に飛び出すようにして出現した。 みつこはそれに当たらぬように回避する。 オノを地面に刺すように殴りつけると地面から放出されるように多

「お返しだ!!雷攻撃」

一本の稲妻がサキの上に落ちる。 しかし、 雷の落ちた場所にサキの姿はない。 観客がおぉ と声をあげた。

一体何処に・・・・・

忘れたのか?雷は雷に乗って移動できるんだぜ?」

みつこは背後からの攻撃に身構えた。

「はん、まんまだなって投げんの!?」「喰らえ!!サンダーアタック」

稲妻が来ると思っていたみつこの予想をはずしてサキは雷をそのま ま投げ込んできた。

. !

神経がよかったことを心から感謝した。 伊達に自分も鍛えていないみつこは何とか避けることができた反射

はん、 てか! ・ごらかサキゃ! この程度なんでもないだろ?ところでいいのか?余所見」 !殺す気か!!?」

みつこの後ろで人間化した雷が手に雷を集めた状態で立っていた。

『うがぁあああ!!』「しまつー!!」

分だった。 ロアが瞬間的に動物型に変わり雷に牙をむいた。 ・そうでなくとも今は人型の雷は一瞬怯んだ。 みつこにはソ 元は犬型・

「 うりゃぁ ああ!!.

サキに向かって突進する。

「! ! !

「サキ!!」

雷が稲妻なり護るようにサキの横に移動する。

かかったな!!」

みつこはフードをサキに投げつけた。

く!!視界が!?」

ば!!

つこがいた。 フードをのけたときそこにはロアを手に持って不敵に笑っているみ

「最大結界魔法リターン」

雷とサキ自身が透明なシャボン玉の結界の中に閉じ込められる。

· がう!」

雷が放電しようとしたのをサキが止めた。

「YES、さすがサキちゃん分かってる~」「どうせ攻撃したって、返ってくんだろ?」

結果が決まった。

勝者、青コーナー みつこー

わぁ あああああああ!!-

歓声が沸きあがる。

拍手の雨の中、二人は互いに握手を交わした。

「最初で最後、なんだなぁ戦うの」

· 負けたけど、まぁ戦えて良かったわ」

また拍手の大きさがあがった。

「オネー様?どうしてサキは諦めてしまったの?」

かってるからこその判断だから諦めたわけでは..... ないっちゃない 「諦めたというか.....まぁ、 あの結界の中では何しても無駄っ て分

「そうなの?」

こういうの ランジェは目を輝かせながら試合に凝視している。 スキなんだなぁ

次の準決勝はリィシャ& а m p;ヤスコだな」

結果どっちが勝つのかしら!もぅ最終決勝が待ち遠しいわ」

「さぁー誰だろーね」

興味なさ気にカナタは試合を見た。

誰が勝ってももうハンター業なくなるのだから勝ったって意味ない のに.....もしかして戦いを楽しんでいるのか?

(・・・・・・六年生じゃなかった風景だなぁ)

少し、羨ましかった。

青コーナー 駄目なだっちょのリィシャ~

俺のそのあだなって俺貶してない?」

けている。 今きがついたようです。 ているんだ。 間違ってはいけない、 サル吉は嬉しそうに観客にバナナを投げつ あげているんじゃない。 投げつけ

驚異の迷子者~森のお友達の仲間入り一歩手前~野生人~

ぎだろ!?」 お友達ちゃうし!?一歩手前じゃないし?てかお前等俺を貶し過

講義したが無視される。

赤コーナーミニコ・ヤスコ・パチコ~

海里に乗って進んでいく。 海里意外と好評で可愛い~ という声

が上がる。

まぁおっきなペンギンですから。

無敗保持者~ヘタレのクセに最強~パー は騎士です。

関係ないやろ!!」

無敗なのは戦わないからです。

そんな二人が見つめあう。

ではでは~Bコート準決勝戦~ファイッ ツGO!!

リイ シャがサル吉の頭をつかんだ。

武器化!!」 ウキ

通にヤスコとぶつかりました。 サル吉の武器化が遅かった (というかできなかった) ため、ごく普 まさかの武器化する前に投げつけました。 いい先制だったのだが、

いたいやんかぁ!」

怒ったヤスコはサル吉をつかんで観客のほうに投げつけた。

「ぶぶ!?」

カナタの顔面に直撃しました。

からソレらしい戦いしろよ」 痛いやすこ、っていうかリィシャ. お前等勇者一族なんだ

そう、 二人は勇者一族でしたね一応

一応って言うなー

二人で口論する。

「もう、 ! ? サル吉なんてどうでもいいもんね! !妖刀: ぐはぁ

カナタがサル吉を投げつけました。

観客からものを投げつけるのはよしてください。

注意されました。

海里が横になって氷を吐きながら突き進む。 前までは中々良かったのですが、 ない二人は殴り合っていてそのことに気がつかない。 集中力が切れたようだ。 波長がばらばらで合わ ヤスコと戦う

「『王帝の攻撃』!」

アッタク

なんというか、 二人(?)は意図もあっさりお空へ飛んでいった。 勝負にもならなかった・ · 汗

次回に期待しましょう。 ア、 次回ないんでした

ね

汗を拭きながらミスター ・クレアはお空を眺めた。

で、そのままお願いいたします。ではAコーナー勝者、 では、 決勝戦を始めます。 ヤスコ氏は特にお疲れでないようなの みつこー

苦笑いしながらみつこは出てきた。 たので今回は着ていません。 なのでちょっと新鮮です。 さっきので何気にフー ドが焦げ

・ヤスコ、手加減しないよ 彡」

えー

えーってヤスコ・・・・・。

勝負開始!!

ロアが武器化する。 と同時に海里が突っ込んできた。

おーぉぉーのぉぉおお!?」

急いでみつこは横に避けた。 そのまま逃げるかと思った海里・ヤスコだったがこっちを向いて止

「みつこ、うちも本気だすよぉ~!」

まった。

土になった。 空を向いた海里の口から氷や雪が吐かれる。 コロシアム内が氷の領

さっむー!!!」

大きくしてその背に乗った。 ヤスコは海里の上に乗ってもふもふと温かそうだ。 みつこはロアを

ころぶろ 丁度いい!!過去の雪辱を晴らしたら!

過去にヤスコにやられたことを覚えていたらしい。 ては居なかったが相当悔しかったらしい。 正しくはやられ

悪役かお前は」 ペンギンとタイガー の格の違いを見せたらイヤアああ

控え席でサキとリィシャは苦笑いを浮かべた。

「ロア!!アッタク!!」

がぁあああああう!!

ロアがヤスコに襲い掛かる。 が

ぶつかった。 こらえたが、 攻撃した。 ロアはその攻撃をモロにくらい倒れこみそうになるのを 物凄いスピードで海里はロアの横に滑って回るように回転しながら 床はもう氷付けになっており止まることができず壁に

みつこは冷や汗をかいた

なにがなの?おねーさま」 あーいつ、 忘れてるなぁ~」

やすこにやられた理由」

ソレは、 このステー ジが海里の領域だからだ。

こうなったら!ヤスコを先に!!」

ツルすってん みつこはヤスコに向かって走り出したが・ ごん「〜 , , つるつる~

なんとも無様だった。

ええい、もう良い!!ロアこい!」

みつこはその背にもう一度乗った。 ロアが滑りながらも何とかみつこの傍に寄った。

こうなったら賭けだ」

拉致があかないので一発勝負に出ることにした。

「いくよ!」

海里にのったヤスコが滑って突進してきた。

· ロア!!」

ロアも突進していく。

二匹がぶつかり合うその瞬間に、 みつこは手を伸ばした。

みつこの異能力..... 大小魔法.....

海里!武器化」

「どうえ?」

この状態で武器化しまー すかー? byみつこ

タックしてくるものだから、 ならなかった。 立派な盾のまま滑ってきた。 その上すべりに乗ったまま勢いが落ちることなくア この盾は魔法がきかないらしく小さく ロアは避けれることも無く直撃した。

うぎゃん!!」

みつこがロアから落ちる。

「いたぁ〜って、お前も落ちとったんかい!」

盾にしたさい、 やすこも落ちていたらしく雪に埋まっていた。

·・・・・・っは!!]

目の前には海里が・・・・・

「・・・・・汗」

.

ロアは気絶したままだ・・・・・

・・・・・。降参」

勝者なんとヤスコ~~

「なんとって何よ」

転がっている。 みつこは「悔しい悔しい悔しい悔しい!!」といいながら雪の中を ヤスコは海里の上に乗りながら文句を呟いた。 意外と楽しそうに見えるが、 かなり冷たい。

称号に戦士と・ 賞金が贈呈されまーす

わぁああ、と拍手が沸き起こる。

, やすこ・・・・・」

みつこは何気海里に抱きつきながらヤスコに手を伸ばした。

「負けてあげるから、金をおくれ?」

「・・・・・・いや?」

ちょっとかわいそうと思ったらしいが、 うして、最後のコロシアム勝者はヤスコになった。 惜しいので断りました。 こ

•

後日、 ヤスコは一族中に褒められ、 勇者一族長しか持てぬ勇者一族

の証をもらえたそうな。

つまり、次回はヤスコが当主。

悔し紛れにからかったみつこはヤスコに攻撃されたのであった・

•

終わり

バトルー学園祭―(後書き)

突込みとかでもいいですよ?感想とか・・・あればコメントしてくださいね~

ハンター協会廃止に基づきハンター業を廃止します。

します。 ハンター 各自新しい仕事場を探してください。 の皆様お疲れ様でした。 今日を持ってハンター 業は廃止

は中身なのでそこのところは誰も突っ込まない。 るようなぐらいカナタの読み上げる声は酷かった。 無機質な機会のような音程で棒読みも いいところだ、 しかし重要なの といいたくな

「俺らだけでハンター業する??」

いーねえ~ お困りならハンターみつこにお任せ!って奴ぅ?」

何でみつこ主点やねん」

、なお」

げる。 ざわつ ハンター (元) の人たちを無視してカナタは続きを読み上

ハンター の パ I は回収 じます。 トナー は回収させていただきます。 ぁ 例外はあります。 基本回収します・ 繰り返します

· · · · · · ·

・・・・・・・・・・え?

えええええええええええええええええええええ てネェえええええええええよぉおおおおおおおお

「今言ったもんよ」

全身鎧尽くめの集団がハンター 今言ったもんよ、 じゃなーー たちを取り囲んだ。

「 ! !

異変を感じたハンター 達は己のパー トナーは反応しなかった。 それどころか微動だにしない。 トナー の武器化を命じたが、 パ

「ロア!?武器化!」

海里?」

おい!サル!ボケちゃん!!??」

呼びかけても反応しない。

つけた。 みつこはこの状態に見覚えがあったため、 これの元凶のほうを睨み

・・・・・笛を片手に持ったカナタを

「カナタ!!」

· · · · · · · · ·

無言で笛を吹くとハンターの人たちは膝をついた。

は分かっているだけに、 からだが言うことをきかない。 腹が立つ。 カナタのせいというの

アポロ」

頷くサキのところまで近づいていった。 笛から人化したアポロにカナタは目で命令する。

「え?何?なんすか??」

警戒しながらサキはアポロを睨みつける。

「帰っていーぞ」

肩をポンっと叩かれる。と、突如体が動いた。

- な?!」

雷がサキに飛びついた。

わんし

`え?雷も?いいのか??」

「あぁ」

「おい!!やめろ!!」

男とパートナが鎧の人につかまれていた。 急に荒い声が聞こえたので、そっちの方向に目を向けると熟年した

「・・・・・・あれ、なんだ?」

恐ろしいものを見るようにサキは言った。

男だけじゃない、 男のパートナーが頑丈そうな箱のついた場所に投げ込まれる。 次々と入れられていく。 主人はソ レを眺めるしか この

できない。

「お前等!!何してんだ!止めろ!!」

「サキ」

カナタに服をつかまれ行くに行けなくなった。

邪魔!」

「相手はお国だ」

. はあ?」

カナタが紙を見せる。

ること。 刺命、 ハンターのパートナー は例外を除いては全て回収し隔離す

紙にはちゃんと国王の印が押されてある。

゙じゃあ、これって」

強 制。 歯向かう者は処罰するよう命じられている。

ふ・ざ・け・ん・..... なぁああああああああまり

身長が小さいカナタは耐える事もできずぶっ飛んだ。 みつこが渾身の力をこめてカナタに体当たりした。

ロア・リー

した。 みつこは最愛のパー をつかんだ鎧兵にも猪のように体当たり

その瞬間にロアのサイズが元の通常モードになり飛ぶように駆けて 主人の捨て身の覚悟を読み取ったようだ。

「こいつ!国に逆らう気か!?捕えろ!」

痛いかなー?って思っていたが中に海里がいたため大丈夫だった。 頭をつかまれ他のパー ... 気持い トナーの入れられている中に突っ込まれた。

゙てか、捕まっちまったぁぁあああ!!!」

今気がついたようだ。

「うっきぃ」

サル吉もいたらしく口の中にバナナを入れられた。うん、 空気読も

うね?

外を見る。 あし 窓があってよかっ たる。 ココ意外と臭いよ?

サル吉も一緒に隣に並んでみる。

みつこをはなせ!このやろう」

せっかく免除されたのに、 犯罪者になったら没収されるよ~?」

「手前は良いのかよ!!仲間が......

いたたまれない顔してそっぽ向いた。

こらこら、私は仲間じゃないのかネ」

ヤスコは号泣している。 まぁ、 海里奪われたら生きていけないもん

ねえ、 ヤスコだけ。

リィシャは.....バナナ食べてた。 最後に貰ったんだね?

まぁ、 みつこは城の牢屋にいるほうがいい んじゃね?」

その言葉で殺さんばかりにサキはカナタの首を締め上げた。

ふざけたこといってんじゃねーぞ!」

キャー.....助けてー.....殺されるー」

棒読みしながら鎧兵に助けるよう命じた。 この場においてカナタが

執権を握っているようだ。

ロア平気かなー

うき?」

サル吉のほうを見る。

ウキ?」

いこと思いついた。

確実に恨み買ったな。 他の人たちは怒鳴りまくったり泣いたり・ いろいろだ。

カナタだって、 仕事なくなったやん!でもパートナーとおるやん

恨めしそうな顔で睨まれる。

没収される。 ようになったものは例外とす、だが、 『パートナーと主人のLVが上がり、 』だからサキは免除」 問題・ パ ー 犯罪などを犯した場合 が人間化できる

「え?俺もヤスコも一回人間化したよ?」

「維持できるなら免除できるけど?」

るからだ。 二人なんともいえなくなる。 一時的にしかできないことを知ってい

は

ヤスコが真の武器を取り出した。

犯罪者でも何でもなったらいやぁぁ 海里返せ

ちりー

どごぉおおおおおおおおん

鎧兵集団半全滅。

こら!!」

アポロを武器化して流れに乗って逃げ出そうとする人たちを能力で

押さえ込む。

誰かトゥディ呼んで。ん?」

ずごごぉおおおおおん!!

てきた。 を捕えておいた中から煙が吹き上がり、 中から何かが出

みっつこちゃぁ ああああん!!どーじょー

その手には..... サル吉、武器化モード

「おりゃぁああ!!」

カナタに直撃した。 ブー メランを投げてリィ シャに渡そうとしたが大きく軌道がそれて

ちしん

· いまだぁああ!!」

めて箱の中に入っていった。 呪縛から解き放たれた他のハンター全員は、 みつこにつかまれた。 ヤスコも海里を求めていこうとしたが 自分のパートナーを求

゙ これ」

里だった。 みつこのフー ドの中から出てきたのは、 大小魔法で小さくなった海

海里い」

二人で感動の再開は良いから.....。

「人生うまくいかないのが世の常だな」

「ハンター・上級ムツキ!?」

「ハンター・プロキサラギ!」

「ハンター・一流フヅキ?」

゙ ナイト..... ハズキ!!クソ師匠!!!」

四人の特級のハンターが来た。

......免除されたようすねぇ、さすが年の功!私はまだまだですわ

ぁ

みつこが盛大な皮肉をこめて褒めた。

どごぉおおおおおおおおお・・・

みつこの体は風圧で吹き飛んだ。

· いったぁ!?」

見苦しいぞ、パートナーがいないぐらいなんだ!」

あんたは誰ともシンクロしなかったからだろうがよ!!

手加減していろうがなかろうが、 笑いながらハズキはみつこを叩きのめした。 痛いことには変わりない。

海里 !!」

すみません、 国王直々の依頼....任務ですから」

里を大きな海里に戻した。 小さな海里をつかんで運び出そうとする。 みつこは小さな抵抗で海

う。 こ

キサラギは泣きそうな顔をして腕を押さえた。

折れるかと思った。」

ざまぁ.....とみつこは笑った。

「甘いな」

ハズキは海里をつかむと投げるようにして馬車についている箱の中

に入れる。

いつのまにか天井が修正されている。

他の兵士たちも意識が戻り始め、 もう一度仕事に戻る。

昔なじみの仲ってことで、 牢屋入りは今回は許してやろう。

そういうと、歩いて去ってしまった。

ハンターは全員その場で崩れた。

この気持を何に例えよう.....会社をリストラされた社員の気持?

「何だこれ」

みつこは何処とも行かない怒りをもてあました。

「こんな事って.....」

皆同感できるからこそ、何も言えなくなった。

「なんなんだチョコボー.....ぐはぁ!!!」

お前は最後までシリアス貫けんのか!!!」

最後まで言う前にサキに蹴り飛ばされた。

だぁ~ってねぇ~?

「あたしまだロア盗られてないもん」

あぁそういえば逃げたな」

ロアさえ手に入れば高飛び......する前に一泡吹かせたる」

見るこの顔が凶悪顔になる。

お国?権力?命令?そんなもの関係ないね. あたしらに喧嘩売

ったこと、後悔させてやらぁ!」

「何する気?」

「殴りこみ」

あっさり言ったな!」

俺も行くぞ.....という声があがっ やる気満々だ た。 他の元、 ハンター たちも共感

自分のパートナーとられて黙っているわけがない。

「......さて、YOUにも協力してもらうよ?」

みつこが何気に倒れたままだったソレの頭をつかむ。

「...... ち、ばれたか」

「それでばれないと思ったのが不思議だよ?!」

帽子を直しながらカナタは立ち上がった。

`.....では、仕事あるんで」

ねぇだろ、仕事!クエスト屋も引退しただろうがよ」

「あ、私情報屋なもんで」

「黙れ何でも屋!」

かなり渋りながらカナタはみつこに協力するといった。

「そいつ、いるの?」

「権力万歳」

ついさっきに権力?なにそれ?てきな発言してなかった?」

「しゃらーーーーー!!!」

ばっしーん

「痛い…」

城に入るには強行突破も良いけどできれば楽に入りたい、 自分たち

パートナーいない しな。

そこで使えるのは城の中を熟知しているカナタだ。 城の中に自由入

れるしな!

そういえば、 トゥディも今から来るんだったよね」

みつこが笑う。

えっとお?」

ういう状態に慣れているからだ。 そもそも前回ハンター協会につっ 要請をう受けてやってきたトゥディは早速つかまった。 こむように示唆したのはカナタなのだから..... カナタが同情のまなざしを向ける。 なんだかんだいってカナタはこ

てかさ~マジこう考えると、 かなたって鼠だな」

噛み付いたろか?」

サキは黙ってカナタからはなれた。

まぁ良いけど。 確かに私らは城の中を行き来できるけど。 中を自

由に歩きまわれるわけじゃないし.....」

トゥディ.....私は常々思っていたんだけど。 諦めるのはやくない

カナタだって諦めてんじゃ んかよ!?」

うーん、出入りだけか・・・・・」

「うちに考えあるよ」

「やすこが?!珍しい!海里絡むと違うな!!」

た。 ということでお城まではやすぃ んや新屋の荷物用馬車に乗っていっ

「いいのか?他の人たちにはまってろつったけど?」

「えー?だって邪魔じゃん?」

正論

とりあえずパートナー 解放したら主人のところ行くだろ」

「なぁ~みつこ?」

張った。 リィシャ が不思議そうに首を傾げながらみつこのフー ドの裾を引っ

「殺すな」

..... 私の心の中に.....」

ロアはどこいったんだ?」

お城までの馬車の中.....平穏だったはずだが急に停車した。

「新屋?」

外に出ると、 そうな小柄な人までいた。 パートナー連れたごつい人からカナタのように大人し

系五人.....

『六年制』.....」

「『ハンター協会反組織』って言えー!!」

それもどうよ?

ラの瀬名じゃん。 アヒルの」・ 久ぶり」 に金魚のモナカに、 蛇のスエンに蜘蛛の修にコア

· ひさしぶる~ 」

ぶる?!

「挨拶せんでいい!!」

今こっち急いでるんだけど、なんか用?」」

ソレに合わせるように他の人も武器化した。 アヒルを武器化した、 羽ペンのような形の剣だ。 接近攻撃型...

「……うう。109代目」「修その蜘蛛何代目?」

「死ぬのはや!!」

らない。 虫などをパー じゃ ないと寿命が短いからパー トナーにしている場合、子孫を残しておかなければな トナー がすぐ居なくなちゃ

うから。

そんなことより

「なんか用?」

もう一度本題に入る。

向こうは武器を構えたまま目を鋭いものにした。

その女をよこせ」

といわれた女は..... みつこ

えー?MEちみに興味ないよ~?ちみちみ~」

なに言ってんだこいつって顔されました。

わたちらが興味あるんわ、 あんさんの持ってる【鍵】 にい

普通にこの人がなに言っているのか聞き取れなかったみつこは黙る。

モナカの通訳プリーズ」

カナタが要請した。

「僕たちが今必要なのはそこの君が持っている【餓鬼】が必要なん

だよ」

「重要なところでいい間違いすんな! 【鍵】だよ!

あ〜、ぁぁ...そう?もってないよ」

前回も【鍵】どうたらいってたな。

しらばっくれ んな!こちとら調べはついてんだよ

あなたたちにも悪い話じゃあなくってよ? 【扉】を開けてモンス

を少し溢れさせれば、 またハンター 業は復活・

「...... やっぱりな。

カナタは帽子を弄りながら予想的中だと笑った。

れればハンター狩をしていたあんたらは仕事を失う。 元々ないけど 「ハンター協会なくなればハンターはパー トナーを没収される。

「おい!!」

「てかさ~普通の仕事しろよ~」

「うるさい!!!」

羽の剣で攻撃された。 レを知っていたから回避することは簡単だった。 離れたところからも攻撃できる風系の剣。 ソ

ねえねえ、 なんでMEが【鍵】もってんの?あたしはしんないよ

知らない」

カナタはそういいきるとアポロを使って【六年制】 の動きを止めた。

「さて行くか」

「ずるいぞー!!」

•

城に着いた。

「あー、えーと。ランジェ様に呼ばれて「これは、トゥディ様にカナタ様……」

ᆫ

そうですか、 ではお通りください。

あっさり入れた。

「どこにパー トナー居るのかな?」

地下だ」

カナタは鼠を見ながら言った。

地下へと行く道には勿論兵士が居た。 さすがに二人はそこまでいく

権力は持っていない。

なので早速ヤスコは行くことにした。

なぁ ココから下につれていかれたパートナー おる?」

何者だ!」

きいてんのはコッチだ!」

ヤスコが懐から何かを取り出した。

代12代目勇者一族当主

まさか.... ·本物!」

何故このようなところに」

年老いた古株の兵士は頭を下げた。 やすこはそんなことはどうでも

いいと立てらした。

捕まえられたパートナーはこの下か?」

「は、はい。 まさか、 なりませんよ!解放などなさっては、 国王の

勅命です」

黙れ、 下 郎 !

ぴしゃりとヤスコは言い放った。

にがハンターといえよう!さっさとそこをどけぇい 「我が勇者一族の御旗の元に、 我が傍にパー トナー が居らずしてな

ヤスコの気迫でどいたが説得は続く.....。

「職権乱用ですぞ!?」

「考え直しくださいませ!!

なぁ~ ヤスコかっこい とりあえず、 あたしらも続こう」 いこといっ てたけど。 意味不明だったな。

階段を下りていく。

うわぁ!!ゴキちゃん!!」

てかなたの頭を殴った。 リィシャが吃驚して前の 人を押すと、 前に居たサキはソレに吃驚し

「いて!?」

殴られたカナタはよろけてみつこに当たった。

みつこはそのまますべるように階段を下りて言った。

「どぅぅぉおおおおおおおおお!!!??」

やすこはみつこに抜かれた。

みつこやる気満々やな、うんうん」

違う。

ついた。 やすい。 一番最初に階段を頭ベリ下りたみつこはまだ地下があることに気が その扉にはパートナー回収場と書かれていた。 実に分かり

「いてて~。ここは?」

真横を見て、固まってしまった。

親父親父親父親父親父親父親父親父親父親父親父親父親父親父親父 親父親父親父親父親父親父親父親父親父親父親父親父親父親父親父

親父親父親父親父親父親父親父親父親父親父親父親父親父....

:

いや、あたしの親父じゃないよ?

`えっとぉ、お久ぶりです」

ドラゴンと殺人事件以来ですね。

越えるはずないですよね? なくとも世界でこんなに大量に似た顔と体系と姿した奴が軽く20 てか・・・・ ・なに子ですか。 双子って二人で双子だよね?少

ある意味ホラー

「お嬢ちゃん.....まっていたよ」

「え?!」

「まっていた.....」

「まって.....」 「こちらへ」 「さぁ.....」 むしろホラー!!!! どうなるみつこ!!!

おわり

絆~大切な仲間~前編 (後書き)

親父親父親父親父親父親父 親父親父親父親父親父親父親父親父親父親父親父親父親父親父親父

292

絆~大切な仲間~後編(前書き)

が城に忍び込み、みつこが地下で出会った人は.....。 ハンター のパートナー が没収されるということに怒っ たみつこたち

293

絆~大切な仲間~後編

「うきゃぁああああああああああり!!!」

駆け出したが、普段運動していなかったため、 階段したからみつこの悲鳴が上がった。 り.....こいつも滑り落ちていった。 カナタはいち早く反応して その気持のみが空振

「 うぎゃ ああああああああ!!!!」

「あいつら悲鳴にてるなぁ」

· そういうもんやろ」

残りはマイペースに降りていく。

はなさない。 みつこはキモイ親父に腕をつかまれ必死に抵抗しているがてこでも

普通にキモイ

きもいきもいきもいきもいきもい.....

「お前を待っていた」

「ひぃぃー何ソレ!じつわオトーさんとか!?」

「違う.....まっていたのはお前が持つ【鍵】

、 え ?」

みつこの体が光った.....。

胸の辺りからシャボン玉のような光が浮き出て目の前に現れた。

「なんでアタシから【鍵】が?!」

か!!!

気に光が膨張するとそこにひしめいていた親父が全員消えた。

· 消えた?!誰か説明プリーズ!」

ありがとうお嬢さん

いうか、 上から声がして上を向けば、 仙人みたいな感じの者がいた。 そこには神々し なんて

「えっと?」

この【鍵】はとあるアホが作り出した四天地の扉を開く鍵..

「四天地ってなに」

簡単に言えば、異世界

「本当に簡単に言いやがった」

ソレを阻止しようとしましたが扉を飛ばすことで精一杯で、 アホが世界の改新を図り、この世界に魔物を取り入れた.. 力を使 私は

いきり。 「なんかいまいちシリアスになんないよね、 なおかつ呪いであんな記憶喪失の親父の姿に いーけど。 で?そのあ

ほとあたしの関係は?」

ありません

ないんかーい(怒)

?あとまぶしいから無駄に、 ていうか首痛くなってきたんだけど、 目が痛いから..... 降りてきてくれないかなぁ

いうか憑いた? あなたの真の武器に惹かれてアナタの元に降りたのでしょう。 لح

「言い直さなくて良いから」

なんかコレだけのことで自分だいぶ損している気がする。

器にもつアナタのお姉さんがそれをいち早く知り、 ら目を惑わせるためにわざわざミスター・クレアの養子になりフェ イントをかけた その鍵を扱えるのは今やあなたのみ.....過去見の預言書を真の武 ハンター 協会か

「頼んでねーし.....って、アタシ姉いたの!?」

初耳!!

ん?ミスター・クレアの養子?」

養子.....カナタ?まーじで?

何故!?

けで てか、 い いえ、 アタシの真の武器【鍵】なの?ヤだよこんなつかえねーの」 アナタの武器はちゃんとあります。 あなたが出さないだ

· え~?」

あたしのせいですかー?

まぁ いいや、 用事それだけならみぃはいくよ」

んじゃ。 と手を上げる。

待ちなさい。 この子を

光の輪ができると中からファイアーリングを越えるライオンのよう にロアが出てきた。 吃驚した顔をしている。 コッチも吃驚だ。

小さくして抱きしめる。 これよこれ。 このもふもふがたまらんなー。

ヤスコの海里には負けるけど!

「ども!」

お礼を言って地下に行く。

ロア ・空間ワープ」

武器化して一気にパートナーを外に出す。 後はめいめい逃げたまえ

サル吉と海里とライを連れて階段を上がっていくと、 ころにカナタが倒れていた。 一応聞いてみる 親父の居たと

誰にやられた」

自分?」

「おいいい」

つ とりあえず階段を上っていくと四人と合流したので、 トナーを帰してあげる。 感動の再開までは良かったが.....つかま それぞれのパ

王様謁見の間

何故ワシが禁止したかわかりゃんのか!」

噛んだな.....

· わかりゃん」

あえて同じ口調で返してみた。 して気がついていないとか? 王様特に何も言わなかった、 もしか

強いソレを持っておくのは核兵器を持つのと同じ......危険なのじゃ」 「【六年制】のようになっては困るからじゃよ。 普通の武器よりも

「だってよ」

・俺に振るか?」

「だってなぁ、サキがなぁ」

· リィシャだろぉ 」

゙あえて言おう!!「そんなものは知らん」と」

· そこで棒読みになる意味が解らん」

「なんかカオスだよ!」

お前たちは今回のことをどうするつもりじゃ

えー? えー?どうすん」

知るから

あー もうウッ サイ!!」

サキが雷を使って皆をしびれさせた。 これでとやかくはいえなくな

っていうか、やっぱりアンタが一番危険やン (汗

とりあえず!仲間は返してもらう」

ふらつきながらみつこは立ち上がった。

「パートナーはパートナーすなわち相棒!只の道具じゃないんだ!」

みつこは王様にそう訴えた。

位置的に背後にいたリィシャもサキもヤスコもその言葉に頷いた。

カナタは共感できなかった。

(結局は武器としては使うんだなこいつら。

道具じゃない、 しな とは宣言したが武器じゃない.....とは言わなかった

うっむ。 しかし

あんまりとやかく言うと..... これなーんだ」

みつこが胸から光を出した。 取り出し方を覚えた【鍵】 だ

これから【扉】だして魔物放出させるぞ?」

む む ::

しかし」

「王様!!大変です!!」

一人の女官が慌しげに駆け込んできた。

・ 姫様が!魔物に」

「なに!?」

だからコッチみんなやお前等アタシ マダ ナニモ シテナーイヨ?

の鱗を持った【闇邪神竜】が空を浮いていた。

ダーク・ゴット・ドラゴン
城の一番高い屋上に出ると漆黒硬そうな体にところどころ赤い紅色

ああいうのって、 なんで姫様さらうのかな?」

「さぁ?」

おぉお!!ランジェ!」

王様が届くはずないのに手を伸ばします。

姫が一番稀有な魔力をもっているから、 ソレに惹かれるんだよき

っと

さすが情報屋」

納得している場合でもないな。

·····?

カナタが空を眺めた。皆もソレに習う。

なんか魔物が わらわら わらわら わらわら 何故?

「だからー。 あたしじゃないよー?」

皆みつこを凝視してしまう。

「なんで?」

「私が何でも知ってると思うなよ」

なんだーとヤスコは海里の上に乗った。 もはや定位置。

·.....おぬしたち。」

王様が目の前に立ちはばかった。

勇者の称号を与える。じゃからアレを倒し姫を助けてくれ。

彼女たちは笑いあいました。 今この場で姫を救えるのはこのメンバーしかいませんからね。

返事は決まっています。

「勿論だろ」

モンスターを狩。 それが..... ハンター の仕事だからだ

勇者~ロアのプライド~ (前書き)

たが... 定番らしくドラゴンに攫われた姫を救おうと立ち上がった五人だっ

勇者~ロアのプライド~

い、またヤスコも然り。 ドラゴンははるか高い天空に位置し、 接近攻撃型のサキでは届かな

まぁ、 もと、 もともとカナタには期待していないが。 ハンターのカナタは戦う気がないらしく、 後方に控えている。

みつこは早速アレを叩き落すことを考えた。

おう!」 アレを叩き落して姫を助けた後フルボッコ。 O K ?

それでいい。と他の人も賛同する。 これがベスト策だろう。

「よし、じゃあリィシャ!アレを」

゙まかせっとけぇい!」

がし!!

リィ シャは何故か雷を掴んだ。 サキの顔が面白いことになる。

「 いつけえ !!

「きゃうぅううん!?」

ライを投げ飛ばした。

くなぁああああああああり!!おい ١١ なんで雷

飛ばすんだよぉ!?」

「違った?」

「どう転んでその考えにいたったんだ!?」

みつこは頭痛そうにリィシャの頭を掴んだ。不思議そうに首をかしげている。

あのなー。 OK!!コイツか

ああああああああ リィシャは飛行攻撃型だろぉ?つまり」

ヤスコごと海里を投げ飛ばした。

む?むう お前ええええ!!話しは最後まで聞けえ! ヤスコぉおおおおおおおおおお!!」 っていうか、凄いな。 ! ?

カナタは地味に後ろで感心した。

「あー?あ、そうかOKOK」「リィシャちゃん!?」

全く信用ならないOKが出た。

がし「え?」

とんでけぇえええええええええ!!」 リィシャてめぇえええええええええええええええ

みつこはショックのあまり倒れた。今度は雷の主人サキまでも飛ばした。

こいつ、なに暴走してんの?

しかも投げ飛ばされた人たちは全てドラゴンまで届かずに途中落下街中とか村とかに落ちていった。

駄目だコイツ。

【きしゃあああああああ】

飛行モンスター (雑魚) がリィ シャの頭を掴んで運んでいった。

おぉおおおおおおおおり!!??」

「えぇええええええええええー!?」

サル吉が間一髪のうちにリィシャに捕まって一緒に運ばれていった。

「行先は巣かな?」

カナタの厭味にみつこは何も答えることはできなかった。 ですけど? てかコレあたしのミスなの?リィシャじゃなくて?つか視線痛いん

あたしのせいかぁあああああ!!(逆切れ)

ええい、もうよいわ!!ロア、武器化」

ロアを武器化して構えた。 若干涙を拭きながら。

のはこっちのだけ。 回のは紅い瞳だけど今回のは翡翠色。黒い体は同じだけど鱗が赤い あれは邪神黒竜鬼 (ダーク=ドラゴン)、 てかさ、 前回もドラゴン倒した気がする」 今回は【闇邪神竜】前

両方邪神じゃ hį んでドラゴンじゃん。 何が違うのさ。

生まれた場所。

さいでっかー

うん?」

上からの攻撃、 【疾風カマイタチ】見えざる刃が風と共に吹かれて

きた。

おいっと、 【拒絶法衣】

風のみ体に当たる。 ウン、 強風。

みつこ、こっち死ぬ。

と来る攻撃に対応できるだけの能力は持っていないらしい。 カナタは音の壁を作った結界を作って攻撃を避けたようだが、 まぁ、

所詮特殊部類系だからな。

仕方ないなぁ。って、 うわぁあああ

横に飛び避けるが城半壊。 ドラゴン自身が体当たりしてきた。

おぉおお!!」

「カナタ!!」

その体当たりのときにカナタはドラゴンにくっ とにしがみついている。 いわずもがな必死だ。 ついたらしい。 足も

「怖い怖い怖い怖い怖い!!!」

そりゃー。 落ちたら死ぬもんね?

鼠のようにドラゴンの足から腕のほうによじ登っていく。

「お姉さま!!」

「ランジェ……怖い怖い」

偽姉妹の感動の再開を見て、みつこは少し不快感を味わった。 ンの腕から解放しても落ちるだけだしな~。 カナタはランジェのところまで良くことはできたが、ここでドラゴ と停止した。

「みつこ!」

アイコンタクトで二人頷く

ロアを杖のままでドラゴンに向けて思いっ切り投げ飛ばした。

「ロア!」

合図で通常モードにする。

角 カナタが真の武器を取り出してドラゴンの腕に殴りつけた。 攻 撃。 本の

た。 嫌な音がすると、 ドラゴンは悲鳴をあげながら姫を落とし

きゃああああ」

そこでロアがキャッチする。

「お姉さまは?!」「よっしゃ!!」

..........。あ

ドラゴンがおこったようカナタを振り落とすと氷の焔を吐いた。

「うきゃあああああ!?」

カナタ!」「お姉さま!」「主人!!」

轟!!

灼熱の焔が氷の焔を溶かす。

「え?嘘お」

帽子を必死に押さえるカナタを何かがキャッチした。

あーよかった。シンクロ率戻って」

カナタが乗っているもの、ソレは....

「邪神黒竜鬼 (ダーク゠ドラゴン) !!」

陸に戻ってきた。三人が苦労して倒したドラゴンだった。

「はぁああああああ、怖かった」

アポロを武器化して笛にするとみつこをみた。

空怖い」

「聞いてネェから」

ドラゴンをみつこの言うこと聞くように操るから。乗れ」

' 空怖いって言った後にソレいうか?」

「マジ怖い」

なぐったろか?

【ぎしゃぁああああ】

タイミングを逃し邪神黒竜鬼はあっさり攻撃をくらった。 みつこはカナタとのシンクロが合わない故に命令しても反応が鈍い。 ドラゴンに乗った直後に突進してきた。

う、う?う!うわわわあぁ~~~」

体が投げ出された。

無重力って気持いいかと思ったら、 気持悪いぐらい怖かった。

うきゃあああああああああ

「がう!!」

ロアが一緒に飛びおりた。

落ちてもネェ.....。

直後強風がみつこの体を吹き飛ばした。

カナタがなにか叫んでいた気がしたけど、 聞こえるかっつの。

ひゅ うううううううううううううううううううううう

落ちます落ちます。

まだまだ落ちます。

落ちてる~

1

長えよ!!

まぁ、 落とされた上にすんごい風で飛ばされたからね~。

「うげ!!」

ヤバイ、木に当たる。

下は森だ。木々にふっかって助かるかも~......んなわけないよね

運がよくても打撲で骨折するはず。

「がう!」「いいやーーーー!!」

ロアがみつこの下敷きになるように移動した。

「な!」

木々とぶつかった。

枝が折れて下に落ちていく。 ソレを何回か繰り返した後、 止まった。

木々がハンモックのようになったんだ.....。

いっつ~……ア、ロア?!」

傷ついて血がでている。 いつもの綺麗な体がぼろぼろで汚れているどころが、ところどころ 骨もいくらかいっちゃったらしく、 呼吸す

るのも辛そうだ。

ロア!..... ごめん、あたしのせいぢぇ!?」

みし・・・・・ぼきばきばき!!

ハンモックの木々の枝たちが壊れた。 あたしそんなに重くないよ!?

下は崖だった。 なんていう不運。 今日厄日だぜっつたい

「うぁあああああああ?!」

っ

体が再び無重力を味わう。

ガシ.....!

「え?」

腕をつかまれた?

そのおかげで体に再び重力を感じる。

「 … う 」

゙え.....えぇえええ!?ろ、ロア!?」

紅くなっている。 この状態を保っているようだが、 白銀の美しい髪が目に映る。 心が痛む。 ロアがどうやら木のツルをつかんで今 肌も白雪のように白いが今は傷ついて ソレも長くは続かないようだ。

「...... つぅ......」

ロア、無理しなくて良いよ!落ちたら死ぬけど」

むっとしたような顔をした。 かちんとなったようだ。 なんで?

「落さない、.....絶対に。俺はみつこを」

え?

まよわせ~る まよわせ~る

この昔懐かしい台詞は!!

何匹も出てきてこちらをのぞいている。 木の陰から長い耳が出てきた。マヨウサだ。

まよわせ~る.....のは止めて

「マジで!?」

きた。 くっついた。 マヨウサの一匹が木にくっつくと、 そしてまた同じように繰り返して横まで列を伸ばして そのマヨウサに他のマヨウサが

っぽいじゃないの! 初めてこんな近くで見た。 尻尾でか-丸かとおもったら狐

まよ~ん まよ~ん

ぽんっ であるロープ。 !!まようさが煙上げるとロープに変わった。長い長い上ま

゛た、助けてくれるの?ありがと」

いった。 ロアに協力してもらい、 なんとか助かっ たようだ。 ロープをつかみびくびくしながらのぼって

「大丈夫だった?ろあ」

•

「ロア!?」

倒れたロアに体を擦る。

色だし。 バドゥの群れだった。 マヨウサが逃げていった。 みため鶏のクセに牙が毒々しい。 何事かと思えば今度は食肉獣鳥グーグル 羽だって紫

やっべ、ちょーピンチじゃん。

-:...<

よれよれの状態でロアがみつこの前に立つ。

「ロア!!いいって無理しなくて、ぼろぼろだし」

「俺平気……ごふ!……ヨユー。」

うそつけぇええ!!血吐きながらいったって説得力ないんだよ!」

い る。 血の匂いに涎たらしながらこちらに襲い掛かるタイミングを計って

「そうだ、ロア。武器化」

「ヤダ。

こんなときに反抗期かゴラァ

俺が守る。 やっと、 みつこと同じ人型になったんだから。

何言ってんだこいつ?

「ヴぐぅぅるるきしゃぁあああああああああ」

· うぎゃ ああああああああ

群れが我先にと襲い掛かってきた。

ぶつけて山になった。 ロアがみつこを抱っこして高くジャンプして避けた。 やつらは頭を

ロアお姫様抱っこはこの歳になると..... 痛いかな?」

「それよりも、ココから逃げる。_

じゃあ下ろしぢぇ「やだ。」」

こいつ~ いてまうぞ?

雷の反抗期版か?雷がでれでれならお前ツンか!?いっとくけど普

通に腹立つぞ!!

お姫様抱っこのまま逃げ出した。マヨウサは逃げたからか、 とは無かった。 迷うこ

奴ら追いかけてきてる.....うぐ」

ロアが膝を突いた。

傷口が広がったのか......血のにじみが広がっていく。

通に珍しい服着ているんだろうね!?てか大丈夫 「こんなときにいうことじゃないけど、どうして人間化するとき普 ! ?

がくがくと揺さぶると反応がなくなってきた。 顔も蒼白だ あれ?

「あぅ!?きたきたきたきた

!!!!!!

グーグルバドゥの群れがやってきた。 お早いお着きで.....えへ 三

わぎゃ あああああああああああああああああああ

勇者~ロアのプライド~ (後書き)

う愛情表現します。 ハンターなのに狩をしないハンター。 (怒)」で終わる。 哀れww が、みつこてきには全て「反抗期かぁああああ ロアは雷に似ているようで違

勇者~死に逝く者たち~(前書き)

ろずっと不運なみつこは森の中にへと落ちていった..... リィシャによって皆各地へと投げ飛ばされたがそんな中ここんとこ

いてて.....

サキと雷は激痛を抑えながら立ち上がった。 ていない。 運よく何処も怪我をし

「ここどこだ?……ん?」

ようだ.....狼王のしずくもってないっつーの。 ひんやり。 鬱蒼とした森だった。 どうやら森の中に落ちてしまった

「あ?」

なんか聞こえる。

ずどぉオオおおおおおおおおおおおおおおおん

「あっぶね!」

間一髪で避けれたが、 一体何が上から落ちてきたのだろう。

ぷはぁ」

ヤスコ!?」

てここにおっこちた」 サキやぁ、聞いて聞いて!海里に乗って街中落ちたらバウンドし

そうかそうか、 で皆は!!」

さぁあ?」

サキは震える拳を無理やり抑えた。

あれえー

変な悲鳴と共にリィシャが落ちてきた。

「たたた.....ん?」

リィシャぁああああああ

おまえぇえええええええ」

うぎゃ ああああああああああああああああ あ あ あ

.....少々お待ちください。

「で?みつこ一人で戦ってるのか」

たぶん」

大変や!早く援護いかな」

「で?ココ何処だ?」

森の真ん中らへん。 リィシャはハーイと手を上げた。

俺知ってる。 死者の森だ」

ヤスコのテンションが急降下した。

帰りたい」

「速いな。おぃ」

サル吉、 出口まで……サル吉?色素薄いぞ?」

ろげな形を保っている。 青白いし、いつもよりつかみどころのないような、ふわふわとおぼ

サル吉がゆっくりとソレを指差した。

ı

冥界への道

うわああああああああああああああああああ

:

「なんだ、グーグルバドゥって弱いじゃん」

みつこの力量なら何の問題もない雑魚だった。

「焦って損した あっは _

倒れたロアを振り返る。

ら口きかないからね」 そこでまってなさい。 薬草持ってくるから。 ぁੑ あともし動いた

とことこと歩いていく。

.....うう~」

森の中を歩くとまたマヨウサに出会った。

「マヨウサじゃん」

ひょこん

出てきた。めずらし!!

ぴょん、 と跳ねると抱きついてきた。 なんだ、 超可愛いじゃ

ヨウサ

もう一匹もおずおずと来て飛びついてきた。

かわええ、超かわええ」

歩ける範囲で歩いていると足や腕にくっつくだけでは飽き足らず頭 これは、海里を超えるふわもこではないですか!?

の上にも乗り始めた。おなかも背中も満員だ。

ちょ.....これは」

最初は気持ええ~って思っていたが、 コレはさすがに.....重い

べしょ!

この重さは多分マヨウサの上にマヨウサが乗っていると見た。 耐え切れずに倒れこむ。 わらわら..... まだまだ増えていく。

死んじゃうよ?圧死しちゃうよ??

· うぎゅ~~~~」

みつこか?」

に残るわ死に掛けのみつこ。 さぁ......マヨウサはまるで砂のように姿を消して逃げ出した。そこ 回復アイテムを使ってもらい復活した。

「他にもっと言うことないのかよ」「師匠じゃん。いーとこに」

サンキュウ。回復アイテムちょうだい。 ロアが負傷しちゃってさ

殴ろうかとも師匠は思ったが寛大に許すことにした。

「パートナー連れて逃げるのか」

有りにさせるのよ。 復してドラゴンを倒さなきゃ駄目なの。 「は?ちっげーし、今アタシ勇者なのさ!とにかくさっさとロア回 くっくっく」 あわよくばパートナー

コイツもがめついなぁ

ロアのところまで行き回復させた。

. 獣化小さくなあれ」

小さいいつもの状態にして頭に載せる。

「気のせいじゃない?」「こいつ、俺を睨んでないか?」

「俺の目にはないているように見えるが?」

ロアが泣くわけないじゃん。 ねーロア?あれ?泣いてる?」

もうマヨウサは見えなくなっていた。とにかく出口を目指す。

マヨウサに殺されるかと思った。 くっつくんだもん」

。

あ?んなわけないだろ」

即答で否定されても、 ソレに殺されそうになったんだもん。

あれらは恥ずかしがり屋で悪戯好きの謎モンスター だぞ?そもそ

も姿すらいまだハッキリしていないしな」

ア? MEは見たしさわったもんよ。 てか皆見えない系?もしかしてレ

お前は見えるのか?アレの存在を見れる奴なんて初耳だな」

「まじで?!」

ち ハンター協会あるときにこの情報を高く売りつければよかった。

明るい日差しが足元を照らした。

森から脱出

「久振り~」

ぁੑ

姉ちゃ

 μ

「大変やで!」

太陽の花クエストのときに面倒見たこどもたちだった。 なんか騒がしい。 いつもだけどいつもにまして五月蝿い。

...... みたの」

「え~と?末っ子だっけか?何を」

末っ子はいたって本気で真剣な顔をしたままみつこにそれを告げた。 すぐ後ろにいたのか、気配消すなよ怖いなぁ。

「おぉ、サキたちにあったか!今何処に?」「お姉ちゃんのトモダチ……」

..... 死んだ。」

え ?

「死んじゃった。冥界にいちゃったから」

な、なんで?嘘やン。何でそんなこと.....

聞いた。」

「誰に!!」

つい口調が荒くなるが末っ子は気にせず淡々と行った。

シェンジェ姫」

! ?

なんで、 その名前コイツが知ってるの?なんでここで出てくるの?

・助けてっていいにきた。でも駄目だった。.

「な、んで?」

ハンター協会無い。 カナタもいない。 みつこもいなかった。

末っ子は目をうるうるさせはじめた。

「死者の森に、トモダチ、いる」

ロア!」

! みつこ?!」

「死者の森いく」

ロアを大きくさせてみつこは走り出した。

トモダチが死んだ?ンな馬鹿な。 あいつらがそうそう簡単に死ぬわ

けないじゃん。

だってドラゴンだって城にいんのにさ、 何に殺されるってんだよね

え ?

森の中は鬱蒼としてひんやりしている、 いつものことだけど..

あれ?

息って、どうやってするんだっけ?

【れ?おう、みつこじゃん】

【ドラちゃん倒した?俺も倒したかったぁ】

【じゃぁ投げんなや】

体が朧に光っている。 幽体

なんで?何死んじゃっ てんの?君ら馬鹿??うましか?」

【うましかって変換したら馬鹿じゃねーか】

【死んでしまった~】

【サーガに不意打ち喰らってさ】

冥界の魔物の王。サーガ

倒したじゃん」

【死者の王なんだから、元々死んでるって】

【今は何処いったんやろな?】

んだって】 【シェンジェ姫の話じゃ世界を死者の国にしようとしてるみたいな

· てかさぁ」

みつこは砂をつかんで三人に向けて投げつけた。 く通り抜ける。 体に当たることな

なんで笑ってんだよ。 悲しくないの?ねぇ?馬鹿かぁ~?」

【.....だって、あんまりにもあっさり過ぎてさ】

【命ってあっさり奪われるんだなぁつうかさ、マダ実感ないって言

うかさ。】

_

みつこが泣いたらあかんよぉ?うちらツラないんやきん】

なかねーよ!ばーか!」

みつこは三人に手を伸ばしてみた。 触れることも感じることもでき

「本当に、死んでやんの」

【やねえ】

【みつこもこっちくる?】

· やだ。」

【即答だな。解るけど】

三人は笑って親指を上に立てた。

【ガンバ!】

「......他力本願かよ、まぁいいよ」

みつこも親指を立てた。下に

「手柄一個もやんないから」

【がめついな】

急いで城に戻って、さっさとドラゴンを倒して、 倒魔王サーガ!!して仇討って……。 それから んでもって..... . 打

「お前等の墓立ててあげるよ」

【なんかさ、こう直に言われると腹立つな】

せっかくいい笑顔でいったのに

なんで?

みつこはロアに乗ってもう一度はしりだした。

まってろ私の人生の邪魔になる敵たちよ!とにかくハンター みつこ に倒される!

終わり

勇者~死に逝く者たち~(後書き)

どう立ち向かうか..... イキナリ主人公級の三人が死にました。 ドラゴンにサーガみつこは

「カナタ……お城何処?」

古い古い厳かなお城は跡形もなくなっていた。

機は無くなったと判断して.....諦めた。 「簡単に説明するれば、 みつこが居なくなったことで、こちらに勝

諦めんなよ!もう少し戦えよ!!戦士だろ」

非戦闘員だ!」

゙ぁ.....ヹめん」

「そういえば風の噂で聞いたけど」

という、 サキ ヤスコ 悲しい事件の噂。 リィシャ 共に死亡 そのことはたちまち町に広がったそうな

:

「 まだまだ未来はあったのに」「 若いハンター がねぇ......」

皆に黙祷捧げられていました。.....が

え

みつこは半壊した城の中のまだマトモな一室でカナタと話していた。

「もう一度、もう一度言って?」

わけじゃないのよ」 「だからね、 【冥界への道】 はあくまでも道だから、 あの世に逝く

「え……でもスケルトン」

「要するに、 肉体と魂の分離された状態に今はあるわけ」

:

私の悲哀返して!?

らしーよ」 「まぁ~その状態が7日続いたら、本気で冥界に繋がるから、 死ぬ

なんで『らしい』?」

知らないもんよ。 体験してる頃には死んでるもん.....試す?」

「お前がな」

本気で死んでしまうらしいけど.....大丈夫かな?一 大丈夫だよね まぁ死んでないならまだ安心だ。 7日のうちにサー 回倒したよね、 ガを倒さないと

「みつこ弱気な顔してる」

そりゃー人の命懸かってンだもん。 嫌になるわ」

カナタといえば涼しげな顔をしている。

余裕綽々だね」

まぁね.....滅亡するならしてしまえ」

お前人間としてないわ~」

冗談冗談と笑っているが.....本心ではどうだか

手はまだある。 ミスター クレアが動いた」

あのおっさん?強いの?」

たいぶハンディはあるけどジャグラー と組めば強い。 ただ」

カナタはその名の通り遠い目をした。

仲が猛烈に悪い」

「よく勇者やれたな!!

だからこそのだよ、 お互いがライバルだから張り合う」

レベルだけでのしあがった強者らしい。

ところでロアとのシンクロ率がぐらついてるけど大丈夫?」

そんなことも解るのか凄いな」

真の武器だから」

てか誉めてる場合じゃないな。 シンクロ率が悪けりや攻撃力が下が

る 困ったな

とりあえず、頑張れ

お前どんだけ他力本願なんだ」

ドラゴンはみつこね」

え 何 その役決め.....

「王様の前で倒すっていった建前.....そっち優先当たり前だろ」 あ~うん了解。 で?ドラゴン何処?遠かったらたいそいな」

お空の上」

どうせっちゅー ねん

なにその根拠のない自信」 みつこならいけるよ

根拠あるよ」

背後に回ら背中をつかれた。

翼があるじゃ

つまり..... 死ねと?あ違う?

みつこの真の武器だから」

そういや親父がなんか言ってたな」

鍵をだせば、真の武器使える.....はず?」

最後に疑問系きたー」

やってみろよ」

急に上から目線か」

胸から鍵を出す。ここまでは簡単だ

で?

「どうすんのこれ」

これ鍵

「いいの?!」「置いとけ」

なんて知らないだろ。それにソレ.....ぶっちゃけダサイし」 「只でさえ一般人はルークリスレイのこと知らないのに、 鍵のこと

もろ無意味な汚れがついている。 我ながらよく持てるなぁ

「よし、やってみっかぁ」

ジ化してみた。 鍵を置いて気合いを入れる。 もう一つの力を感じる。 これをイメー

スカイ・フェザー

純白の翼が背中から生えた。

ぱたぱた.....飛べそうだ。

ふわ....

「よっしゃロアこい!」

「あ、これも!」

投げられたものはリスでした。動物は大切にね

天上まで登り上がる。ドラゴンが口に青黒い何かを集めていた。

「何あれ?!」

 \Box アレ撃たれたらヤバイ街の一部分消え去る!』

リスがバッと看板をだした。あ~リスってネズミ科だっけ?

『違う!リスはリス科ちっさかったら洗脳できるの!』

「心も読めるの!」

『預言書だからね。たまに外れるが』

「よし!!」

気合を入れて武器を構えた。 見据える先にあるのはドラゴン。

「その命、貰い受ける」

なんてな

、とにかく!あの技の邪魔するよ!ロア」

杖を構えた。

『魔法反射・最大結界魔法リターン』

にサキにやっ た奴のレベルアップバージョンだ 薄い白色シャボン玉の結界がドラゴンを包む、 前回コロシアムの時

「どうだ」

はない。 ドォバチアアアアアアー! ドラゴンはシャボン玉の中に入れられたままでも特に変わった様子 むしろ気孔波をこちらに向けて撃ってきた。

「うわきゃ!?」

もない。 羽の特力で瞬間移動してその攻撃を避けることに成功した。 みつこの後ろのほうにいたモンスター五匹が一掃された。 全く跡形

ひょえー」

ぞくぞくするね。

前前!

ん? !

ドラゴンが突進してきた。

「わわ!」

「..... こうなったら」

ロアを剣の形に変える。

小細工無しだ!!」

軌道を変えてドラゴンは再び突っ込んできた。こちらからも突っ込 んでいく。

:

『このシチュエーション過去に何度もやって失敗してなかったっけ

?

「今ソレを言うな!!」

ドラゴンが口を開いた。え、せこくない?

焔が吐かれる。

みつこ!!!

「え?」

て羽が消えた。重力がのしかかる。 ロアが人型になりみつこの手を引いて横に飛ばした。 集中力が切れ

目の前でロアが焔に包まれていく。

ロアぁあああ !!??

羽根が光った.....見える。マダ焔に包まれてはいない。

しゅん

一瞬でそこから移動しロアを焔から救出する。 体のところところが

火傷を負っている。かなりの重症だ。

.....

何かいいたそうだねロア。 あんま意地こになっちゃだめだよ」

来た』

う考えなのか、 もう一度体当たりしてバランスを崩したところで焼き尽くそうとい 先ほどと同じ

「肩翼を貰う」

当たる直前にドラゴンの頭上に行き羽根を消した。

!?

ツバサが純白の剣になる。真珠のごとき美しさ.....。

翼の剣』

うりゃああああああああ

力がなくとも重力が補ってくれる。

剣を振り下ろす。

ざしゅっ つ!!!

ドラゴンの肩翼が吹き飛んだ。

ぎゃああああおん

肩翼を失ったドラゴンはバランスを崩して地に落ちていった。

『クエスト完了』

後は、魔王サーガだけだ!

ロアに乗って駆け出していく、見えてきた!!

「ミスター・クレア!!」

「おぉ!みつこくんか」

ぼろぼろの姿でロットを構えている。 した杖をもていた、 アレがジャグラー.....? 金色のワシの形をモチーフに

「てか.....まじか」

「少し待っていたまえ」

量も驚きだが、 杖を振りかざし光を虚空上一点に集める。 みつこにはそれよりももっと驚くことがあった。 集まっていく光の速さと

「魔王サーガを押してる.....いや、それどころか.....」

圧倒的に有利。

ミスター・クレアは全くの無傷の上にまだまだ余裕そうだ。 などぼろぼろなのに.....。 サーガ

「これが.....」

まさしくこれが勇者クレアの実力なのか.

光が集まりクレアは叫ぶ。

「え?」

サ ガが何を言ったのかみつこには聞こえなかった。 だが

にたり

見下されたのは解った。

「 冥界に帰れ!魔王サーガ!!_

「ちょまつ!!」

ぶつけられたように、目も開けることは出来ないし、恐らく開ける 事が出来たとしても真っ白な世界しか開かれないだろう。 クレアが光の粒子をサーガにぶつける、まるで間近で発光手榴弾を レよりもっと気になることがある!! ていうか

(アイツ(サーガ)私を見て笑いやがった!?)

光が波の引き潮のように消え去っていった。

勿論そこにはもう魔王サーガは跡形もなく消え去っていた。

待てえって.....いうたやろぉがぁああああああああああまりさて、帰ろうみつこくぶううううう!?

綺麗に飛び蹴りがミスター したのがもろはいったらしく、 ・クレアの頭にヒットした。 声もなく地に倒れた。 脳天にヒッ

あいつムカつく!!なんだ」

と何か重力を感じ足元を見ると、 リスがいた。

あ・・・・・まだいたの」

『ご挨拶だね、いいけど』

たまに思う疑問、 何でカナタの操る動物って、文字かけるんだろう

.....

『どうします?』

「何を?」

リスは書くのがおそいな~.....。

さにゃくちゃ』 『まおうサーガのことだよ。 やつからさんにんのからだうばいかえ

るし....。 漢字かけないんだ..... っていうか、 しかも噛んだみたいにひらがなも失敗してい

「倒せばいいんじゃないんだ?!」

ち・ち・ち・ち・ち・ち。

『からだどこよ?』

それだけの文で時間かけんなぁあああああああああああああります!

鹿なのがいけないんです。 リスを遠くへぶっ飛ばす。 ゴメンナサイ動物愛護の方.....リスが馬

「さてと、とりあえずロア!」

通常サイズに戻したロアの背中に乗り、 カナタから聞き出したいこともあるしぃ~。 いっ たん帰ることにした。

あっと、クレアと」

振り向くとそこには美しい金色の孔雀がいた。

美しい金色で虹色に輝いている.....綺麗、 ええ 綺麗..... 綺麗..... きれ

「眩しい.....」

直視できないわ。いろんな意味で

こちらを見るやいなや

ブス!!

「いだ!?」

クレアをくちばしで刺した後飛んでいった。

任せます..... ?いやいや結構です?あ、 違う?」

とにかく帰ることにした。

.

「カナタ」

バン!!カランコロン

- · · · · · · · · · ·

ひゅ~~

「くらっ!?ちょっとカナタ電気つけろよ~」

つけてるよ、ただね誰かさんが闇を呼ぶから」

誰かさん?」

うううう~

びく!!何かがそこにいる.....。

「 やすいんや新屋..... 」

「やっすこ~」

あぁ、知っちゃいましたか.....。

「まぁ、これはおいといて」

隣に何かを置くような動作をする。 んでるのか、 好きだな~ ぁ 横に髑髏茶がある。 マダ飲

戻る肉体がないんだもん」で?復活しないの?」

そりゃそうだけど

ね へ送られて生きがえった奴がいないんだもん。 「ぶっちゃけ、 サーガ倒せたやついなかったんだから、 予想外なことだった 冥界への道

他人事だね、こいつ。

「どうしようか」「で、結論が?」

コッチが聞きてーよ!

どうしましょうか、って言われてもコッチは頭がこんがらがってわ けがわかんないような状態なのに、 わかるわけないじゃん。

お手上げだ。」

カナタが手を上げた。

....終わった。

駄目だから!!!」

完結しちゃ駄目だから!しかもバットエンド。

「う~ん、でもなぁ……あ」

「え?何」

お茶冷めた、とかじゃないよね?

・御三家なら、なんか持ってるかもな」

初代勇者御三家なら、サーガにたいしてなんか知っているかも!?

よっしゃ!まずはやすぃんや新屋んとこから」

新屋いんねえぇえええええええええええええええれま!!?

逃げやがった!?自分とこだろ!!カナタは.....っ

髑髏が消えてる.....ってかお前もかああああああああああああああ

!!!

自分から提案しといて逃げるか普通!?

「だってえなぁ」

カウンターの下で二人仲良く身を潜めていた。あ、そこに居たのか二人で

長老まじでめっちゃこわいねん」

老人苦手で」

お前等ぁあああああああ!!

「で?じゃあぁ、リィシャのとこの」

「むりむりむりむりむりむり」」

じゃぁあどうすんだよぉおおおおおおお

ばんばんばん!!

机を力いっぱい叩き込む。

ああ!!」 「王家は.....只今ドラゴンのせいで崩壊してるしさぁああああああ

'.....。待てよ」

みつこは懐から鍵をとりだした。

「こっからいけるんじゃね??」

来るなら。 なんだってこの鍵の扉からモンスター出るなら... か手カガリがあるはず..... 一か八か。 向こうにもそういう世界があるはず、 ならば、 .. でるというより、 行けば何

お久しぶりです。

鍵を扉に差し込めば音もなく開かれる。

らえる、 水のように流れ込んでくる風に身を流されそうになるのを何とかこ ってくれるようだ。 満ち潮のように風が逆流を始めた。 望みの場所に連れて行

「がう!」

ロアがひっ しにみつこに離れまいとしがみついた。

「みつこ!」

さえながら叫んだ。 カナタがチェックガラの緑色の帽子を吸い込まれないように手で押

....ミイラ取りがミイラになる?」 行けたとしても七日だ!ソレ以内には帰ってこいよ!じゃないと

自信ないなら使うな!てかお前来ないのか!?」

コイツ.....目を逸らしやがった。

いい加減体力の限界で扉に吸い込まれていった。 ゃ にせ、 かなり怖いぞぉぉおおおおおお 意外と、 いや結構、

ぎゃぁああああああああああり!!!

0

「った~」

頭をなでながら体を起こす。

「わぁお」

周りを見渡せば真っ黒な草に真っ黒な木々、 まらない世界なんだろう.....てか 空は灰色.....なんてつ

冥界に来てどうすんだよ!!!」

の道どころか、近道しすぎて死んじゃったよ!! 七日云々よりも確か冥界に来たら死ぬんじゃ なかったっけ?冥界へ

大丈夫でございますよ、お嬢様」

着た女性がいた。 声がして顔を上げると冷淡そうな憂鬱そうな黒と灰色のメイド服を

死んでおりません。 貴方様は【特別】でございますから」

そういって深々と頭を垂れた後、 手を横へ伸ばした

「馬車を待たせております、お乗りください」

「ちょ、え?あの、誰?」

色々聞きたかったがそこを先に聞くことにした。

「どうぞ御気になさらず」

いえいえ、気になりますから

しかし手早くエスコートされ馬車に乗せられてしまった。 みったん

は断れない性質だから~

馬車の中も真っ黒。 そりゃ〜 憂鬱になるわ〜

.....で、あの~何処に?」

. 決まっています、城でございます。

城でございますったって、誰かと勘違いしてない?MEはきたば

っかだよ!?」

人違いとか恥ずかしくない?!

゙みつこ様ではございませんか。」

「え、そうっすけど」

「なら問題ございません」

・・・・・沈黙。

問題ございませんって、ございますよ!ありすぎでしょう!何故来 たばかりなのにお城に招待されてんの!?ってかなんで私の名前知

ってんの?!

目が遠い目をしている。 メイドさんに聞きたかっ 苦労しているんでしょうか? たが頑なに唇を閉じているし、 何処となく

· つきました」

城まで真っ黒じゃあないですか.....何この世界真っ黒じゃないと駄 目なの? やっと黒い室内から解放されたと思って馬車から降りてみれば、 お

馬も黒色だし。 兵士も..... 肌の色だけが白いな、 逆にきもいぞ。

「メアリ=ハニ!」

急にメイドさんが怒鳴りだして吃驚して飛び跳ねてしまった。

「五月蝿い……」

階段上からまだ幼い少女の声が響いた。

「フルネームで呼ぶなって、言ってる」

るのはその手に持ってるものです の少女が、 フリフリのレー スやところどころにリボンをつけているゴスロリ系 これまた鬱陶しげな態度で降りてきた。 てか一番気にな

なんで包丁持ってるのかなぁ?」

控えめに聞いてみると少女メアリ= ハニは肉きり包丁を持ち上げた。

料理長」

誰が?君が?言葉の足りない少女だなと思いつつぼへ~っとしてい ると少女はメイドさんを見上げた包丁を持ったまま。

「女中長、何?」

「サーガ様は」

知らない」

゙サーガ?!」

やっぱココ冥界なんだ、 てか王様骸骨なんだかわいそ.....

゙ではドリアナ゠バドゥに聞きにいきなさい」

「自分で」

いってこいですか?少女がそういいながらコッチを見た。 何故私

ハーツ=ナイトー..... いるなら出ていなさい」

柱の後ろに隠れていたのかクロイ鎧を着た男が出てきた。

「ふふん、 王様が興味を示した女の子がコレね」

コレで悪イッスな。

にたにた笑った後「あ」と声をだした。

バドゥさんなら不機嫌そうな顔をして人形を三つ抱えていたよ」

憂鬱そうなメイド長に幼い料理女に軽そうな騎士にお人形抱えた女

か.....濃いなキャラが

今の今まで黙っていると三人に見られた。

「しかしまぁ、美味しそうだね」

「えぇ.....しかし食べるのは王様だけで私共の口には一欠けらとて

入りません」

「腕がなる」

なんでいきなりこちらを見つめたまま料理の話を始める?

「もぅ仕込みを」

包丁を小さな手で弄びながら少女は言った。

「まだです、魔王がこの娘に用があると」

·分かった、首残す」

「試食があったら味見させてくれよ

なんかだんだんヤバめの空気に入ってきた。 冷や汗が止まらない直

感が逃げろという。

「にやあ!」

ロアのなき声と共にみつこは駆け出した。

「ア、逃げた」

「お待ちなさい」

待てといって待つ奴がいるかよ!!

ざしゅ ん !_

飛んできた。 なんとなく風の切る音が聞こえたので横に避けると後ろから包丁が 危ない間一髪だ.....てかマジで殺される!?

「ひぃ~!なんなんだぁ?!」

走っていると前方が分かれ道になったので迷わず右にバッと曲がる すぐさま誰かに腕をつかまれ引き寄せられた。

「し、静かに」

声も上げることもできずに曲がってすぐあった扉の中に引き込まれ ていった。 足音が通り過ぎていった。

「いったようだ」

灰色の服を着た物腰の柔らかそうな男性が優しく微笑んだ。

「ありがとう、で?ココ何処」「私はペド=クリム危ないところだったね」

聴きたいことだけ質問する。 自己紹介なんてしなくてもどうせ知っているだろうと思い、 直球に

· ここはオフィスだよ、宰相ドリアナのね」

るූ ソレよりも気になるのが オフィスというよりまさしく大きな図書館といったほうが納得でき 大きな本棚に全て均一に並べられたタイトルのない本たち.

何故室内に螺旋階段.....一番上ベットだし」

彼女の趣味だよ、 ソレより君。 死にたくはないよね?」

「もちのろん」

死にたがる奴なんていないだろ

「じゃあ例のものを返してくれないか」

「例?」

ココに来たのも初めてなのに何を出せって?

「ペド!」

性格のきつめそうな女性だった。 甲高い声が部屋中に響いた。 暗い部屋の奥から現れたのは賢そうで

例のものを出せ!そしたら貴様のこぶつきで生きたままあの世へ返 してやる!」 私の部屋に誰かを勝手にいれるな!ん?なんだ貴様か!さっさと

色々こちらの特になることを言ってるんだろうケド、 と只何かを脅迫されているようにしか思えない。 聞いてる分だ

例のものって何さ」

「貴様の持っているソレだ!」

今現在持っているもの、通帳とロア

「はい」

ロアを差し出す

「いらん!そんなもの」「にゃぁー!?」

拒絶、ロア返品。そんなものって言われてしまったねロア、 にロア<お金になったんじゃなくて いや別

るのかなって.....あれ?ロアないてる? ロア ^ お金になったからこそ価値があるものを向こうがほしがって

出せといいっているのは次元のツバサだ」

ツバサ.....

やだよ!だってこれMEの力だよ!てか真の武器ってあげれんの

! ?

?

「真の武器?」

違うの?じゃ~なに

「出せといっているのは、【鍵】のことだ」

また鍵、はぁ~鍵、ハイ鍵 この鍵にはいっぱい厄介ごとが付きまとうようだ。

「渡せばいいんでしょ」

鍵を出そうとしたそのとき、勢いよく扉が開かれた。

み~つけた」

っしっしどうやら全くの前途多難のようだった.....。

やれやれ

ハハ感想があれば書いてください、そうしたらもっとやる気が出ます。

「み~つけた」

余裕はあるけど。 見つかっちゃった~って口にするほどの余裕はない。 考えるほどの

井着いてるジャン!? 幸い敵は黒騎士だけだ。 なんだ?あのデッカイ槍は.....いやいや、 何とかなるかな?って思ってい でかすぎるだろう!?天 たけど.....

「殺すよ?」

爽やかな笑顔で言い切った。

「大人しく付いて来ないと」

みつこの後ろのほうでペドが小声で呟いた。言う順番逆じゃないっすかねぇ!?

「ドリアナ宰相をつれて逃げろ」

えぇ?あたしが守る側?

「彼女は君のトモダチの体を持っている。」

「まじで?」

そういえばお人形がどうたらっていってたな。三人の体だったのか。

「彼は任せろ!」「でもねぇ」

つこもドリアナのほうへと駆け寄った。 人の話も聞かずペドは動き出し騎士に飛び掛った。 仕方ないのでみ

「誰だその台詞は!」「逃げますぞ!」

「ドリアナさん!!」

とりあえずもう縋る様に名前をよんでみた。

「ううむ、 転換 !!」

え?

ドリアナの姿が人から大きなトードリのように転身した。

きぇええええええ

「わっつ!?」

~くらくらしすぎて目の前がくるくるまわるまわるまわるまわる..... いきなりの雄叫びに耳をふさぐまもなく頭の中でひびきまわる。 あ

まわったぁ~

「 プ いて て

なんか刺されて痛さで目を覚ました。

どわ!?」

目の前にでっ 気がする。 かい鳥。 でもさっき見たよりは幾分縮んでいるような

れ?ココ.....」

ところって感じ カナタと目が合った。 からんころん あぁ、 不本意ながらめっちゃ安心した。 帰る

なんか、 でかいな」

鳥が。

そうだドリアナさん体は?!」

ね? 汗をだらだらと流している。 え?忘れたとか言うんじゃないですよ

力を使われ、メアリ= ハニに 『ここへ転送する直前にアーサー = レディウスに 食肉 を使われた。 』って言ってる」 追跡 の

るなんて万能な本だなぁ カナタは真の武器(本)を見ながら言った。 相手の意思を通訳でき

とくに てかアーサー アー サー 食肉 レディウスは侍女長だ。 レディウスって? 追跡 我々はこの世界で言う、 とか 食肉 って何? Ŧ

П

匹に必ず特殊な ンスター しろよこの本重いんだから」 だからな、 貴様らには到底理解できぬ力を持っ そんな御託はいいから、さっさと説明 ている一

きぇえとだけ短くないた。 カナタはめんどくさそうに本を持ち直した。 鳥が腹ただしそうに、

『私の能力は 転 移 で能力は』そのまんまだってさ」

「お前はそのまんま約すの飽きたのか」

に言う乗っ取りだって」 にいても探し出すことがえきる能力.....で、 「ながったらしいんだもん、 で? 追跡 が一度マークしたら何処 食肉 がまぁ、 簡単

一番嫌な能力だな。

で?それがどうしたんだっけ?」

鳥が黙った。

うん?

カナタの顔が真っ青になっていった。

かも三人の体にアーサーとナイトが入ってんだってさ.....だれだよ」 メアリ= ハニって奴が・ ・乗っ取ってんだって。

まじすか。

町のほうで煙が上がる。どごぉおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお

「いやぁあああああああああああああああり!!!」

みつこは急いで走り出した。

「ハンターが一気に三人暴走中.....」

カナタはめまいを覚えたのであった。

冥界~ただいま~ (後書き)

思います。 更新遅かった割りに落ちがなくてスミマセン。きっとまたおそいと

の戦略によっての魔物被害がやっと復旧し始めたばかりだったのに 町に行けば行くほど町はずたボロだった。 .. さぞ町の人は怒っている..... かとおもいきや 前回全八 ンタ - 協会会長

「またあの子達暴れまわって~」

るのかな?」 気すぎるけど。 「元気のアル証拠じゃないか。それにしてもいつもよりちょっと元 いつものことだしな、 見えない魔物でも追いかけて

面目でいい子だしねぇ」 まぁ、 サキちゃ んはちょっと暴れすぎることがあるけど、 根は真

そういえばサキは生前から暴れまわってたっけ?えー く町破壊率95%だっけ? カナタ日

いや~慣れって恐ろしいね。好都合だけど

ねえ ね!おっちゃ んおばちゃん、 アホ三人何処行ってか知らない

やぁ、 みつこちゃ h えーとね確か死の森のほうへいってたよ?」

ますます好都合

そのまま体返してもらおうか!よし、 先回りするよ!ロア」

ロアの上に乗り、 片方でカナタを掴む。 勿論逃げないようにだ。

なぜ、MEまで」

· お前がいないと通訳できねーじゃん」

鳥は町には下りたくないらしく、 っていた。そのほうがコッチも楽だからありがたい。 みつこたちのはるか上空に飛び回

「追いかけっこじゃぁあい!」

「楽しそうだな」

人間の、 ら、追い抜くのは容易だった。 向こう三人もたまたまなのか素直に死の森のほうへといっていたか しかもヤスコの足に比べればロアの足のほうが数倍も速い。

· みつけたぞ!」

「あら」

ずお

ありゃりゃ~、 も一侍女長が遅いからですよ~」

どうやら黒騎士 のようだ。うん、 リィシャ 違和感ばりばり 侍従長 ヤスコ メアリ= 八 二 サキ

性格(中身)が違うと顔立ちまで違ってくるようで..... 笑える

ほうがそちらから来ると思い、 して追いかけようかとも思いましたが、この体を奪った 実践しましたが。 成功したよです」

侍女長息切れてますよ?ヤスコの体はおそかったので全力疾走して いたようです。 っつも移動は海里の上 まぁ、 彼女普段から自分で歩いてませんからなぁ、

. !

三人の傍らにはそれぞれパートナーがいる。 も服従はするようだ。 どうやら中身は違って

(海里の上にのればよかったのに)

けど。 まぁ言っても誇り高い海里がヤスコ以外の上に乗せるとも思わない

「からだ返してもらおうか!」

「やだ、気に入った。」

サキが大きな包丁を持って突進してきた。 そんなもの持ってました

っけ?!

いね 避けると後ろにあった気が綺麗に切れて倒れた。うわぁ、 切れ味い

『なんでだよ!』

サキが、

感情のない顔してたらキモイな」

後ろを見ると肉体のない三人がいた。

9 取られてるから~あはは.....取り返すからさぁ なんで海里とかは肉体もどっとんのにうちらのない *h*? □

殺気飛ばさないで!?

追い出せ』だってさ」 みつこ鳥がさ『霊魂を肉体に押し付ければ追い出せる。 メアリを

「分かった!よっしゃ!行くぞサキ」

「そうわ、いかない」『? おう!』

素晴しいね ナイトのリィシャ。 サキ (メアリ= 八二)が後方に下がった。 手には妖刀村正がにぎられている。 そして前に出てきたのは 不敵な顔が

- つ つ あ ! ? .

囲からは逃れえた。 ロアに首根っこ噛み付いてもらってなんとかぎりぎり剣のリー

ありがとロア!」

うてふてふ、 この子いい肉体スキル持ってるよね。 剣とかもっち

やってるし」

『俺が居る!?』

『今までの見てなかったのか!?』

はっ!!

二人の後ろにいるのはヤスコ......手に持っている武器は

「『一掃の音色』

りん

あ??! うギャ アアアアアああああああああああああああああああああ

まさかのTHE END ?!

短くてスミマセン

冥界~ 食肉~

「侍女長〜殺しちゃ不味いんでない?」

目ない、 女長といっても見た目はヤスコのほうを見ながら言った。 リィシャ というような顔で鬱そうな顔をした。といっても中身は黒騎士のナイトは頭をかきながら侍 彼女も面

「仕方ありません、骨だけでも.....」

必要ないわぁああああああああああああああ

爆風で飛ばされた砂や木々の中からみつこが現れた。

! ! !

「生きてるなんて、何故!?」

「……ゴキブリ」

ごるぁ あああぁ サキィ !誰がゴキブリだぁあー

『俺はココだよ?!』

えは持ち合わせていないからだ。 口から魂を出したかなたをロアは引きずり出しながらみつこのほう へ気にかける。 みつこは堂々と三人の前へ出ているが、 まったく考

何故?」

不思議そうなサキ (メアリ゠ハニ) はつまらなそうに口を尖らせて サキは複雑そうな顔をしている。 まぁ、 もう一人の自分が目

の前にいたら、そう思うのも仕方ない。

「それはな.....」

『海里いい子いい子』

先に言われてしまった。

なるほど、そこなる立派な盾が先ほどのデブ鳥でしたか」

...... コオ!!!

ぺちぺち

海里の目に怒りの焔が宿った。

そこなる輩よ!よぉく聞け!!我は気高いハンターの誇り高い騎士 そうに成敗してくれるわ!!覚悟しろ! なのだ!貴様らのような低俗な輩に愚弄される謂れ等ない!!そう

.....だってさ」

ら何かと思った。 「通訳おっつ~カナタ。 いきなりぺちぺち出てきて胸ハッってるか

海里もやる気満々だ。

よっ しゃ !海里も味方についたら怖いもんはないな!行くぜ海里」

海里は頷いた。

おーい、ロアが泣いてるよ」

「最近多いな、ほっとけ」

ロアが死んだ・・・・・。

·.....お前も報われない奴だな」

海里が動いた。

まずは貴殿らの盗んでおる体を返してもらおうか!!

口から氷を吐きながら素早く三人の周りを取り囲んだ。

「く、邪魔だ!」

「ちょいとお邪魔~」

「奴は囮か!」

めてワッカに通すとグイっと引っ張りだした。 カナタから前もって奪っておいた店の商品『護符の縄』を三人まと

がいし、対は近できない、と言い引

がくん

三人の体が倒れこむ。

ぽふ

ヤスコの体だけそのフワモコのおなかにキャッチされた。

「.....う!っげほ!!ごほ」

「うえ~なんか気持悪い」

「もこもこ~」

無事三人は生きがえったようだ。 ロアがショック受けた顔をしたがこのさい無視。 ちら、 っと縄のさきをみる。 ドリアナがみつこの頭にのった。 ひとまず一安心

\<u>\</u>

三人は いうか さな 三匹はイラただしそうにこちらを睨んできた。 لح

馬.....ウサギ、黒猫ね」

やけに元気ない猫だな。コイツ侍女長か?

「さて、話しを聞こうか?」

· · · · · · · ·

こいつらも話せないようだ。 話す気が無いのかどうかは知らないが。

「みつこや、家に帰らないかね?」

「はいはい、おばあちゃんちょっと待ってな」

サギは耳をぴくぴくさせた。 サキに頭を撫でられ心底疲れた顔をするカナタのほうをみながらウ

きゅ~きゅ~」

兎が暴れ始めた。

見てるもんな、コッチ」......『まま~まま~』って、私のこと?」わ!!コイツなんっていってんの?」

カナタが困ったように兎に近づいた。

「ママじゃな.....!」

兎が姿を消した。ドリアナが喚きだした。カナタが本を落とした。

「何処行った?!あ!こらまて猫!」「兎が消えた!?」

サキとリィシャは馬のほうを見た。 兎が消えた余分なスペースを潜り抜けて黒猫も走って逃げていった。

「コイツは逃げないんだなぁ」……」

みつこは疲れたように周りを見た。

..... へえ」 駄目だ逃げられた、 もう帰る?カナタ.....カナタ?」

自分の手をマジマジとみつめてみつこを見た。

「あ~、忘れてた」「いいの?魔王サーガ倒さなくて」

カナタは楽しそうに一歩歩いてみつこへ近づいた。

なに?」

死ね」

ズン....

「え?」

誰かがみつこに向かって喚いた気がしたがその声は届かなかった。 おなかが痛い、肉きり包丁は深く刺さっていった。 一向に緩めない

手に思わずカナタを見上げた。

ゾク

 \neg

一切の感情のない顔。

メアリ= ハニのせいだと分かっているが、こんな表情に...

感触.....過去にも味わったことのあるような気がした。

意識が遠のく。

あぁ畜生... : 最近苦労ばっかだな私

みつこは痛みから解放されるために意識を飛ばした。

「ねぇね~十歳になったらどうする?」

自分よりちょっと小さな少女と手を繋いで森の中をあるいていく。

「いきなりだね」

だって」 「学校の先生がね、 十歳になったらみんな何の就職につきますか?

校終了。はれて就職できるし、 できるのだ。 十歳になればもう学校は卒業。 自立もできる。 その道の専門学校に行く人意外は学 町から出る事だって

· みつこは?」

らあと二年も我慢しなきゃなんねえ~の~!」 もち、ハンターだろ!せっかく素質あるし.....でもまだ8歳だか

「金の亡者.....そういえばあたしら兄ちゃんいるんだって。

「へ~、しらなんだ。」

十歳になえばみんな旅に出るからね。でも十四歳になれば戻って

くるよ」

「なんで?」

「婚約者つれて」

「あぁ」

十歳で自立十四歳から結婚アリニ十五歳から結婚アウト。

25歳で結婚しちゃ駄目って酷くネ?」

でも、 同性愛・近親相姦アリじゃん、 結婚できないけど」

二人は顔を見合わせた。

「変な国だね」

· そだね」

二人はもう一度歩いていく。

「そういえばさ」

ん ? .

「これどこいってんだっけ?」

さぁ?というかココ何処?」

· さぁ?」

二人は周りを見渡した。 りい 木 木 木 迷子になったら

「どうしようカナタ」

答えるわけもなく、 たいに首を振らなくても.....。 みつこは手を繋いだ先、 黙って首を振った。 カナタにとりあえず聞いてみた。そんな手遅れです。 もちろん

まあいいじゃん」

マイペースなみつこは気にせずあるきだした。

· まってよ」

小走りでついてくる。

「そんなことより帰ろうよ.....」 「結婚はヤッパリ二十歳がいいよね、 収入のいい男でさ」

ん ? _

みつこは何か光るものを見つけた。

「金目のもんか?!」

草むらを分けて覗き込んだ。そこにあったお宝は.....

光がみつこをつつんでいった。

「みつこ?」

懐かしい顔を見た。誰だっけこいつ?

「いやいや、あたしトゥディだからね」「おい!ツゥディ!大丈夫なんだろうな!」

目をパチッと開けると皆が心配そうに覗き込んでいた。

びと何故かランジェ姫まで。 ラストか? ・・・ホントに皆。小さなクエスト者ちびっ子たちや町の人 師匠までもいるじゃないか。 なんだこ

うろん、ん?」

おなかあたり刺された割には痛くないな。

起き上がっておなかめくってみた。 傷一つない。 何故?

「起きた~?いちおう見たけども、ほぼ完治してた。

ロアが飛びついてきた。

「みつこ、おちついちぇ、 取り合えずリィシャ自分が落ち着け」 ごほん!おぢー おちずいで」

こほん

「カナタがメアリ=ハニに食肉された。 あのあと結局三匹とも逃げ

られたし」

「 ~ _

「それで、言いにくいんだけど」

¬ ?

みつこに死んでほしんだ」

•

どうやら本当にラストが近いようらしい。

みつこ皆に『死ね』って言われてしまった。 ソレを聞いたみつこは

ふざけんなぁああああああああああああ

ぶちきれた。

たフードをつかんで身にまとった。 白い新品の布団から足を出すと帽子掛けのところにかけられてあっ

あってんだ!これでただ働きとかまぁじありえねぇえええええええ こちとらな!最近びた一文と金貰ってない挙句、 死に目にばっか

「いや、さいごまで話を」

うるせ

えええええええええええええええ

ええええええええれる

えれる

れった

れった<b

怒 り M みに青筋が三つもできていた。 AXのみつこは誰にもとめられない。 怒り絶頂なのかこめか

言葉が『死んでくれ』 あああああ されたんじゃあああああああああまり!!その病人に目覚めて言う 金ももらえない痛い労働何より私への侮辱... って、 アホかぁあああああああああああああ …しかもこちとら刺

肩で息し始めるほど大声で喚いた後。 みつこは後ろを向いた。

「もう知らない」

それだけ言うとロアを連れて病院から出て行った。 行きたくないけど。 久振りに帰っ てみるか。

1 N 我実家

「いや、今は勇者の称号で」

一年たってもまだ初級じゃない

「称号とか!ようわからん!」

わからんのかよ!

お金のし送りで何とか口を利いてもらってるが、 そりゃあぁもう恐ろしい言われよう。 母はもともとみつこがハンター になるのを反対していたので、 出て行ったときの、 今は

『二度と顔出すなよ』

アレは、きつかった。

'出戻りってことは旦那連れてきた?」

「まだ。」

いよ!じゃないと、 「二十五歳でいき後れなのに、 結婚できなくなるんだから。 あんた最低30歳までは結婚しなさ

「はいはい、分かってるよ。」

......そういえばカナタどうなったんだろう。お茶をすすりながら親から体をそらす。

「がぅ~」

ぶす たんすの上に上っていたロアが何かを落とした。

みつこの脳天にジャストミート。

「がう!がうう!」「ロアてんめぇ~」

母がそれを拾い上げて声を上げた。

あら、 懐かしい。 あんたらの写真。 まだあったみたいよ」

っていた。二人ともダブルで半べそかいていた。 渡されてみると、 気の弱そうな子と気の強そうな子が手を繋いで写

「カナタ?」

あら?覚えてたの?忘れてるのかと思った。」

いや、忘れてましたよ?

その時丁度家を引っ越しばかりだったから。 「ミスター クレアさんがこの子を養子にくださいって来たのね、

売られたのかかわいそうな奴。今もか。

別れたんだもの」 額見たあんたは、 いやぁ、 笑ったわね。 カナタ見て『グットラック』 養子の話ししたとき、 っていってすっぱり お金の話になっ て 金

あはは !と爆笑する母を横目でみつこは汗を流した。 なははは

•

「そういえば、どうしてるかしらね」

死んでませんよ?

ただ働きはちょっと。ミスター・クレアいるし。 カナタどうしてるのかな。めんどくさいな。 助けなきゃ 駄目かな? ・・・・・いろいろほっぽってきた気がする。 だいじょうぶかな・

やれやれ

腰を浮かせた。

「どこいくの?」

「ちょいと」

やっぱり、主人公がいなきゃ始まりませんかぁ

「お仕事に」

現実~本気

「ども、死ねと言われたみったんです。」

集まっていたのかは謎だが みつこは何気に厭味を入れつつ広場へ出てきた。 なぜ三人が広場に

皆驚いていたがサル吉のみ「うき」と手を上げて挨拶した。

死ねって言った理由今なら分かるよ。 サーガだろ」

「おぉ、話がはやいな」

たらキレなかったのにさ 感心するリィ シャ、 手かお前等「死ね」言う前に説明しろよ。 そし

周りは殺そうとしてるけど。 そういやドリアナは?」 いつ、MEに何のようだろう?なんか会いたがっ てんだよな、

「なにそれ」

「デッカイ鳥だよ」

あぁ 知らないなら知らないとさっさと言えよ。 と三人はいったあと首をかしげた。 こいつら一回死んでから

ぽけぼけしているな。

よっしゃ、んじゃ逝くか」

「今から?」

「準備してるもんね、みろ!」

みつこがその場で一回転した。 ふわ・ と滑らかな生地の

フードが風に舞う。

白い純白の色はそう真珠のように、 時たま七色に輝いていた。

ってゲットしたのさ!」 凶暴モンスター、 ウ ルの毛10 0%使用一着かぎり !結構値切

るアレ?」 ウールって、 群れでいてもいなくとも敵を見つけたら突進してく

っている物好きがいるらしいが常に包帯ぐるぐるでいつも吐血する も良い。 からいつも顔の色は真っ青らしい、 しかも先制攻撃してくるわりにはやけに逃げるのが早い、 がみつこにはそんなことどうで コレをか

「そう、 たくいい代物だよ」 レが燃えてしまっても 特殊効果で低レベル魔法はほぼ無効になる!さらにもしコ 白銀の粉 になるから売れば高いし、

「 ヘー

っとこちらの世界に戻ってきた。 目がキラキラと輝かせるみつこに一歩距離を置く三人。 はっ、 とや

「あ、ほいお前等」

っ た。 渡されたものは む と一文字かかれたお化けがつける三角頭巾だ

三人は黙ってみつこを見た。 頭につけている。 パートナーにも配っている。 ていうか

海里しゃがめ!とどかん」

おい

「ぬぅおぉおおお」

っおい

「おい」

ばっちぃぃバリ!!

電撃が唸る。 殺気を感じた、 みつこだったが一足おそかった。

ズカァアアアアアアアン!!

ぷすぷす

煙が上がる、周りは真っ黒こげ

「コレ何?」

そでだけのために、電撃くりゃわせなくっへも」

なんでおりえりゃまでえ」

海里いいこいいこ

動くのはもう少し後になりそうであった。 ヤスコのみノー ダメージ。 こういうときだけ武器化しやがって。

すくなくともあと一時間は

現実~皆で死にます

前回付けた てみつこは簡単に説明した。 む と一文字かかれたお化けがつける三角頭巾につい

00000円。 「値段を言うな値段を」 一回だけ死んでもセーフってやつ、 1200000 x 8だから~9600000」 ロード社開発商品で一個12

「うぅぅ~魔王倒したら賞金たくさんもらおう、でないとマジ暴れ

杖を用意して鍵を召喚した。

れっつごー!冥界」

光が四人と四匹をつつみこむ。

ついた」

なんだか色素薄いんだよね、 この世界。

ついたか」

カナタがいた。

死の世界の隣だから肉体持ってきても魂から抜け落ちるのさ。 「本物といっておこうか。この世界は肉体維持はできない、「メナター)でおともカナタ?」 いわば

ヘー、よくわかったね」

しかし魂のままなので色素は薄い。

ちの取ったからあるいみ情報交換?」 「メアリが中に入ったときに情報を奪 い取った。 ŧ 向こうもこっ

何故疑問系?

ソレも真の武器のチカラー?」

違う、ハンターには個人個人に超直感があってだね。 みつこなら

モンスター 探知能力」

「それでマヨウサ見えたのか」

よかった前世がマヨウサとかじゃなくて

俺は?」

サキが聞くとカナタはめんどくさそうな顔をした。 しかしサキが腕を鳴らすと語りだした。

絶対方向能力」 サキは弱点をみつける能力。ヤスコは危険察知能力。 リィシャは

頭をポリポリとかくとみつこのほうをむいた。

「知ってる。殴らせろ」「スマン。さした」

杖でカナタの頭を殴った。

「ぐは!!」

撃沈したカナタを無視してみつこは城見た。

リィシャ絶対方向の能力持ってんなら魔王のところまで案内しろ」

まさかの申し出に頭を垂れる、無理 しかし若干赤い何かがついている杖を前にしては何もいえなかった。

魔王~やっと会えた~

たどり着いた。 リィシャの無意識的な本能により、 本当に魔王サー ガのところまで

「本当に来たな」

「大豚?あぁ、あってるかって?あってるだろうだってホラ」「てかここでおおとん?」

五人はノックして返事を待った。 魔王謁見の間 と書かれていた。 分かりやすいね。

..... しーん」

居ないのかな」

留守ですか~?」

サキは三人を見ながら

「本気か?」

といった。 なっが~い奥行きに二、三段だけの階段の上に玉座。 一向に返事がないので扉をぶち壊して強行突破を図っ 自分だって待ってたくせにネェ

空座

おいい 誰もいねー ń ・じゃん」 リイシャぁ~」

゙えぇぇ、ぼくっすか~?」

ウッ んでいった。 リィシャは腹が立って蹴り飛ばした。 キ~とサル吉がやれやれとでも言いたげにくびをふったので、 サル吉は悲鳴をあげながら飛

「ぶぶ!!」

何かに当たった。

「うっきゃーーーー!」

サル吉が悲鳴をあげてリターンしてきた。

· なんだなんだ?」

た。 カーテンをのけてそこに居た人物を見ると、良く見えない。 超・色素の薄い奴が居

はっきりいって幽霊よりも見えない。

「なんね、痛いね、なにするね」

「どこぞの外国人か」

サキが殴るとひょろひょろとたおれた。

およよよ、 ひどいね。 なにもしてないのにね」

みつこは黙って見つめたあと、手を打った。誰と喋ってるんですか?

もしかして、アンタが魔王サーガ?」

え?」

薄い彼(?)は首をかしげた。 のかどうかはわかりにくいが。 まぁここに居るなら高官なのかもしれないので捕獲した。 ちえ !違うのか。 できてる

ね 「ワタクシ魔王サーガじゃないね。 彼ならこの奥の会議の間に居る

「なんちゅうとこにつくっとんのじゃ」

うがない。 ヤスコの突っ込みも納得できるものだが、 ここにいないのならしょ

奥に行こうとして、フト気がついた。

「で?あのさアンタ誰?」

スケルトンに近い彼に尋ねると彼は微笑んだ。 たぶんだが。

わたくしかね?わたくしはね、魔王ノーワルドですね」 ノーワルド!?」

カナタのみ反応した。

四人は、誰それと首を横に同時にかしげた。

しらんのかい

いいか、 へえええ、 そりゃすんごいねえ」 ワルドは一度世界をぶっ壊したすんごい魔王だぞ」

て反撃した。 みつこの感情のない言葉に腹が立ったのでカナタは前回の分もこめ

魔王ノーワルドはボーとした顔で見つめている。

「世界一回破壊したんだ~どうやって復活したの?」

「それはね、 簡単な話なんだけど、神王コルカッター がもう一度再

生したの~」

「軽かった?」

「何が?」

リィシャのボケに突っ込んでいては話が進まない。

っていうか、魔王サーガをさっさとだせぇええええええええ

いい加減魔王サー ガ編飽きたんじゃぁアアアアア

ガチャ

「なんだ!騒々しい」

本人登場。

鎧を身にまといマントを背につけているが、 手には本が一冊。 文武

両道ってやつ?

「バトルだ!!」

みつこ達は先制攻撃を始めた。

「ちょっと待て」

魔王によって止められた。

体が動かない.....さすが魔王。お強いようで

俺は争いを好んでは居らぬ、ただ話を」

最後まで言う前にぶっ飛ばされた。誰に?カナタに

魔王のクセに生言ってんじゃネェえええ

· やめろカナタ!どうした?!」

「興奮中?!」

「乱心中っすか?!」

皆でカナタを止めに入る

「殺るならやっちゃって!はやくやっちゃって!!早くやつを倒せ

!

「落ち着け!」

サキによる攻撃でしびれて動けなくなった。

゙ おぉぉぉぉ・・・・・・しびればびでぶー」

久しぶりなネタだな」

カナタは深呼吸した後正座した。

「ゴメンナサイ」

「分かればいい」

魔王ちゃん待ってテナー」

やすこはフレンドリーに手を振った。

そしてカナタに振り返る

「どした?」

君たち、忘れてるんじゃないだろうね」

忘れてます

「七日ここに居たらマジ死ぬってーの!」

あぁ

「なんだその『どうでもいいわー』 みたいな顔!」

だってどうでもいいもん

「さてと、 リィシャよカナタを見ててね。

そういってみつこはサーガを見た。 あげてる。 やっちすぃ ぁ お友達の魔王の縄ほどいて

サー ガ君やっ さすぃ

て負けた気になるんだもん! アイツとおんなじことおおちゃった.....とみつこは後悔した。 だっ

どこらへんかというと、 カナタは (あいつミスター ふざけたところが ・クレアに似てるな) と思っていた。

「で?なんかよう」

サーガは頷いた

「大人しく鍵を返してくれ」

みつこは拳を握った。

あっぶね~、 危うく殴りそうになっちゃった~テへ?」

怖いことをサラッと笑顔で返した

元々ソレは我のものだったのだ」

っ た。 我をボロ負けにした挙句、 姿も性格もふざけた奴で、 はるか昔にある男が我のところまでやってきた。 我の大切は いきなり我に喧嘩売ってきたかと思うと 幾千の鍵 を奪い去ってい

今までの説明文は無視で たかが鍵なのにいろんな呼称あるなとみつこはめんどくさく思った。

魔王のクセに弱かったの?」

サキが黙ってリィシャの頭を殴った。

こほん」

空せきひとつ

「ないと困るの?」

やすこの質問

困らなきゃ向こうもこんなに必至にならないぞきっと

「返せって言われたら返したくなくなるけど返すよ」

さすがの魔王サーガも複雑そうな顔をした。 ほらよって言わんばかりにみつこは鍵を取り出し投げ飛ばした。

「で、なんでそいつソレ欲しかったんだろ」

そいつとは魔王サーガを倒した阿呆です。

魔王は苦笑いをした

「曰く 新世界を造る だと」

えれば、 今まで魔物の居ない世界だったのに今では馴染みつつなることを考 彼は新世界という大きな野望を成し遂げたことになる。 周

りを巻き込んではいるがいい人生だっただろう

「なんでMEに鍵が継承されてんの?」

「さぁ、それは我にも分からん」

「話はソレぐらいにしてさぁ!!」

カナタは叫んだ

「帰ろうぜ!!!」

命かかかってますから

「そうはいかない」

声のするほうを見るとアホブラザーズ

「借りは返してやる」

忌々しそうにそういったメアリ= ハニにサキは武器を構えた

「 コッチのセリフじゃオラ」

やけに好戦的だ。

まぁ死んでから体動かしてないから納得だけど

しかし.....

i」i」i」i」i」

殺気がほとばしりあう

乱戦が予想されますね。

魔王~そうわ問屋が卸さない~

「ぶっころ」

他の二匹もソレに続く。 メアリは短くそれだけ紡ぐと肉きり包丁を構え振りかざしてきた。

魔王は「待て」の言葉を発さないところを見るに

やる気かこりゅらぁ!」

あ、噛んだ

どっごぉおおおおおおおおん

魔力。 くが、 物理。自身の衝突の衝撃で城の中がめちゃくちゃになってい 魔王の城だからいいや。

「みつこ」

カナタがみつこの肩に手を置いた。

「ん?」

[・]範囲指定できるんだろう」

魔法?できるよだってみったんだから~睨むなヨウ」

顔が若干青白いカナタは帰りたくて仕方ないらしい。 七日たったら死ぬもんね

範囲指定で仲間のみ結界張ってくれ強い奴」

いいけど?なにすんの?」

カナタはめったに笑わないが事のときだけ笑った。

・・・・・・末期症状?

「帰ったら誕生会するぞ」

「え?死亡フラグ?」

な、みつこ」

「え?まさかのMEに死亡フラグ?」

ロアを呼んで杖.....武器化した。

「結界!!」

技名がちょくちょく変わるって?めんどくさいのよ

仲間のみ結界が張られる。

とたんにカナタは口笛を吹いた。

「じつわ策略ありませんでしたって落ち?」

違うわ!あ、邪魔すんな!」

もう一度口笛を吹く。

「お?」

ヤスコが手を光らせるとトライアングルを取り出した。

体が勝手に?」

カナタがやっているようだ。

アポロないのにそんなこともできるのか......同属だから」

目で否定してくる。

ヤスコの左手が大きく持ち上がった。

彼女の真の武器 一掃の音色.....叩く力が強ければ強いほど破壊力

を増す.....そう、 核兵器なんて目じゃないぜ!!!

ち・り ん!!!

視界が白くなり逆に音すら聞こえなくなった。

やはり持つ人が持つものはすごいな.....。

誰かが呼んでいる気がする。 だれや?

なんか言っている気がするけど聞こえない。

..... クソボケ!」

誰かに体をつかまれ強く引き寄せられた。 しかし.....悪口は聞こえたぞごりゅらぁ

あ また噛んだ

視界が晴れないな...っ たらしい。 ロアがMEの肌引っかく感覚で思い出したよ。 ておもっ てたらどうやら自分が目を閉じてい

「みつこ!」

っ た。 リィシャ が感極まってみつこに抱きついた後サキがみつこの頭を殴

周りを見るにどうやらもとの世界に戻ってきたらしい。

「れ?カナタは?」

頭を擦りながらみつこは周りを見渡した。 いないぞ

ここに戻ったとたん、 巣にかえっていったでぇ?」

カナタの変わりにパンダ・ハムスターがいた.....何故? ヤスコはバー カナタの店を指さしながら簡潔に説明した。

いつもの如くカードを出した

『馬鹿たれ』

「ロア」

「がるるる」

鼠が焦ってちゅちゅう!と叫んだ。 待て早まるな!ってとこかな

仲間範囲スルのはいいけど、 自分にかけるの忘れる魔術師がいる

・・・・・・そういえば、

それでなんか末期症状を感じたのか、 痛みの感覚はある一定の痛さを越えるとお前の場合無効となる』 でもいたくなかったぞ」

つまり?

うわ死っっぬ~とかいう痛さは感覚なくなると?じゃ されたのたいしたことなかったから痛かったんだ? あカナタに刺

わ~良く生きてたなME.....こんどから遺言書かいとこうかな?

「クソバカか」

匠だった。 逝っちゃう前に聞いた声がした、 顔を上げると今だ結婚できずの師

7 アポロが私救出を依頼したらしい。 高価額でな』

こいつも立派な金ゴンだよとみつこは思いつつ師匠を見上げた。 かなりご立腹の様子だ。

「お前みたいな阿呆弟子.....勘当だ」

「え?感動?いやぁ」

「絶・縁・だ!!!」

ふん!とマントを翻して去っていった。

「.....MEがなにしたよ」

さぁ?と頼りない仲間たちは首をかしげた。

「それよりみつこ」

ん?

サキは信じられんという顔をした

だってよ」 「俺ら『一年ハンター業禁止自主練習ボランティア金儲け全て禁止』

「なんで!?」

バー・カナタの家の扉を叩く。

あんにゃろう、 このために家に引きこもったな・

とオメーラやスマネえだろ』 『極限に体を使い果たしているだろう。 休息を禁止に置き換えない

この鼠 長文は苦手らしい。

一日30時間なにするの?!」

『寝れば?』

三人で家の扉を叩く

『そうそう、 みんなお前等のこと心配して痛んだkら』

鼠だんだんきつそうだ。もう一匹のねずみがきた。

かもよ?報酬』 5 みんなに挨拶して来いよ。 王様んところも忘れずな。 一応くれる

よっしゃいこ!!!

ちょっと休憩 番外編

したいと思います司会のカナタです」 みつこたちが謹慎くらっている間に、 度この世界について説明

カナタが鼠三匹引き連れてあらわれた。

とも本編は進むしな」 「今更いらねーよ、って言う人は飛ばしてくれてもイーよ読まなく

間違えられるトゥディです」 「一人じゃきついというカナタのお願いでうちも来ました。 名前を

こまさかの座布団? カナタのいつも座るカウンター 内の隣にトゥディは座った、 Ż, こ

「黙れ余計な思念いれるな」

「.....えー、まず季節について」

ハル 死期です。 夏 秋 冬 四 季 です。 四季の中に四季があります。 別名

どうゆうことかというと、カオス」

きない年があると考えてください。 説明してないじゃん、つまりですね~ 活動すると」 えーと、 一年は活動で

「死ぬ」

はいカナタセリフ奪わない~」

カナタが出した髑髏茶をトゥディは謹んでお断りした、 飲み方間違

えると死ぬお茶なんて間違っても飲みたくはない。

ハイ次ぎ」

早いね」

次の記事を取り出す。 このボードどこから出してるんだろう。

しいな。 この世界の時間、 なにができるのやら」 一日30時間です。どこかの世界は24時間ら

「そうですね~。 まぁ、 30時間も何するんだって話だけどね~」

カナタに横からバッテンシー ルを張られた。 のかない

五つたまったら死ぬと思え」

え〜カナタちゃんこわい〜」

前回ちょこっと触れたけど もう一度シールを張られそうなので次いきましょう。 年齢について。

結婚できる年齢は14歳 適年齢 2 0 歳 25歳くると法律上結

婚不可能になります。

しかし金持ちは結婚できる。

ルな」 ついでに言っちゃえばこの世界 金がものをいう世界です リア

ビバ ちなみに愛人制度アリ。 何人とも結婚できる 金があれば。

どこかの世界では税金というものがあるらしいな」

「ないね~この世界」

· 楽だ」

いつでもバブル時期

「ちなみにこの世界で帽子をかぶっ ているのは金持ちぐらいだ」

使い勝手ないから高いんだよね」

カナタは沢山持ってます。 金持ち 情報がものをいう世界

「ミスター・クレアの羊のお面のが金凄いけどな」

「誰も頼まないからね」

あの下は、.....美形だ」

さて次ですが~

「ねたが切れてきましたね」

「馬鹿者、まだあるぞ」

「まだあるの?」

疲れたというトゥディ にカナタは黙っ てバッテンシー ルを貼った。

「時間の流れだ。」

「説明したじゃん」

「ソレとは違う」

ばいい。 10歳までは普通に育つが、 10歳くると足す10してくれれ

「いきなりやね」

「一日30時間だから」

「それじゃあ解決できないような」

黙れ」

ぺち

バッテンシールを張られる。 三枚目だ

そして30歳くると2かけてくれればいい。 みにこの世界では60歳くると一気に老ける。 つまり60歳だ。 ちな

「意味が分からないと思うよ」

えただけだ。 どっかの世界に合わせた年齢らしい。ようするに動物の年齢を人間 の年齢に合わせたようなものを、この世界とどっかの世界に言い換 「む、うーん、正直自分もよく分からない。 つまり計算した年齢が

「自分たちの年齢を動物に例えて、悲しくない?」

「別に?」

ようするに、カオス。

その言葉が一番だ。

ものはしょうがない。 しかし世の道理は必ずしも矛盾を生じるが.....できてしまっている

混乱はあるだろうが、 理解できなくとも物語りを楽しんでくれれ

ばいいさ」

「それでいいのかカナタちゃん」

「私が言いといえばいいのだよ、さてと」

カナタは座布団から立ち上がった。 窓の外を見る。

「おうおう、 『どゆことー?!』って叫んでるな」

「誰が?」

「みつこら」

上がれず倒れた。 トゥディも見ようとしたが、ずっと正座していたためしびれて起き

「いやいや、殺さんといて?」「死す」

久振りに家に帰ったが……家はえ~どぉ

「さて、寝るかな。鼠共(後は任せた」

「ちゅう!!」

「また会いましょう」

冬~すなわちぎりぎり~

間に合ってよかった。 みつこは最近やっと建てたばかりの新築の家を見た。

だわったかいがあった。 純白を基本としたベランダや窓の大きい家だ。 うん、 お金かけてこ

前回お金を使いすぎたがお城からお金報酬を貰ったからプラスマイ ナスゼロ、むしろプラス。

ッキーみたいな? 学園はもう卒業.....いつのまにか、 頑張った、 自分めっちゃ頑張った。 だが行きたくなかったしまぁラ 称号だって勇者だし

この勢いなら王国も金で買えるんじゃない?ってぐらいの金持ちだ !王国なんて要らないけど

「ロア〜どうした?」

最近ロアは反抗期というか拗ねてることが多い。

「うっとしー ・なぁ、 あんまり拗ねてるとロアの部屋に閉じ込めるよ

あ!そっか せっかくロア専用の部屋用意したのに元気ないなぁもう

「クエストできないからか?分かる分かる~」

ロアがしくしくと泣き始めた。 なんだよぅ

「サキと同レベルだよ」

としかいわなかった。

-?

ピルルピピルルル

電話が鳴った。 みつこは2コールしてから受話器を取った。

はいもしもし?あぁ、サキ?なんか用?」

え?

あぁぁ~はいはい、 明日そういえばMEの誕生日でしたな」

中で回想しながら鼻で笑った。 カナタに死亡フラグ振られて本当に死に掛けたなぁとみつこは頭の

7 でさぁ、 豪快にしねえ?ホー ル貸し切ってさぁ』

その金は誰が出すのかねサキよ

カナタならそれぐらいの知り合いいるだろうし』

あぁ ター ゲッ トはかなたか、 自分じゃないからいいけど

「何を?」『それでさぁ、カナタについでに頼もうぜ』

サキがハァ?という声を上げた。 分かるかYO!

じゃん?』 気だろう?余裕こいてたら本気危ないし、 独身の男だよ、 呼んでもらうんだって、 それに冬終わったら死期 俺らそろそろ結婚適年齢

確かに

そうそう、ってことで任せた』 つまり、 備えあれば憂い無しと」

まかせるんかー

相変わらずだなと思いつつ、 みつこは受話器を元にあった場所に戻

サキは阿呆だ

あいつ自身結婚できていませんから? カナタに紹介してもらうっつても?

あんまり期待できないと思う。

あいつは確かいざとなったら『独身送公会』 てたな。 そんな奴に期待できるサキは大物だ。 に参加するとまで行っ

かしまぁ確かに

か? 18歳かぁ、 あと二歳. で二十歳 う hį 由々しき事態、 なの

設置するのであった。 とりあえずみつこはカナタに連絡すべく鼠確保のためネズミ捕りを

捕獲したほうが話しつけやすいことをみつこはもう学習していた。 この会話聞いてんだろうし、 聞いてたら留守電話にするからネズミ

つーん、クエスト無いって暇だなぁ

誕生日が来た。

12月2日

の世界適当だからいいやぁ いえ~い、 なんか記憶じゃ あ自分夏生まれだった気がするけど、

燈籠の明かりが暗闇を照らし月をよりいっそう豪華にそして美しく言うなれば公園ぐらいの広い庭園での誕生日パーティーだ。 彩っていた。のはいいけど.....

「何故夜。何故夜」

重要なので二回いいました。

. しょうがないよ重役は忙しいんだよみったん」

「お前の服は喪服か?」

耳に涙の形をしたトパー ズのイヤー ルク使用のTHEシンプル・ブラッ 誕生日なのに真っ黒のカー ディガンを肩にかけたこれまた黒色のシ クのダレス着用だった。 カフスのみだった。 装飾は

「目立ちたくなかったのさ」

だろうな、 闇に溶け込みすぎてカナタの姿認識できないぞ」

怖いし 僅かに光るトパーズの赤い光ぐらいしか....

「みつこも意外とシンプルだな」

「意外ってなんね」

チョー 洒落にしている。 滑らかなリボンをたらし、 白色のロングドレスに青い薔薇を腰に一輪咲かせそこから長く軽い カーで手首は手袋をつけている。 装飾はイヤリングにハンターらしくきちっとした 邪魔にならない程度に腰に巻きつけてお

お金かかっているように見せかけて、 全てゼロ円

「コレ全てみったんが錬金合成で造ったのよ」

・魔術師が魔女に近づいたな」

みつこは肩に乗っているロアの咽喉を撫でた。

「 噛んでよぉ~」

ところでみつこの言われ通り、そろえたぞ」

「死、ん?何を?」

机 今噛んでよしの の上のケー キをつまみながらみつこはカナタの頭の上を見た L がおかしくなかった?

は ? おや、 アポロいたの?ん?なになに?? 『男捜しといたぜ』

さえあればなんでも許される世の中だけどさって冷ややかな目を向 けていたら「 何言ってんだこの溝鼠とうとう女に飽きて男色へ走ったか?まぁ金 ちがうちがう」 と否定した

男集めておけというたのはお前だろう。 わかってんじゃ 正しくはサキだけど」

しかし....

こんな暗闇じゃ そのまさかよ、 これぞまさに細工されたフィールドよぉ!」 あわかんねぇじゃん.....は!まさか」

ざるえない。 も闇のせいで自然とぶつかってしまえばいやいやながらも会話をせ この暗さなら自分から話しかけるの恥ずかしい、 っておもっていて

ダメージを」 「その上女性はヒー ルを履いている!踏まれた男はさぞや致命的な

「いじめか」

結局こういう女だよな くしかなくなるんだよ カナタ。 だからいざとなったら独身送公行

手を振った。 しかしカナタは、 ココまで来ても髑髏茶を飲みながら誤解するなと

「**~**、、 ケーションとっていたら中が深まるという寸法さ」 怪我をさしたらさすがに放置できないだろう?そうしてコミュニ で?カナタは足ふんずけたらどうする」

割る」

「だけ?」

「だけ」

私もだ。 つまり私には全く無意味な戦法というわけか。

正しくは一年」 そういえば、 師匠後二年だったな結婚できなくなる年齢まで」

もっといえば後半年もすれば死期だから行動不可能」

すなわち

ぶふふ~! !行き遅れけって~

みつこ結婚してやれば?」

やーだよ。 だって縁切られたんだもん」

しかもつい昨日

でもきっちり今日はきているんだな。 カナタの誕生日に来た、

いはっていたが。

まぁ私は私の分プレゼント (金) もらえればいいさ

心配したんだよ」

師匠が?」

ば いつの間にかカナタの声が遠くなったと思ったら、 コイツと双子だったっけ? となりに並んで座るとどこか懐かしい感じがした。 石の段に座って そういえ

手を繋いで行きましょう。 鏡を見ましょうくぐもった鏡を、 離れず一緒、 顔の似てない二人笑いあう」 二人で冒険」

ふと昔思い出したフレーズを口にするとカナタが続きを紡いだ。

コレって何?」

言葉遊び」

なんじゃそら」

まぁ、 深い意味は無い遊び」

しょせんこどもだもんね」

今はもう大人だ。

私達はすっかり、 同じものを見つめることは出来ない。 大人になってしまった。 もう道は別れた。 もう同じ道を歩けない。

わたしはもうそれでいい

カナタ」

みつこがカナタの顔を覗き込んだ。 お茶が冷めて髑髏がすっかり去

っていた。

いし才能もあるしセンスもある。 みつこ、ハズキさんはな心配してたんだよ。 でも』 『みつこは確かに強

?

なんとかしようとする。」 「『その自信がいずれ身を危うくするだろう、 誰にも頼らず自分で

「だってできちゃうんだもん」

やれやれ、 強いからいつも大怪我負うというのに..... 自信過剰っとかなたは言いそうになったのを口を押さえた。 サキといいみつこといい..... なまじい強いし自己主張が

「まぁ、 あげようかな」 そこまで師匠MEのこと考えてくれるんならMEも考えて

「ほう」

師匠発見~ しっしょー

とかいいながら殺気を沈め気配を消しながら行くのはどうかと思う

やれやれ こよ

よって美しく舞い上がった 今日は満月だ。 秋の木々の残りの鮮やかな紅葉だった枯葉が、 風に

...... はっくしゅん!!!」

冬~季節はずれの花~

しっしょぉおおおおおおおお

だと思うものにみつこはアタックした。 師匠と思われる人物はもろ攻撃を喰らい転がっていった。

、み、みつこさん?」

あ~えっと、キサラギさんおひさしぶりっすアレ師匠は?」

先ほど転がっていきましたよ」

指差した方向を追っていく。 たく~そこにいろよな~

あ、いたいた~師匠」

そんなに強くしてないけど 結構クリティカルヒットしたらしく口から血を吐いていた。

うう、 ちゃうちゃう」 師弟関係の縁を切ったからって殺そうというのか.....」

横に転がったままの師匠の上に乗る。 から目線 意味は無いけど上に乗る。 上

師匠、もう結婚できないね」

うぐ!?……金はあるから結婚できる!相手か居れば」

知ってるよ~女の人に逃げられてるってこと」

師匠はイケメンだし金も持ってるし、 ようであった。 オーラがただならぬものであり、 トナーを連れずにハンターをしてきた故にかその自身から溢れる 女子どもには好かれないオーラの 意外と紳士な所があるが、

宿屋紹介します!!』 せっ かく助けた女性にも『ありがとうございました!お礼にいい だもんねぇ」

「何故知ってる.....」

ネズミかな~」

にたにたすると師匠はふてくされた顔をした。 何だそんな顔も出来

たの

暗闇で見えないと思っているのか、 いつもよりその表情は素直だ。

者は無く生涯の伴侶もいない、 「どうせ、 オレはパートナーをもてない運命なんだ。 独り身だ!!」 武器にも適合

拗ねた顔してそっぽ向いた。 大の大人がなぁ~ に言ってんの?

仕方ないなぁ **〜師匠」**

ぽんぽん、 と頭を叩く。

結婚してあげるよ。 M E が

師匠が驚いた顔をした。 そりゃそうだ 師匠とは結婚したくないっ

て言い張ってたもん

何を言われたか分かってい ない顔をした。

貰っ てあげるよ」

「あぁ.....って違うだろう!?俺がもらうんだろう?!」 どっちでもいいじゃん、 細かい男」

「どっちでもよくない」

込めたまま小さく溜息ついた。 喧嘩始めた二人を眺めるカナタはワイングラスの中にアポロを閉じ

「...... みんなで独身送公会いけばいいのに」

アポロが首振った気がした。

冬~下拵え~

ええええええええええええええええええええれ ええええええええええええええええええええええええええええええ 「 えぇ えええええええええええええええええええええええええええ

三人は大声で叫んだ。

それもそのはず、 いきなりみつこの結婚発表.....しかも今からハネ

「だって早くしなきゃ、 死期になるんだもん。 いやだよ先延ばしと

みつこらしいといえばそうだ。

「帰ってくるのは春始めだから」

髑髏茶を飲みながらカナタはちらっとみつこをみた。 手を振りながらカナタの店を出ていた。

. では、私も忙しいから」

出て行けと、目が訴えている。

「なにするん?」

海里に乗ったヤスコが聞くとかなたはお茶を置いた。

「新・ハンター協会.....NHA」

「んは?」

リィシャよ勝手にネズミのカンペ見て間違えるなNHAだ」

サキが天井を見ながらカナタのほうに声をかけた。

つまり、 もう一度ハンター協会復活ってやつか。 会長誰だ?」

三人がもう一度叫んだ。 カナタがお茶をもう一度注ぎながらあっさりそういった。

· そこでなんだけど」

カナタはヤスコとリィシャのほうを向いた。

お前等勇者一族長だろう?ココにサインしろ」

した。 紙を取り出した。二人は特に反対する必要も無いのであっさり署名

サキは紙を見ながら汗を流した。

「ちゃ 止します』 んと呼んだ?コレ『もし協会がつぶれるときは一族制度を廃 って書いてるぞ?」

「え?」

タの動きには付いて行けず、 マジで?と二人は言い出しもう一度紙を見ようとしたが素早いカナ 目を通すことはできなかった。

くくく......さぁでていけ私は忙しい」

が珍しいので暇な三人はカナタについていくことにした。 店を閉店してカナタはどこかへ出て行く。 かなたが外に出ているの

「それにしても、似合わんな青空が」

わしのことか」

そんな会話もそこそこにある場所にたどり着いた。

「……やすぃんや新屋店?」

「新屋居るかい?」

透明なガラス製だったらしい なじみのような動作で入っていく。 が、 ごん、 扉に頭を打った。 扉

「.....畜生。新屋」

「なぁに?カナタやン」

なんか細い四本足が見えるしかも黄色い

「コレは?」

· うちの子キリンよ、うえのほうにおるんよ首」

見えない

「どうでもいい」

カナタの指をつかんで印鑑をおした。 カナタは本当にドウでも良さそうに言いのけた後

キャ あ あああああああああああり。なにしてんお?!」

お前販売課長な、くくくく.....次ぎ

つぎついた場所、 スタスタスタと詳しいことは言わず去っていった。 城

「ランジェ姫いいかな?コレにサインしてね」「おねぇさまぁああああああああま!!」

あっさり印させた。

「よう!いるかい」

ばぁあああん!と扉を勢い良く開いた。

· つぅるでぇい」

誰?!」

させた。 トゥディ の元に来た後新屋のときにしたように指をつかんで判子押

一貴様は医療機関担当」

それだけ言うと歩いていった。

ねえねえ、 うち、 また勝手に決められてる?」

諦めな」

三人が頷いた。

カナタはちゃくちゃくとことを進めていくのであった。

冬真っ 只中

街中にヨッシィー・ミンの大声が響く。

今日は記念すべき日 NHA の創立日なのだ。 んから下っ端ハンター まで全員参加。 アナウンサーのヨッシィー もちろんお偉いさ

ミンはその報道をいち早く国民に知らせる。

カナタの代わりにミスター・クレアが台の上に立つ。

くなったときは犯罪者を狩るということなのでぇ..... あしからず」 「え~今回のぉハンター協会は全くリニューアルされた組合であ 方針は世のため人のためをモットーとし、モンスターがいな ij

それだけいうと頭を下げた。

あいからわず立派な面やな」

そうか?」

ヤスコがそういうとサキは変な顔をした。

アレがハンター界の英雄だったものというのが納得できない。 したくない

どうも、 会長カナタです」

あとは、 カナタは台に立っていっ もうリターン。 た言葉がそれだけだった。

それだけかい

そういえば、もうそろそろ帰ってくるな」

「なにが?」

· みつこ」

そのころみつこ

師匠~結局あたしたちってこうなりますよね~」

せっかく行ったハネムーン先では高レベルダンジョンがあったので そこについ突っ込んでいってしまった。 これも悲しきハンターの性。

「戻ってきたとき死期過ぎていたな」

時間差が分からない謎のダンジョンにまで達してしまったらしい。

時間がずれている。

いると 休憩がてらに入った宿で二人混浴の温泉に入りながらボ~っとして

『ニュー スでえっす~~~~!!!!

というヨッシィー・ミンの声が聞こえた。

「びびび、びっくりした~」

「なんだ、ニュースか」

ぼ~っとしながらそれを見ていると、 を創立したことにした、 ということが流れていた。 カナタが新しくハンター 協会

へ〜カナタやるね〜」

「新登録しなきゃいけないのか.....めんどくさいな」

たまに現れるモンスターを空気と同じレベルで倒していく。

「そういえば、来年は寅年だな」

「確かに」

演技のいいロアを見ながら二人はいった。

ロアは思った

タイガー なんですけど?

細かいことは気にしない、 それがハンタークオリティー.....らしい

>i3318 | 339 <

冬~そのころ~(後書き)

また次の章で皆さんが書いてくださった絵を貼らせていただきます キノ様の絵をはらせていただきました。

冬~予言か神託か~

季節は死期を迎えた。

ごく普通の人々は家の中に閉じこもり、 きないハンターの人々も里帰りするか自分の家でのんびりするしか なかった。 この季節ばかりはじっとで

しかし、例外も居る。

「ようは外に出なければいい季節」

外の風が毒なんだから

みつこたち、 聞けば上級者ダンジョンにいるそうな」

「ちゅう」

アポロがおめかししながら鏡を見つめてにやけていた。 しろからお椀を取り出してアポロを捕獲した。 カナタはう

万年繁殖期か?忙しいなぁアポロ..... 外出禁止」

· ちゅちゅう!?」

そんな世界の終りみたいな声出さなくても、 今は本当に一人。 いつも仕事で誰かしら尋ねてくるから何気ー あぁ 人じゃなかったけど。 それにしても暇だ。

っ ひ

「だっだいまぁ~マイ・リトル・ガール!

あほが帰ってきた。

せっ まぁ見たところでギロチン社とバンビ社に勝てるとも思ってないけ かく今からロード社アイテムの売り上げを見ようと思ったのに、

「ミスター・ クレアか」

寂しいですねぇ、 昔はあんなに養父さまと呼んでくださったのに」

そんな覚えは微塵もございませんがね」

であった当初に「羊野郎」って言ったのは覚えているが。

阿呆だから死期に外に出てはいけない法律破ったんですか?それ

「違いますよ、瞬間移動装置は私の十八番、で死んでないなんて、まさしくアホ」 何処でも移動できます」

カナタはミスター クレアが現れたところを見た。 虹色の魔法陣が

描かれていた。

描かれたら書いた本人の意思じゃないと消えない魔法陣

の城に.... 0

…うざい

寂しかったでしょう?私のむす

ᆫ

うざい!」

うになってヒヤッとした。 本を投げつけたらクリティ カルヒットした。 いっ しゅ ん羊が取れそ

痛いですよ、 過激なスキンシップは好きじゃないですねぇ」

「......一生羊の面被ってろ。ほんとに」

アレがのいた時にはもう手がおえない

さびしいだろうと思って、お土産を持ってきました。

「あ?」

「コレです!!」

ジャじゃーン、と出されたもの、ソレハ

· みつこプロマイドです」

「死ね!!」

この変態野朗

果てしなく幻滅だよ!」

でも、好きでしょう?みつこ、それにホラ虎も.....縁起良い」

あーほんと~、って言うとでも思ったか!!」

そもそも虎じゃ なくてホワイトタイガーだっつの、 あ、 いや虎か..

.. いやいやまぁいいけど

兎に角

アンタ金あるんだから結婚できるでしょうが」 こんなもの買うぐらいなら、さっさと結婚しろよ、 30過ぎても

誰がこの身に嫁ぐとでも!?」

[・]分かってるなら直せ!!!」

れまた綺麗に決まった。 ひれ伏していたミスター クレアノ頭にかかと落としをすれば、 こ

しかし、何処でこんなもの

「週刊誌です。ほら」

週刊誌。 一般から王族魔物までも記事にする大変人気のある

雑誌だ

一枚めくれば

『ハンター賞金女王みつこが結婚!!お相手はハンター 無敵のパートナー無しが伴侶というパートナーゲット!』 戦士のハ

と大きく出ている。

ハズキ可哀想なことかかれてる。 事実だけど。

「 ん?

П 王様病で倒れる! ?次の王様はランジェ姫か?』

.....王様倒れる。

「.....!?」

真の武器の本が勝手に開いた。

トキハチカイ ジャアクナモノト ソレヲムカエルノハ モンスター ガマジワルトキ オトメナリ シュ

「終焉を迎えるのは.....オトメ」

浮かび上がった文字を見ることが出来るのはほんの保持者である、 かなたのみ。 ミスター・クレアは能天気な声で「どうしましたか?」といった。 それ以前に

とき......ランジェが危ない」 邪悪なもの、王が変わるとき、 時代も変わる.....王が死んだ

なんだ?胸騒ぎがする.....

「ランジェ姫がどうしました?」

意識を奪われる

誰だ?

何 ? ?

ヤミだ

「カナタ!?」

突如倒れたかなたの体を支える。 白色だった本が... .. 黒に変わって

い た。

「 カナタ!!」

! ?

オトメ、 集めなきゃ.....八人の.....闇が、 近い

カナタは天井に向けていた手を力なく落とした。

「どうしました!?カナタ!」

· うるさい!」

カナタは起き上がるとミスター ・クレアを付き飛ばした。

「闇とか、オトメとか。なんですか?」

...... は?オトメ?そんなにオトメに飢えてるんなら吉原にでも逝

け

「え?」

まさか記憶ない?

わたし、 調べることができました、 かなたは休んでいてくだ

さい

「そりゃ休むよ?やることないもん」

カナタの頭をなででワープまで歩いていく。

預言者というより、 神託だったのかもしれない.. .. ならば、

世界は終焉を迎えるかもしれない。

「はい、久振りです。カナタです。」

今回も番外編、そして司会は私です。

嫌ですか?なら今回もはたまた本編と関係ないので飛ばしてくれて

結構。

よね」 「とかいいつつ、 拗ねてるよね。 よんでもらえなかったら拗ねてる

「黙れやすいんや新屋」

鬼の首でも取ったように笑いやがって。

一人でも読んでくださる方がいれば、 この小説は永続ナリ

· しぶといよね」

「シブトイゆうな!!」

ダメだ、 コイツとはインスピレーションが合わない。

「なぁなぁ」

しかも司会の私を無視して話を勧めようとしやがる。

何でカナタだけ小さいコロ連れて行かれたん?」

しかも痛いところに一直線に抉ってくるか?

「しらない」

「え?生贄?」

「貴様を最初の生贄にするぞ」

「え?なんの?」

「暗黒時代」

置作ってんじゃないよ。 うけど、それでやってきた人には黙っといてやるヵ。 それにしても、羊男め はい、今日も外は荒れていますね。 ・女を方々で作るならまだしも方々に移動装 瞬間移動装置だって危険だと思

暇人集まるじゃない。 こいつとか

「あ、これロード社の集計?.....すくな」

五月蝿い見るな訴えるぞ商品送って」

最後本音来た?!だってロード社ぼったくりだからダメなんよ」

貴様に説教されるために開始したのではないわぁあああああああ

ああ!!!」

集計を奪い取る。

はっきり言おう。貴様ら一族は苦手だと!-

なんちゅう自己主張無いくせに相手のリズムを狂わせる悪魔め

!

悪魔じゃないよ !なによ!!ネズミの王様!」

あんだこら!やんのか!ペスト菌振りまくぞ!

「え?地味に嫌!やめて!!

•

```
?
                                                                                                                 「え?」
「 カナタ..... ドウ控えめに行っても、
                                                                            「あ~しゃあないよ、分かったの最近じゃぁ素直に言えばよかった
                                                                                               向こうがコッチのこともはや他人なのさ」
                                                                                                                                     何が悲しいってさ」
                                     向こうのほうが身長大きいのに『姉です』っていえるか!!
 小さいからね」
```

本をワザと新屋の上に落とす。

```
ま』って言われた日には.....悲しいっつうか虚しい」
「言われたいの?お姉さま」
                                                                              「あぁぁああああ!!」
                                                   まぁ、もうそれでもいいかなって思うけど、ランジェに『お姉さ
```

「もう本はやめて」

素直になれば?」

こいつ、

髑髏茶じゃ なくてマックス毒のましたろか

言うと思った~ハイダメ~、 一緒に『独身送公会』いこ」 うちもう帰るな」

「一生独身」

とるけん!」 「一生とか言わんといてくれる!?ちゃんと郷からお見合いの話来

見出し 怒って帰っていった新屋が置いていった雑誌は昔の週刊雑誌だった。

『有名人じつわ双子、双子で会長倒す!』

「かなり前ジャン!?」

さらに隠し撮りまでされていた。

> i33319 | 339

今度訴えよう。

新期~新たなストー IJ

外に出てもいい合図だ。 春を告げる鐘が町だけでなく国ごと世界中に鳴り響く。

きたらしいしな」 やれやれ、 心機一転早速仕事しますか新ハンター協会ももう、 で

公表もすみ、 新たなハンター登録者が集う。

おや、 や!みつこ」

どくさいよ」 「ちぃーっすカナタ〜もう一度申請しないと駄目なんだろう?めん

「まぁまぁ、

そういわずに黙って書け」

「うぜぇ」

ハンター 夫婦は登録書を書きながら新しくなった本社に感心してい

た。

短時間でこの仕上がりはいいねぇ、 ハイ紙」

受付嬢初日に遅刻でさ参るね」

かなたは登録を済ませながらそんなたわいも無い話に笑った。

すいません」

まだ寒いだろうこの季節にへそだしルックのどちらかというと美人

愛嬌もある顔だった。 系の少女が入ってきた、 自信に溢れたマユが少々きつくも見えるが

- 登録したいんですけど」
- はいはい、 名は?」
- メイ」
- あの一私もいいですか?」

もう一人の少女がやってきた、 たが笑顔がたえない愛嬌のある少女だった。 第一印象は「明るい」 肩までの髪で少々ボーイッ シュだっ

メグです。

はいよっと、 あ~字めんどう」

なにそれ」

ディダ・みつこ・マイケルクリスチャン..... みたいな」

ほうほう」

みつこはピコンと頭に電球を光らせた

アイ・マイ ・メイとハグ・モグ・メグはどうよ」

酷いだろうそれ」

なんで?」

それでいいや」

「まじか!!??」

カナタは本に書き記しながら左側にある扉を指差した。

あそこで、 トナー取ってきな」

パートナー

武器よな!よっ しゃいこ!!」

「みつこ」

ん?

行けと カナタが二人の行った場所を顎でくいっと意思表示した。

「がら」(はいよ~いってやりますか、いこロア」「じゃあ俺はいったん帰っておく」

ト先は過去にも来たことある懐かしいかなり広い亜空間ワ

ールド。

テレポー

そこには沢山の獣がわんさかといる

゙あれ?あの譲ちゃんズどこに.....」

誰あんた」

けにミニサイズのパンダだ。 後ろ振り向くとメイがいた。 腕にはすでにパンダがついていた。 ゃ

「早いね見つけるの」

「こいつのかないんだけど」

がこのパンダの特性らしかった、 ってはがそうとしていた。 メイがのけようとするが、ビクともしていなかった。 しかし彼女は知る良しもなく頑張 怪力。 それ

まぁまぁいいじゃ hį あんまやると骨折れるよ?」

...._

素直らしく、すぐにぱっとやめた

「あの」

を案内役とまちがえてない?いいけどさぁ メグちゃんは金色の糸目の狐を持って現れた。 う hį この子ら私

「うん、いいとおもうよ?で、名前は?」「この子でもいいですか?」

大事だよね名前二人は「うーん」と唸った。

シンクロ率上がれば人間になるしね!

「メグはこの子『金太郎』にする」「じゃあこいつ、『隆隆』にする」

受付に戻ってくると暇そうなカナタがいた人間になったとき楽しみだ金太郎.....ぷぷ

「はやいな、で、ものは相談なんだけどさ」「おう、パートナー連れてきたよ」

カナタは目の前に小切手をちらつかした

何かの縁っていうの?」 「そのこらハンター経験ゼロらしんだ、 で、 我流もいいけどコレも

嫌な予感がする」

· その子らの師匠になってよ」

「師匠!?」

しなぁ てもらうほうが知識も経験もふえるしねぇ、 二人とも嬉しそうに目を輝かせた。 まぁたしかに我流するより教え 自分も師匠にならった

めんどい」

「二枚でどうだ」

しょうがないなぁ、 MEとカナタの仲だもんね~

「ちなみに補助金も渡すから」

ビバ師匠

君らよろしく~、師匠のみつこでっす」

「宜しくお願いします!」」

こうしてみつこは師匠になった

あ~、時の流れを感じるねえ

「 師_{みこ} 匠こ

この弟子反抗期だよ。 メグちゃんは可愛いのにこの子ツンだよ

「おーい、阿呆~?」

「まぁいいけどさ、なんね」

メニュウー 表を目の前に広げてきた。

「レストラン仲村って、お勧め何?」

そう、今は弟子祝いに驕ってやってるんだっけ?

「チャーハン」「メグちゃんは?」「じゃあそれで」

'嫌なら変えればいいやん」'え?みんなでチャーハン?」

·え?MEが変えちゃうの?」

仲村が来たのでみつこは注文を言う。

?焼飯』をお願い」 **-ハン パートナー用の林檎と稲荷と肉とぉ.. 『めちゃでか!

にい

嬉しそうに、そして死にそうな顔で仕事に励む仲村 その様子を無言で見つめる二人

「何ものめずらそうにしてんの?」

みつこが聞くと

「え、だってここ」

レストラン仲村

「高級店ジャン」

実はそうでした。

MEはココの常連さんだから予約しなくてもいいのだぁ」

なっはっはと笑う。

ハンターって特やな」

いやコレは只の人望だよ、 さて料理きたし食べようか。 コレ食べ

たらバンク登録しに行くよ」

「バンク?」

. 異次元鞄。 知ってる?ハンター 皆持ってる奴」

「それで丸腰に見えてもごっついものどっからも無く出すことがで

きるのか~」

「そうそうメイさんは物知りだねぇ」

褒めると頬を染めて嬉しそうに笑った後、 当たり前だし!とそっぽ

を向いた。

かぁー いねぇ~ 性格がもっと素直だったらよかったのに

お待ちドウ」

「師匠~」

二人がみつこに声をかけた

「ん?」

「阿呆ですか?」

どのぐらいかというと、 『めちゃでか!?焼飯』 天井に届きそうなぐらい。 は本当に大きかった。

いやいやいや、食えんて~!?」

「 あ

みつこが思い出したように言った。

「結婚式の日にコレ仲村に注文したけど、 食べ切れなかったなぁ」

「あほか!!」

がっしゃぁああああああん後始末、パートなの皆頑張ってくれたね!

! ?]

悲鳴が上がる

何こいつら」

ている。 それにやけに鋭い骨ばった翼も持っている。武器だって槍を持参し 見たこともない真っ黒の色なのに人間の上半身のようにも見えるし、

こんなモンスター..... 初めてだ

「なに、こいつら」

町の外からでも悲鳴が上がった

「! ?」

外にも何匹も似たような敵が居た

「師匠!」

「って」

もごもぐもぐもぐもぐも

「くってる場合か」

化! 「お腹すいてたんだもん!もったいないでしょ!よっしゃロア武器

せい可愛

杖を召還

「『電気飛鳥』!」

放電しながら電気出てきた鳥が敵に突っ込んだが、

ばしゅう

槍で一掃された

『にゆーーーーーーーーすです!!』

めた 空気読めない人気アナウンサー、 ヨッシー ・ミンが今日も放送を始

あああああああありきタァアアアアアアアア の非難を優先してください! 『マイクおいて!逃げるよ』 『全国各地に変なモンスター コレは王様の勅命で.....きゃああああ っぽいの出現!ハンター の皆様は国民

とマイクが放置された音のみ響いた。

ががーぴー

「まいったね」

だって、 こいつらMEの攻撃きかないんだよ?絶対他もダメだって

「 結界包囲」

敵を結界の中に閉じ込める

「『圧縮』

結界を一気に縮め、 見えない箱に閉じ込めようとしたが

ぱりぃん

攻撃のきかない相手は嫌いよ~

「.....よし、逃げよ!!!」

468

新たなストーリー~見習~

「えぇえええええええええええええええええええええええええええん

長い悲鳴のような驚きのような失望のような声をあげたメイはみつ この首をひっぱった

「ぐえ!?」

「闘わないの!?」

「っつってもさぁ」

魔法効かないんだもん

「私肉体派じゃないもん」

「じゃぁメグが行く~!」

メグちゃんが金太郎を持ち上げた

「どうやって『武器化』するの?」

武器化に反応して金太郎の姿が変わった.....とても大きな.....槌

「おぉ!とんかち!?」

「槌でしょうよ!?」

変なモンスター が町を荒らしまわる

よぉ~いっしょぉおおおおおおおおお!!」

ていく 自分よりも三倍も違う大きな槌を気合で振り回し、 敵をぶっ飛ばし

「え~?」「いやいや飛ばしただけだからね?!」「倒した!」

楽しそうに飛ばしている

メイさんもそれに対抗意識を燃やしたのか、 隆隆の頭を片手で掴んだ

「『武器化』!!」

カッコイイ銃になったじゃっきん!!

「わぁいいな」 「おお?」

メイさんは上機嫌で銃をぶっ放した

きぃんきぃん.....ぱりーん

銃は効かないようだった。

しかもどこかの窓割っちゃったし

「カナタのところいって見るか」

「なんで?」

「アイツにあれらの弱点聞く」

なんとかカナタ邸についた。知ってるかな~?

「弱点は?」

「さぁ」

ロアに踏まれたかなた

「もう一度聞く、弱点は?」

あれが何かすら分からないのに!?皆脅すもんな」

だって、まけっぱなしって性にあわないんだもん。

って嫌だよね?

しかたないなぁ~もう」

「なんか方法あるの?」

カナタが立ち上がった。

゙あるわけないじゃん?アイテム使いなホラ」

何この.....接着剤」

「足止め用」

カナタに接着剤をまきかけた

「ぎゃああああああり?」

「弱点探しとけよ.....ふ」

使えないやつ すたすた歩いていく。

師匠えぐいな」

なぁなぁ、おもったんだけどなぁ?」

メグちゃんがニコニコとみつこに近寄った。

, パ が獣状態のときのほうが、 あれら近寄ってこんこと無

? ۱۱ ?

なんだろなぁ?」

むしろ、

武器化したほうが突進してくるような..... 気もする

カナタ邸

「おい!カナタ包帯かせ!回復アイテムも」

サキじゃん?何事?」

深い怪我を負ったライを抱えて駆け込んできた

オレはどうしたらいい?」 コレは酷いな......手当てしとくからよこせ」

「そこで大人しくしとけ」

それだけ言うとライを連れて別の部屋へ歩いていった。

「.....ん?」

淡い光を放つ本があった。

恐らくカナタの真の武器だろう.....何を書いているのかさっぱりだ。

「これは」

運命の歯車は動き出した.....

それは幸せな宿命ではなく、過酷な運命へと

ゆっくりと、確実に

新たなストーリー~魔王~

「お久しぶりっす~?」

お茶を飲んで休憩していたみつこはお茶を吐いた。

「あぁああああああ!!貧弱魔王!」

'え?!魔王!?やっちゃっていい!?」

ているメイサン ヤル気満々のメイサンをメグちゃんは宥める。 もうすでに武器化し

「えっとだれだっけ?!」

ノーワールド、ですよ覚えてませんよね~」

「うん」

相変わらずスケルトンで見えにくいなぁコイツ 貧弱ってのは覚えてる、 魔王サーガのお友達でしょ?

「最近魔王組合でですね、大変なんですね」

「魔王組合とかあんの?」

なんでもありだね

ええ〜 まぁ?」

· で?なにがたいへんだって?」

そちらと同じようなことが、こちらの世界『冥界』 でもおこって

るのですね」

いえいえ」 そっちからの使途、 とかじゃないんだ?」

ン、あれ?名前なんだっけ? メグちゃんが気を利かせて注いだお茶を遠慮なく飲む魔王スケルト

クシが考えるに、 「そちらの世界に死期があるように、 新たな新種なのだと思うのですね」 こちらもあるのですね。 ワタ

「へ~ところで、 あたしん家来るぐらいだから勝算あるんだろうね

いつの間にか人の家の中で現れてお茶まで飲んでるけどさ

「ええ、一応」

「おぉ!まじで?」

弟子の二人も傍によってきた。 戦いたいお年頃らしい

「そちらに森羅万象を記したような本を持った女性がいらっしゃっ

たでしょう?」

「アァ、カナタね」

「メアリ=ハニが彼女の中に入ったときに、 似たような予言を見た、

といったそうですよ」

「『食肉』だっけ?」

あの時は大変だったな.....ということはカナタが知ってると?

でもそれはない

基本自分保守者だから」 だって、 脅しても知らないといったし、 知らないと思うよ。 あい

命張ってうそをつくとも思えない。

えるに、 ではないでしょうかと思うわけですね」 ではもう一度『食肉』 彼女の記憶容量が限界に達しないため、 をしてはいかがでしょうか?ワタクシが考 セーブしているの

まぁ確かに能力一番フル活用しているからね

生物全てに言える事なのです~お分かりですか」 記憶を留めさせて置くのにも膨大な容量が必要となります。 を全て断ち切らせた上で、調べさせたらいいんじゃないか?」 能力有無でないのですね~.....記憶の問題ですよ、過去・現在の じゃあさ、 『食肉』 使わなくてもカナタに今現在行っている能力 コレは

「喧嘩売ってる?」

まぁ、 弟子の二人だけは頭の上にクエスチョンマー 分かるわけがないのだが..... クを浮かべていた。

5 「未来については果てしないですよ、 いろんな分岐点がありますか

うことか、 るから絞り込むことができない、でもカナタならそれは可能だとい 「パラレルワー あくまで『 ルドだろ?それについていくつっ 心心 だけど」 ものパター

「醤油こと~」

古....

`つまり何デスカー?」

メグちゃんが目を丸くしながら手をあげた。

るけど、それも蜘蛛の糸に縋るようなものってこと」 「つまり、カナタならこの後について何かしらのヒントを持ってい

「 メイク か ? ?

「メイわかったもんね」

「おぉ」

メイサンは小さい胸を大きく張った

「師匠お肉食べたいんだろ!」

このツンデレをみつこは抱きしめた

カナタ邸

「おーい、かなた?」

書斎に顔を出してみれば大量の本の中埋もれていた。

うーん」

手を伸ばして助けを求めていた。仕方ないので引き上げてみた。

「あの女~」

「どうした?」

いた。 カナタは心底恨めしそうに本の中から出てきた、 腕の中にはライが

ツいきなりMEを突き飛ばしやがった」 こいつの世話して終わったからサキを呼んだんだ、そしたらアイ

サキがカナタに暴力振るうのはいつものことだけど、ライごとは

珍しいな」

「わぁ、可愛い犬や~」

カナタはしんどそうにライをメイさんに渡した後腰を回した。

「治療費ふんどってやる。で、なんかよう?」

あぁそうそう、 他の能力一切中断した上で真の武器だせ」

カナタが停止した。

「どうした?」

真の武器の気配を感じない。盗られた?」

! ?

「そんなことってあるの?」

メグちゃんが不思議そうにそういえばカナタは首を横にフッタ

「聞いたこと無いな、そもそも他人の真の武器は触れないはずなん

だけど」

「なくしたんじゃないの?」

みつこが言うとかなたは眉を八の字に顰めた

したこと無いから分からないか」 なくしたんなら召喚で出現させれるよ、 まぁ、 きみは真の武器出

「...... むかつく」

喧嘩をはじめた二人の間にわって入るように彼女、 メグちゃ んが体

を張って突っ込んできた。何故!?

とにかく喧嘩をやめる

「ちゅ!」「アポロ、なんか知ってるか?」

カナタはアポロを蹴り上げた。

「おぃ、かわいそうだろう!?」

知ってるならさっさと言えよ」

「言う前にけるのはダメだろ!!」

アポロが可哀想に見えて来た。 よろよろになりながらもホワイトボ トを取り出した。......どこから

カナタがいきなり変になったときにぼやいていた言葉』

して、 再びカナタが動き出したので、めんどくさいのでもうロアを武器化 軽く電撃を食らわせて大人しくさせた。 これでよし

ノトキハチカイ ってさ』 ジャアクナモノト ソレヲムカエルノハ モンスター ガマジワルトキ オトメナリ シ

終焉を迎えるのは.....オトメ」

カナタは凹んだ帽子をなおしながら呟いた。

「わかんね」

meも」

師匠がこんなので大丈夫かと心配する弟子二人。

終焉ねぇ..... またミツコじゃないの」

失礼な」

った。 メイサンは詰まらなさそうに隆隆の頭を撫でながらミツコの足をけ

「痛いぞ~」

·結論的にさぁ、どうなるわけ?」

・・・・・・わかりまてん

ええええええええ」。まぁ、時間経てばわかるよ」

「元気な子達だなぁ」

急いでカナタの肩に駆け上がると何かを耳打ちした、 笑っていると一匹のネズミが転がりながら駆け込んできた。 実際は喋って

ないけど

明らかカナタの表情が変わり帽子を黒色にかぶりなおし走り出した。

「何処行くの?」

ミツコがついていくと、 カナタははき捨てるように言った。

王が死んだ」

ミツコの足が止まった

アフロっ!!!

カナタはある扉を開けた、虹色に輝く移動装置

もって一時間やれ」 「ネズミ、ヨッシィー ・ミンを黙らせておけ、 放送部の機能停止、

予言が正しければ、 短く返事したネズミを見ることなく装置の上に乗った。

「おい、かなた」

とき.....ランジェが危ない」 邪悪なもの、王が変わるとき、時代も変わる..... 王が死んだ

これは直感だけど、かなりヤバイ気がする、王が変わる時、 何かと変わるものだ。 時代は

悪い方向へとだが...

新たな敵は現れ

王は死に

気候は最悪

人々は不安に駆られ助けを求めて新ハンター 協会に殺到するが、 つ手はなし。 打

情報収集に奮闘するカナタだが、

所詮世間から集めることしか出来

ない。

なかなか手かがりがつかめなかった。

一諦めた」

いきなり彼女.....カナタはそういった。

ばき

リィシャの飛び蹴り

「いったいなぁあああ!!」

一諦めんなやバカチン!切るぞ」

「切りたいだけだろう!?」

頭を押さえながらカナタはやれやれと会長椅子に座った。

不幸なあたし」 「本も奪われ、 情報も集まらず、 民衆に八つ当たりされ. なんて

そこは否定せんが、どうにかならないの?」

ミツコはそういうと机の上に座った。

宰相たちがこれ以上混乱を避けるためらしいよ。命狙われるかと守 りに行ったけど、全くそんなんなかったし」 「ならんな、そもそも王位継承をあっさりランジェに決定したのも

「 そこでちゃっ かりランジェン姫に協会援助書を書かせたんでしょ

「てへ」

り込んだ。 カナタはやれやれと肩をもんだ、 リィシャはサル吉と一緒に床に座

「テンション下がるんですけどー」

ヤスコ?何してんの?」

「え?なんか一人足りんなって」

ここにいるメンバー

みつこ

トゥディ

ヤスコ

師匠ハズキ リィシャ

みつこは旦那を見た

いたの?」

喧嘩をはじめた二人を無視してヤスコは手をうった。

サキおらんやん」

確かに

「あー、医者知らないのか」「最近見ないね~ってどうしたの?カナタ?」

彼女はサキに突き飛ばされライを押し付けれたままなのである。

ライが元気なく吠えた。

「そういえば、 いないな」

カナタがネズミを見ながら言うと、 リィシャが首をサル吉と一緒に

かしげた。

「俺見たよ」

「どこで?」

死の森」

まだ行ってたのか

任せた。 「まぁ、 新屋」 兎に角私は姫. 王女殿下の見回りに遠征するから、 後は

彼女は立ち止まった。

ン?!」 「 えぇ えええええ?!うちぃ?!このクレームウチが受け止める

「流しちゃってもいいからさ、うるさいよいちいち」

耳を押さえながら城へと移動できるワープ装置の上に乗って手を振

「頼んだよー」

消えた。

やすぃんや新屋はまだ喚いていたが、 最後には諦めた。

ウチ、今が売れときなんやけど」

なにが?」

金にがめついミツコは反応する

ほら、今ほどモンスター騒ぎになることないやろ?」

「ハンターいるもんね」

ハンター ..ってうちが言ったわけじゃないから!睨まないで!?」 が役に立たん今、自分のみを守れるのは自分だけだから

ふしん」

ヤスコに目隠しされてしまったが気にしないミツコ

「アイテムが売れてるんだ」

「そう、 スターアイテムいっぱい売ってるし」 今一番売れてるのはギロチン社だと思うな、 あそこ対モン

「ほう」

いつもならサキが自慢しようものだが、 いないというのも不思議な

話だな

師匠が何かに気がついてミツコの首を引っ張った。

`なに、ダーリン。さびしんでちゅか?」

いちいち癪に障る言い方するな」

「嫌だった?ダーリン」

「アホ、後ろ見ろ」

ん? !

マイ弟子

メイとメグだった。 窓にべったり張り付いて中をのぞこうとがんば

っていた。

•

「おいで」

あほな行為されるぐらいなら中に入れたほうが良い。 それに重要な

話はもう終わったしね。

なんも進んでないけど

師匠~なんか分かった?」

全く」

駄目駄目ジャン!

自信満々なのもいいけど、 挫折したときが可愛そうだな

「そういうけどメイちゃん、 君は何か分かったのかな?」

もちのろんだし」

なんかネタが微妙に古いな

死の森から謎の黒の集団が集まってた」

まじか!!!??」

それは悠長に会話してる場合じゃないぞ!?

すぐに行こう」

そういえばみんなが頷いた。

死の森にロアに乗っていけばあっという間についた。

 \neg なんにもないじゃん」

リィシャがつまんなさそうに呟いた

あったもん」

師匠らが遅いきん、 いどうしたんよ!」

ソレを言うなら報告が遅かった、 って言いたけど可哀想だから黙っ

できた。 戻ろうかという会話をしているとリスが顔面に張り付くように飛ん とこうかな。 弟子に甘いみったん

んぶ!?」

べりっとはがせば、 あいからわず誤字の多いメモを取り出した。

『至急王都へ着たり!謎の軍短に襲われたり!』

軍短.....あ軍団」

軍短って聞いてもなんか弱そうだな。

本当リスは誤字が多いな

悠長なこと言ってる場合ちゃうか」

もう一度ロアに乗って駆け出した。 じゃっかん疲れきったロアの背

中をなでてやる。

今度からミスタークレアに移動装置のつくりかた教わろうかな

レッツ・ゴー

ーカナタ邸」

まずは王都へ

ーカナタ視点ー

王都に着いた。

まぁワープしたから着くのは当たり前だけど.....

問題は

'..... 城何処?

城の中に装置あったはずだよね?周り外だよ~??

「崩壊」

うーん、手遅れって感じ?

がったん

何処からかしたから何かを持ち上げる音がした。 振り返るとランジ

ェが飛びでた

おねえぇさまぁあああああああ

ぐふ、 しくしくと泣き止まないランジェの背中を擦る。 ラリアット気味に抱きつくのね君

一体何があったのか

そこにいたのかよ」

この声は?

顔を上げればそこには良く見知った顔が居た。

• • • • • •

ランジェのおびえがいっそう酷くなった

お姉さま、あの人が城も兵士もみんなみんな殺しつくしたんです

!お兄様も……殺されたわ!」

「…… まじすか」

私は剣を後ろ手で鞘から引き抜いた。

裏切るのか.....我々を、それとも魔王もどきにでもなるのか

なぁ?サキ」

彼女は何がおかしいのか大笑いした。

「俺の名を気安く呼ぶんじゃねぇ・・・

いやぁ、 片手から放出されたヤミの気孔弾を何とか避けることができた。 命懸かってると人間なんでもできるなぁ

あっはははは!」

ああやって嗤ってるアイツ.....もう立派な魔王だな

は?何ソレ?ばっかじゃネーの?」 サキ……それはシラフか?ヨッパ中か?乱心か?」

うん、 ま、ミツコらが来るまでなるだけ時間を稼がないとね~ こうゆう時だけまともに返されるとはら立つな。

アポロ、武器化」

笛が手に出現、 夕を閉じ込めた。 吹こうとしたそのとき.....足元の影が輪を作りカナ

゙おぉ!?」

息ができないぞ?!体が重い!うぐぐ、

ランジェがサキによって持ち上げれる

や・やばい

. にげ、..... くそ」

息を吸うのもやっとだ.. このまま見す見す見殺しになんてしたく

イチがバチが

アポロ!」

最後の酸素を体中から集め、演奏する

サキの体が停止した。

腕から解放されたランジェは逃げ出した。

それでいい

うぅ、ヤバイ.....マジ苦しい

ガァアアアアアウー!

白い何かがヤミ玉を破ってくれたおかげで、 苦しみから解放された。

「ぐはぁーすぱーふ~~」

お前の酸素の吸い方なんかおかしい」

かっこいいねミツコが横で仁王立ちした。

みんな大集合していた。

ただし、一人は敵としてだったが

' ! -

私はやっと気がついた

お前 !私の真実の武器返せ!お前か盗んでたの」

「あぁ?これ?ほら」

ぶおん

「きゃああー」

おぉう、我武器ながら恐ろしいねー 双子ちゃんは避けた。 後ろにまだ残っていた瓦礫が粉砕した。

「サキ裏切るんか・・・・

片手で払われた。とかいいながら遠慮なく切りかかるリィシャ

どうやら、我々はこれだけの人数がいながら

劣勢のようだ

心悸~裏切り~(後書き)

サキちゃん敵です。 どうなるんでしょうかね~Byトゥディ はい、長い間お待たせしました。

「裏切り者!」

酸素を吸いながらカナタは叫んだ

「っていうか泥棒!」

説得とかそういう言葉をいうつもりは全くないらしい

いてまえミツコ」

しかも他力本願

「サキ!ハンターガールとして、魔物の長になるなんて.....恥ずか

しいと思わないのか!」

別に

「即答!?」

むしろ楽しそうにサキは微笑んだ

「この溢れる力、 破壊、死.....見ていて飽きないし、 面白いんだ」

そういってあげた右腕からはどす黒い炎が燃え上がっていた

「.....い、行かない!」「リィシャもこいよ、楽しいぞ?」

た に ん だ

考えるなよ!」

悩んだリィシャの頭をとりあえずハリセンで殴っておく

「決裂も何も、なにも交渉してないぞ師匠」「それは交渉決裂ってことでいいね」

とりあえず弟子の頭を叩いておく(理不尽

「ロア!最大出力……神埜雷!」

煙がもくもくと天に向かって上がっていく 白と青と黒が混ざった太く鋭い雷が先の上に落ちた

「死んだ?」

いせ

ヤスコの言葉を否定した

とたん

ばっさぁん

視界がクリアになったサキのつけていたマントが煙を払う

.!

全くの、無傷

「 闇舞曲!」

を現すと、無秩序に暴れだした 指を鳴らすと大地からゾンビー やら骨やら腐りかけの魔物やらが姿

<u>-</u> < !

ガードをしているうちにサキはランジェの前に立った

「ランジェ!」

カナタが叫んだ

「きゃあああああああああああ」

しかし、それだけだ

何一つ、

救うことは

できなかった.....

サキの高笑いだけが、場を支配した 「ははは、あははは、はーはははーは!」

そこにいるのは、正しく

魔 王。

気がついたら私達は病院の天井を眺めていた。

「みつこ」

ぼやけた視界の隅に見慣れた人物が映った

師匠.....じゃなくてハズキ」

「起き上がれるか」

· うん、アレ?」

皆ぼろぼろだ、包帯もグルグル巻いている起き上がるとその部屋には仲間が居た。

「お前も、無理するなよ」

「.....え」

思ったら眼帯してるし 良く見ると自分ももっと酷い姿をしていた。 片目が良く見えないと

「何この状況」

弟子達が泣きながら抱きついてきた

「師匠死んじゃったのかと思ったじゃんか~」

心配したよぉ」

「え?ちょ、何がなにやら」

「説明しよう」

絆創膏だらけのカナタが本を机の上において呟いた。

…つまりみつこ・リィシャ・ヤスコは総攻撃に出たわけだが、 のすんごい攻撃で一掃され全滅したと あの後ランジェ姫は攻撃を受け、それに切れたハンター ・ガー サキ

えよ」 「すんごいって、 シリアスにしたくないのは分かるけど真面目に言

「ミツコのみ、現在重症のさなか目覚めた」

「マジか」

配する 確かに皆固く目を閉じたまま動かない無機質な機械音だけが音を支

「で、なんでカナタか擦り傷、弟子は無傷?」

と戦闘能力のない私だからね」 いざというときのために落とし穴を作らせていたのだよ、 もとも

ったのでやむえず自分で穴に入って逃げたと 姑息な手で勝とうと思ったが、不可能に近く、 また強烈な一撃が迫

· 弟子とか助けてくれたのは礼を言うけど」

長の称号をもってるし」 分かってるよ、 不甲斐無いと自分でも思ってるさ、 これでも戦士

て回っている ロアも海里もサル吉もぼろぼろだ、 トゥディは忙しそうに患者を診

・・・・・・ランジェ姫は?」

「意識不明の重態」

「見込みは」

.....

•

何も、できなかったのか

を信じたら何でも負ける気はしないってそう思ってた。 た、強いのは自分、最強なのは自分、 ハンターガールの、 エリートって思ってた、 自分を信じたら、 立派なプロだと思って

なのに!

このざまは!!

血が滴る 悔しさで拳を強く握り締めると、 手のひらも怪我をしていたらしく、

あぁあああ!悔しい!手も、 足も出ないなんて!

「みつこ」

たかが、

サキ程度に!

でも諦めない

今なら金なんかいらないよ!

魔王抹殺部隊会議制定やーい」

わーっとみんなで盛り上がる

「で?なんで魔王いるの?」

一応異世界でも困った悩みなんですね~」

表裏一体となり敵を撃つ

のはいいけど、圧倒的な戦力に手も足も出ない

しかもリィシャとヤスコとみつこはまだベットの上だし。

「はい、案だして」

「はーハ、みんなでフルボッコ」

ボードに案その壱と書くトゥディ。 司会はカナタ

リィシャらしいあっさりした答え。

死ね

蹴された。

はい

メグちゃんが手をあげた。

「他には?」

罠を仕掛けるとか、 サキのみおびき出してからの~」

「みんなでフルボッコ」

・ そこから離れろ、はい次」

じゃあさ、 向こうに負けないぐらいの軍隊作って攻めようよ」

メイさんが言うとカナタは一瞬黙った。

放するのと、引退したハンターの奴らを回収すれば、 くもないけど.....」 「六年生を何人か捕まえてるのと、過去のハンター囚人を何人か解 戦力にならな

「けど?」

「性格に難有」

とくに六年生

「えー大丈夫だろ!世界の危機だよ!?」

り強かったら確実逃げるよ六年生」 そりゃー危機なら協力するかもしれないだろうケド、 敵が自分よ

「カナタがそうだもんね」

「うん」

否定はしない。

極力使いたくない。 「囚人はソレに乗じて逃亡するか、 「カナタヒデェ!!」 というか豚小屋から出してたまるかってんだ」 小細工をするかもしれないから

「OBは?」

「たいてい海外進出してるから集めてる間に滅びる可能性あり」

基本ハンター は気まぐれの自由人が多いから

.

皆黙り込む

「じゃあどうすんのさ」

知らん」

早速進まず

· J

駄目ジャン

「ふう」

あからさまな溜息つくなよ、つきたいのはみんな一緒だっての」

みんな「うんうん」といいながら頷く

「違うよ、 MEが溜息ついたのは一銭の儲けにもなら無いことを嘆

いてだよ」

「お前はハンターより商人のがあってるんじゃないか」

「師匠酷いこというね」

でもミンナ同じことを思ったらしく目を逸らしていた。 おい

余裕だけど、なんかおもいついたの師匠?」

思いつくわけ無いだろ」

「威張るな」

どす!!!

メイサンに傷口を殴られた..... 殺す気ですかぃこの弟子は

「てか魔王とかと協力したら?」

かなー? スケルトンいるし、 本名忘れたけどさ本人気にしてないから、 いっ

あ!じゃさ」

みつこが何かいい案でも浮かんだのか手を打った。

のは?」 「魔王たちの闘魂を使い切ってあの謎の生き物を地獄に落とすって

「おい、魔王震えてるぞ」

「でも本気」

「お前外道だな」

たから。 誰も聞かなかったことにした。それほど魔王がなんだか可哀想だっ

帽子を直していたカナタも声をあげた。

とからハンター が逝くってのは?」 じゃあさ世界最強とかほざいてる奴を囮に先走らせてからあ

「お前のが外道だよ!!」」

しかもその方法なら前回の方法のほうがまだましだし」

しらんわぁああああああああああ

逆切れかアアアアアアアアアアアノ

結局また進まない会議

510

不思議な電話

険悪ムード通り越して眠気の雰囲気が醸し出されていた。 つまらない授業のときと同じようなそんなひと時.....。

と、そのとき

ちゃんちゃかちゃかちゃか、ちゃんちゃん、 パフ!

「なにこのメロディー」

着人口」

カナタが携帯を取り出すとピっと電話に出た。

今取り込み中ですが、 下手に出てるようで上から目線の電話だな」 急ぎのようでしたらお伺いいたします」

•

カナタが沈黙する。

· ははぁ、そうですか」

「いいのか?」

みつこがそう聞くとカナタはうなづいた。

「間違い電話だってよ」

「ヘー、誰って?」

「神さん」

「「「は?」」」

ミンナは自分の耳を疑った。

「なんやって?」

なぜか関西弁になってしまったトゥディ

「上さん?」

か・み・さ・ま」

ええええええええええええええええええええ

なにをこいつ普通に言っちゃってるの!?

「神様って、なに!?なにそれ美味しい!?」

リィシャ 混乱中

「神樣仏樣閻魔樣!!!」

なぜかお祈りをしはじめた新屋

「で、なんて?」

何故か冷静なヤスコはかなたにつっこんだ。

ちゃりちゃりろれ~

なんて?んーっと、

みつこに電話したかったんだって」

あ、着メロ」

ちゃららーりら、

お前等まともな設定できんのか」

いいじゃんダーリン、 ダーリンのもそうしてあげようか?」

いらん!」

「もしもしー?」

ミツコが電話に出ると、向こうからのかっるいお返事がやってきた。

はろはーん、かみさまでっせー

\ \ \ \ \ \ \

みつこ。 興味なし

今世界がガチで終焉の危機を迎えてるからさ~ちょっくらたのん

ますわ

「あー、 コッチも何かしたいのはやまやまなんすけどね~難しくっ

あらぁそう?でも大丈夫、こっちの『聖なる福音』の力を送るか

「まーじでぇー?ありがとー」らオケオケ

はいはい – それじゃねー

ぴ

「なんて?」

危機です、かなり。 でもあんまり分かってない

不思議な電話~神様からの?

「今から来るってさ」

会議中だったこの部屋が急にし.....んと静まり返った。 元々眠気に負けて沈んでいたけど底は気にしない。 といっても

' なぁ、最近思ったんだけどさ」

トゥディがお茶を汲みながらカナタに問うた。

「この世界何でも有じゃない?」

.....

同じくお茶をすすって聞こえなかったことにしたカナタ

「いつくるん?」

海里の上にのってモコモコを楽しむヤスコ。

「もうすぐ?」

どっごぉおおおおおおおおおおお ピッカァアアアアアアアアアアアアアアアアアああああああ あああああああああああああああああああああああああああああ

.....

煙が部屋を包み込み急いで喚起。

「げほ!」

「なんだぁ~!?」

としてもにこれにつは 埃et1が窓の外へ旅立っていった。

そしてそこにいたのは

「亀―」

うん、亀がいた。

「 亀」

「かめ?」

「なんで、亀?」

ミンナで次々と亀の名を呼び、 つつかれた亀は首を引っ込めた。 ブーメランでつつく。 リィシャなどはサル吉を武器化し、

先ほどまで少し機嫌よくお茶を飲んでいたカナタからだった。 なんとなく不穏なオーラを感じとったハンターたちは背後を見た。

カナタ.....?」

みつこが呼びかけるとカナタは顔を上げた。

天井には、穴が。床にも、穴が……

・・・・・・・・(汗)」

お怒りのようだ。ミンナ危険を察知してカナタからはなれた。

「ミツコ」

「は、はひ?」

声裏返っちゃった

にっこぉぉ

亀の甲羅をカチ割ったら何が出てくると思う?」

やめろぉ!やめたげてぇ」

「亀に罪はないよぉ~! (多分)

「神様かも知れんのやろぉ!?」

トゥディと新屋と仲村で止めるとあることに気がついた。

· かみさま?」

亀を見てそういうと、亀が首を出した。

神様の郵便屋さん、KANMEだよ・ん

神様の声が亀の口から聞こえた。 媒介にもなるようだ。

「って、落ち着けかなた!トンカチを捨てろ」

ひとまず落ち着いて

何くれんの?」

みつこは亀を持ち上げて (正しくは虫取り網で掬い上げながら) 言

福音だよ

亀の口が一瞬で光がたまると、ミツコに向けて発射した 「ぶぶ!?」

ロアが怒って亀に体当たりした。

ペかー!!

ばっさぁ

ミツコの背中に羽が生えた、 ツコの身体に美しい鎧が現れた。 と思ったらその羽は空気に溶け込みミ

「うわ何コレ」

5 鎧 ? 」

「重くない?」

「全然重くない、てか鎧だけかよ」

気孔弾とか放てるよ、魔法だって使えるようにした

「まじで?ロアいらないね!もう」

冗談交じりに言ったミツコだったがロアは本気にし必至にロアにま とわりついた。

「っていうかミツコだけ?」

リィシャがそういうと神様は笑った。

うん

リィシャは全力で亀を窓から投げ捨てた。

不思議な電話~からの?

· みつこLVあがったン?」

ヤスコがそう聞くとみつこは首をかしげた。

「さぁ、自分でも良くわかんない」

ぶっちゃけ鎧着ている感覚すらないし

じゃあ試してみようよ」

みつこは思った。 二人の弟子も興味津々のようで目がキラキラと輝いている。 メグがうっきうきとそういった。

詰まんないことしたら二人に攻撃されるな、と

「えー また今度ね」

「何それー」

「やってよー」

二人に小突かれリィシャに興味津々のの瞳で見られ仕方無くうなづ

たしかに」 魔法でもやってみたらどうだ?基本お前自身が魔法属性だろう」

天井に手をかざし、呪文を唱えるハズキにそういわれ魔法をすることに

゙......『メテオ』!!」

ドッがァアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア あああああああああああああああああああああああああああああ ああああああああああああああああああ アアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアああ

ええ、 みつこはカナタによってかなり怒られたのでありましたとさ

h

宣戦布告

とりあえず、 協会を破壊したことは百歩譲って許すと

ゴツーつ頭にのせたままみつこは口をWの字にしながら頷いた。 お茶をすすりながらカナタはみつこの方をチラ見した。 大きなゲン

「MEが倒せばいいのだろ」

、そう簡単に行くかな?」

みんなが顔を上げればそこに居るのはミスター クレアだった。

-クレア」

「久振りでーすね皆さん」

るූ 両手を広げて抱擁を求めるクレアを無視してみんなは再び会議に戻

「酷いですね」

「今までどちらに?」

ハズキが一応そう聞けば彼は面の下で微笑んだ。 (気がする)

「地獄百間試練の塔のダンジョン」

「ウッワ面白そう」

めぐはメイの口を閉めた。

ですよ」 「そこにあると言われる四天王の最強の武器を探しに行っていたの

「おぉ」

ミンナが興味をもつ。

しかし、 彼自身ソレらしいものは持っていないように見える。

'.....で?何処に?」

「おや?」

『おや?』ってなに!?」

ミスター・クレアは笑った。

「どこかで落としてきたようですね、 はっはっ」

ばき

そして倒れたミスターをトゥディが看病スルはめになった。 カナタのハンマーおとしガ綺麗にはいった。

探しに行ってきてくれ.....リィシャ ミツコの弟子達」 ・ヤスコ・ミツコ... . あと...

ָל | |

はいい

いった。 二人の若いハンターハうっきうっきと手を上げると我先にと走って

「あ」

それはもう、ミツコが止めるまもなく

「いやぁ、駄目だと思うよ?」「あの二人だいじょうぶかなぁ?」

髑髏の煙が中に舞っては漂う

「だって、どんな品物か分からないわけだし?」

あった。 みつこはしょうがなくロアを使って短気な弟子を回収しに行くので

「たくもう、世話やかすんだから」

渡した。 みつこはロアの背にまたがりながらすっかり寂れてしまった町を見

うん、なかなか足の速いコらだな。

影一つ無い。

「あ、 みーつっけ」

まずは一人目めぐちゃんを回収。

そしてもう一人、メイちゃんなんだけど.....

「までごらー」

あのこ宝探しじゃなくてモンスター 探しに走ってるし

「ロア」

なんとかメイさんを追いかけるが早い早い

きゃあああああああ

急いで駆けつけると逃げてきたメイさんとぶつかった。 メイさんの悲鳴が上がった。

イタ.....」

「師匠・・・助けてぇぇ!!」

ドスン、ドスン...

「おわお」

土人形 + 巨大化 + 鎧= 反則じゃない?現れたのは、鎧に身を纏った、土の巨兵

「はああああいい!?」

ロアの上にメイさんを乗せて逃亡を図る。

いきなりのウォーミングアップにしては..でかすぎるんじゃない

でしょうかねえぇ!?

「あ、 ミツコ.....ってなんじゃありゃあああああああああ

さすがみんなの反応もいいね

しかし、 只一人だけカナタ愛用のお茶を飲みながらのほほんと言っ

た。

あ、ありました。武器」

..... あれか!?

轟 ! !

剣から衝撃波が放たれた。

避けられない!これは...

チーン、みんなの心が意思疎通したらしい、 にトライアングルを鳴らした。 ヤスコが雰囲気のため

•

•

5ゅ、どぉおおおおおおおおおおおおん

爆発と衝撃波が相殺しあった。

「おぉぉ!そういえばヤスコの真の武器.....トライアングルだった

「おぉ」

本人も忘れていたらしい。

「よっしゃ、反撃だ!」

「うっそーん」

巨人兵には魔法も打撃系も聞かなかった。

「反則だぁ!」

分に当たってまた癇癪をおこした。 リィシャは泣きながらブーメランを投げつけ、 それが戻ってきて自

「うがぁあああああああ」

「うっるっせーよ!!」

みつこはリィシャを攻撃した。

「ミツコなんとかしろやぁああああああ」

だよぉおおおおおおおおおき!」 「リィシャそういうのなんていうか知ってる?無茶振りっていうん

ところでお茶を飲んでいた。 わいわいと混乱しているハンター を尻目にカナタは一人安全そうな

カナタさんカナタさん」

「なんですかなトゥデォ」

゙え、またうちの名前違うんですけど.....!?.

カナタが注いでくれた髑髏茶を飲まずに手で持って4分がたった。

「たすけんの?」

「誰を?」

· みつこら?」

カナタはお茶をすすった。

「私に何が出来ると?」

武器、本。真の武器、笛。

..... みんながんばれー」

「ヤスコ、 お前の真の武器なら聞くんじゃない?!」

「そう?」

「試してごらんよ」

ちゅ リィ シャとみつこに言われてヤスコは真の武器を取り出し鳴らした。 ・どぉおおおおおおん

砂煙があがる。

うぉらぁああああああああ

そして リィシャ が砂煙が消えないうちに攻めていった。

ばし

「うわぁ」

叩き落とされた。

重べ 青し

「うっわ」

煙が晴れる。

どうやら、全くの無傷らしい。

それはミンナも思ったことであった。「どうしてこう、上には上がいるのかな!?」

・トゥディさん、私は思ったのですが」

「なんでしょう、カナタさん」

ら呟くようにいった。 虫のようにはたかれチョコチョコと動きまわるミツコたちを見なが

「もうこの世界の話。 BADENDでもいいんじゃないでしょうか」

「駄目です」

「ですよねー。_

もうお茶も終わり扇子で自分を扇ぐ。 何もしてないけど諦めモード

全開。

トゥディも特に何かできるわけでもないので何も言わない。

「仕方ない。ちょっと反則だけど、アレ。 使いますか?」

とやすぃん屋しんやのほうを向いた。

「アレ?」

「MAXドリンク」

「ぱちもんぽい!!」

ミツコー!&使えないハンター達」

ん ?

ミンナのほうにドリンクを投げる。 「あ"ぁ!?」」

「受け取ってー」

がちゃん

「届いてないよー!」

本は投げれるけど。BYカナタ

「そりゃ私筋力無いもん」

「参ってないさ、仕方ないではアレ2」「カナタ参ったなー」 「まだあるの!?」

バーズー華ー てっててー

期、 この銃弾は種でね即効性の成長力を誇り、 いやいや、 蔓に巻きつけられ栄養を奪われ最期にはなんと、満開の花が咲 いやいやいやなんで先端に花さいてるの!?」 一度撃たれ当たるが最

「最期だけ聞くとなんかいいな!」

しんやの突っ込みも無視して、バズーカを設置する。

「では、発射。」

どっこーぉん

後ろ前逆とかいう初歩的なミスしなかったのはいいですけど~」

た。 発射されたミサイルを見ながらミスター クレアはのほほんといっ

「味方に当たるほうが早そうですよ?」

「あらら」

「みんな逃げてー!」

これではドッチが敵でとっちが味方が分かったものではない。 しんやの悲鳴で気がつき全力で逃げるハンター

でもあたったから良しとしよう。

煙がはれる。

「やっぱりBADENDの運命じゃないかな」

カナタは諦めるを使った。

おぉおおおおおおおおいごるぁ!カナタ! !邪魔するなら帰れ」

「そう怒るなよリィシャ」

「怒るワぁー !!」

ごもっとも。

カナタは帽子を緑色から黒い帽子に変えた。

「分かった帰るよ、帰って祈ってるよ」

「何を?」

「冥福を」

リィシャはサル吉 (ブーメラン化) をカナタにぶつけた。

きついいいん!!

ミツコの周りが金色に輝く。

「よっし!チャージ成功」

どうやら今までチャージしていたらしい。

「わかったー」

ヤスコ・リィシャ

!離れて」

ミツコの反撃海里に乗ってマッハで逃げる。

命がけの反撃魔法やるっきゃない

ずっどぉぉーーーん

「おい、 たのに」 「えーだって急だったから~ネーム決めといてくれたら表示変わっ カナタ!もう少しまともな技名ないわけ!?」

ネーム登録係りカナタネーム表示係りカナタ

「忙しいのよ私」

った光が敵を飲み込んでいく。 ように光が地面に落ちてきて敵を攻める。そして大地にたまってい やるっきゃない魔法は強烈だった。 まるで彗星でも落ちてきたかの

THE END!!

そこに敵の姿は跡形も無くなかった。 かわりに、 キラキラ光る指輪が三つそこにあった.....

「コレが最強の武器?」

「誰が装備するかってのが問題だね~」

はい、

盾・剣・鎧です」

みつこがそういうとミンナはミツコのほうをみた。

めぐちゃんは微笑んだ。

師匠帰ったらもっとめぐを鍛えてね」

「師匠しか居ないんだから仕方ないだろー?ま、「え」 雑魚はこのメイさ

え

みつこは目を丸くした。

何でME決定なってんの!?」

「大丈夫だ、俺たちも戦うさ、バックで」

「バック!?ハヅキ戦士のクセに大人気ないぞ!?」

指輪を持ってきたヤスコがすぽっとミツコの指にはめた。

うわー!めんどくさいんだけど」

まーまー、 俺らじゃ無理やきん、 みつこ任せるワー

笑顔でリィシャが言うとやすこもそれに頷いた。

THE他人事

大丈夫」

カナタがみつこの肩をポンッと叩いた。

・ENDは期待して無いから」

お前だけ死んでろよ」

ざあああ

L

空一面真っ黒に染まった。

急に

「なにこれ」

人々の手も真っ黒に染まった

死の魔法ダー クシャドー

「ちょっとまて、なんでその名前だけかっこいいんだ」 自動的に表示されたものに突っ込まれても」

アイコン、たまに自動で発動

「てかやばいよ」

白いヤスコの肌は黒に犯されていっていた。ヤスコが手を見上げた。

死の魔法だ」

黒い闇に覆いかぶされ視界は真っ黒、 こえない。 誰も見えないし、 誰の声も聞

みつこは必至に暗闇をもがく。

・・・くそう、卑怯だぞ!

ぱぁぁん!

光が闇を退けた。

「おぉ」

感心したが、そこはもはやみつこの知る場所ではなかった。 この知り合いが縛り付けられていた。 の並ぶ神殿のような場所、 - 際高く長い神殿の柱にはそれぞれみつ 黒い石

. し、しょー 」

めぐが辛そうにうめいた

· はーはははは!」

悪役のような笑い声に顔を上げる。

正しくはこさされた、 良く来たなみつこ!お前なら来ると思ったよ」 だけどね!」

だってぶっちゃけ来るつもり無かったし。

「この世界を支配するのは俺だ」

ふんしん

「この世界の王として君臨する前に」

「嘔吐してろよ~」

「お前を倒す!」

`えぇ!? (マスオさん風)」

「真面目にきけぇえええええええ!!!

サキの闇の砲弾が飛んできた、ソレをひらりとかわすと、 大地が溶

けた。

「えええ・・」

、ふふん、みたかこの力」

サキが勝ち誇ったように右手を上げた。

もうお前なんてライバルでもなんでもねぇよ!」

「やったぁ!」

「喜ぶな!!」

「ぶーなんだよう」

みつこは本気で残念そうな声をだした。

「っていうかさーサキ?みーはさ~もともとお前なんてライバルで

もなんでもなかったから」

あん?」

みつこは武器を振る作動させた。

「思い出させてあげる」

キィィン、チャージ

「お前がいつだってみ— の下だったってこと」

「ほざけ」

「下克上?は?何ソレ美味しいの?・ ・みーはいつだって」

みつこがわらう

「最強なんだよ!」

轟 ! !

ミツコの魔法フルがサキに向かって放たれた。

「俺のほうが、お前より上なんだよぉぉぉおおおおおおお!!」

轟!!

サキの魔法フルがみつこに向かって放たれた。

二つの攻撃が直撃した。

『たっ!!ごめんなさい』

『いや、いいっすよ?』

『大丈夫か?』

『うん』

ぶつかった人は特に気にしなかったようで、 いい人でよかった。 あっさり許してくれた。

『くぅ~ んきゅぅぅ~ んくぅぅん』

うにめちゃくちゃ甘えていた。 ぶつかった相手のパートーナーだろう小型犬は、 主人を心配するよ

ていうか.....甘えすぎだ。

『雷!ちょい落ち着けって平気だから』

り込んだ。 頭を撫でたところで、 やっと落ち着いたらしく、 横でちょこんと座

『うん、雷ってつけた。そっちは?』『ヘー可愛いな、パートナー?』

三人はついでに自己紹介をスマすことにした。

サキってよんでくれな』 あぁ、 俺 神チャー仔サキ.....誰がつけたんだろうなこのあだ名、

うん、茶色』

誰のかな?ミィ?それともサキ? あ~過去が見える。 こういうのっ て人は走馬灯っていうんだよね~

轟轟と吹雪く極寒の地、 ヤスコはハンターじゃなくペンギンでした

 \Box \neg あ、 師匠のことしっとん?だれなん??』 もしかしてやすい んや新屋のパー

にゆっ

『ぎゃわっ!?』

ペンギンの股の下から女の子が顔出した。

・・・・・自重しましょうよ。

『あたし、ハンター 初級のみつこ』

 \Box うち、 ハンター 見習ヤスコ..... 何のようなん?』

あの後大変だったなー

゚すごい!すごい!やっぱすごいな!』

初対面で切りかかってきた阿呆は大喜びだった。

『だれ?』

『え?だれ?』

『いやいや、聞いてんのコッチだから』

おれ?リィシャ よろしく!!君強いよな!一回殺り合おうや』

『やだよ!』

バトル好きもまだまだ健在だよな!あいつ。 あたしの死亡フラグ? てかヤッパリコレって

『ねぇね~十歳になったらどうする?』

あ M 繋いで森の中をあるいていく。 eの声がする。 幼かった自分よりちょっと小さな少女と手を

『二十歳までには結婚したいよね』

何故? やっぱ را M eの死亡のお知らせかなぁ アレ?なんか泣けるのは

『ディダ・ みつこ・MC (マイケルクリスチャ ンの略)がお前の名

『長!えーと情報屋さん』

『カナタでいい』

『じゃあカナタ』

手で、 あぁ、 ティ仲村 でも微かにいつもあざ笑うように私らハンターを見守ってたっけ。 いつも髑髏茶を飲んで室内でも帽子を被っているカナタは無表情に みんなこう振り返ったら我侭だったな・ ソレに振り回されるトゥディとやすい んや新屋にレストラン ・わがままで自分勝

まよわせ~ るまよわせ~る・ マヨウサもなつかしー

......なぁ、サキ」

あ?」

バチバチバチと火花が飛び散る。

くなったし、 し、お前はダイスキなパートナーを捨てて、 あたしら変わったよね?私は今お気に入りのマントつけていない ヤスコも自分の未来を見ようとしてる・ リィシャだって大人し

「だから?」

だから?別に?

「そういうのって、 いい意味でも悪い意味でもさ『成長』って言う

んじゃないの?」

「ヘー?だから?それがどうしたんだよ!!」

「だから・・!!!

ミツコの攻撃が消えた。

-!!

サッとミツコとサキの間にみんなが立った。

「いつの間に!?」

だから、こういう大切な時を無視したら、 今までの『成長』 が無

駄になるんだよ!!」

- - - かなた!?」

サキの背後にいつの間にかカナタが飛んでおり、 かなたはその分厚

い本を振り下ろした、 ガッツン!!下でリィシャのいい笑顔。

゙゙ぐるぅぅぅ・・」

雷も唸る。

は強かったじゃん」 「お前はさ、サキ。 そんな『力』 が無くたって。 自分で言うぐらい

「う、黙れ黙れ黙れえ・・・!!!

時は人を変えるよね、 くなかったな・・。 んだろう?それが『成長』というのなら、 変えなくていいのに。 私は『成長』なんてした どうして人って変わる

できればあのまま変わらずで居られたら・ 良かったのにね」

誰が言ったセリフか分からなかった。 そしてそのセリフは、 誰にも届かなかった・

もう一度、もう一度やり直せるなら。

また仲良く馬鹿してさ、いろんな面倒ことに巻き込まれてさ、 い世界でさ、楽しくやろうよ・・ 新し

「な、サキ」

うん」

闇黒は消えた。

サキをかどわかしていた闇は消えた。

魔王も満足気に闇の欠片をかき集めルンルンとさっていった。

「きゅ~んくううん」

ライがサキに飛びついた。

みつこは大きなロアにもたれて静かに息を吸った。

床に座り込んだミンナは疲れたように溜息をついた。

サキ、お帰り」

さしのべた。 トゥディは疲れたように微笑んだ、 仲村も新屋も笑顔でサキに手を

·・・・っただい『ぱぁん!!!』」

最期まで言う前にかなたはサキの頬を殴った。

「ってぇ~な!」

愚か者!!お前なんてハンター 止めちまえ

「ちゅう!」

アポロがカナタの頭の上に飛び乗った。

「サキ、迷惑かけるのももいい加減にし」

「「ヤスコがいうか」」

カナタとみつこは同時に突っ込んだ。

「サキっちゃーん?ないてんの?」

「リィシャ・・サル吉うざいぞ」

涙流すサキにサル吉はバナナを投げていた。

ごめん、 ほんま皆ゴメン・ ・俺が悪かった・ んだろ」

チョップ。

が仲間で良かった。 けてくれて・・ 冗談やって、俺一生かけてミンナに恩返しするから・・俺ミンナ ありがとう雷お前は俺のさいこーのパートナーやで」 ほんまに良かった。 ありがとう、ミンナ俺を助

うっかんどー」

どっこぉが?」

みつこはロアから顔を上げた。 MEGUとMEIは正反対の様子を見せていた。

「あぁぁ‐‐‐‐・・!!」

いい笑顔。 ミンナビックリしてみつこをみた。

「帰ろーか!」

ロアにのるとみつこは駆け出した。

「待てよ、俺も乗せてー」

「海里GOI」

リィシャがサル吉の首を掴んで急いで追いかける。

ヤスコも海里に乗って追いかける。

こを掴んだ。 ロアにのったみつこは目の前をのんびり歩いていたカナタの首根っ

「ぐえ」

「カーナッタ 帰ろーゼ」

「あ、帽子!」

にのせた。 ロアの背中に乗せたカナタの帽子を奪ってミツコは帽子を自分の頭

任せとけって、金の亡者のハンター 帰ったら仕事待ってるよ、 未確認生物的な魔物が残ってるからさ」 ・みつこに何でもお任せ

•

『十年後何になりたい?』

きるとおもう。 てきっと、 何度でも、 十年後も、 今以上に暴れて、元気で、楽しく人生を生きることがで 大丈夫、自分はきっとみんなとまた出会えるから、そし 百年後も、千年後も、 未来でさえも、きっと・・きっと

だから

大物になりたい!!』

それがMeの夢でいい、 それだけで、 十分だ!

十年後は何になりたい? (後書き)

ダラ続けるよりかはいいんじゃないでしょうか? という— ことで無事終了。 あんまり盛り上がらず終了したけどダラ

と・り・あ・え・ず

祝!完結

の、クレームは無しの方向で

もしかしたら~ また復活するかも?別次元のお話で

ハンター協会は周りの人に浸透した。

残りの魔物の討伐するために、ハンター協会別名「 て呼ばれるようになるのはまだ先のことである。 何でも協会」 つ

レストランティ仲村は評判が人を呼び、 今ではおなじみ定食屋から

高級レストランにまで進化した。

もかわり、 やすぃんや新屋やギロチン社やロード社などどいう対魔物用のお店 魔物の手名づけ方講座を開くようになった。

りに五つ子のチビッ子だった末っ子が継いだ。 ちなみにハンター 協会会長だっ たカナタは逃亡を図り、 まだカナタが何処にいったのかは誰も知らない。 今では変わ

そして王国、 ひとまず誰もが一安心した。 ランジェは何とかし 命をとりとめ、 再び女王として君

リィ みつこも協力し始めた。 シャ は死 の森の中に消えた国に光を運んでいることが分かり、

なっている海里の姿が良く見えた。 南の国って・・)たまに送られてくるはがきには暑さで溶けそうに ヤスコは海里と一緒に南の島に永住を決めたらしく。 (ペンギンに

だから、 サキはというと、 キに健気に傍に居るのはライだけであった・ 永住牢屋のなかで人生を一生過ごすことだろう。 牢屋の中、 やはりサキが行った罪は裁かれるもの そんなサ

そして、みつこはというと・・

、ということで、ダーリン準備はOK?」

「もちろんだ」

新婚と一緒で暇さえあれば狩に出かけていくのであった。 のかもしれない・・。 もしかしたらハンター 夫婦にはコレが一番のコミュニケーションな

「さー行くか!なトリディさん」

いやうちの名前トゥディだから!鳥じゃないよ!?」

イーじゃんべっつに」

「よくないし!しかも何でウチまで?」

「何いってんの」

必要なものを背負ったみつこはトゥディをみてニカット笑った。

たら困るから」 『カナタ捜索依頼』だしたのYo u じゃ ん?見つけたとき骸だっ

「カナタさん殺さないで!?」

地図を見ながらハズキはううむと唸った。

会長は夢幻廻廊の神殿に何しにいったんだ?あそこは危

険ランクSSなのに」

「さぁねー?ミスター まっさかあそこに独身送公会があると思わないしね」 ・クレアに聞いても『さぁ』 しか言わない

ロアがみつこのマントにしがみつき頭の上まで上っていった。

こらカナタの帽子に穴開けると殺されちゃうよ」

前回奪った帽子、 ちゃんと返さないと怒られちゃうしね

「みーっつっこ」

ん?」

みつこは後ろを見た。

リィシャ にサル吉

「うき?」

゙うん、バナナはいらないかな」

「俺も行くー」

いいけど」

いるリィシャ、 お前は武器商人かと突っ込みどころ満載の沢山の武器をぶら下げて リィシャー人で戦争に行けそうな・・。

「まってやー」

「ヤスコ?」

海里に乗ってヤスコがやってきた。 んがり焼いて血色良く見える。 すこし白雪のようだった肌がこ

「なにしてんの?」

うちは本当はいきたないんやけど海里がいきたくてたまらんて」

っていうのにはさすがにヤスコの命令でも嫌だったようだ。 もともとヤスコ以上に戦士根性の海里はのんびり南の島で大人しく

なんでおやつ袋リュックに沢山はいってんの!?」

「コレは必須やデ!」

駄目だコイツ。

みつこは溜息を付いたあとロアを大きくしてその背中に乗った。

「「「オオぉー・・・・!!!」」「行くぞー!夢幻廻廊の神殿!!」

ハンターはジッとできないそういう定めなんだねきっと。

ということで次回に続く・・かも?

559

PDF小説ネット発足にあたって

ビ対応 行し、 など 公開できるように 小説家になろうの子サイ 部を除きイ 最近では横書きの F小説ネッ の縦書き小説 の縦書き小説 います。 ・ンター そん をイ を思う存分、 たのがこ な中、 ネッ 書籍も誕生しており、 タテ書き小説ネッ ト関連= 誰もが簡単にPDF形式 ネッ て誕生しました。 ト上で配布す 小説ネッ 横書きという考えが定着しよ てください。 トです。 既 存書籍 は 2 0 タ いう目的の基 07年、 の電子出版 小説を作成 小説が流 ンター

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。 http://ncode.syosetu.com/n9247g/

HUNTER • GIRL

2010年10月9日17時25分発行